

学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学 2020 秋

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

目次

1. 全体概況	3
昨年度秋学期との比較	4
回答率の変化等	4
目的変数への寄与度	5
主要項目の科目区分別集計値分布	6
2. 領域ごとのサマリー	8
3. 項目別集計結果	9
参考資料 1 実施率	21
1-1 アンケート実施率科目区分別	22
1-2 アンケート実施率（学部） 2005 年度春学期～2020 年度秋学期	23
参考資料 2 自由記述回答 頻出キーワード分析	25
自由記述回答 頻出キーワード分析について	26
<集計グラフ>	
【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点	29
全学	30
学部別	31
回答人数帯別	32
学年別	33
出現率前回比較 全学	34
出現率前回比較 学部別	35
出現率前回比較 回答人数帯別	39
出現率前回比較 学年別	42
【改善点】改善できる点	45
全学	46
学部別	47
回答人数帯別	48
学年別	49
出現率前回比較 全学	50
出現率前回比較 学部別	51
出現率前回比較 回答人数帯別	55
出現率前回比較 学年別	58

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差¹は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、 「4 どちらかと言えばそう思う」…4点 「3 どちらともいえない」…3点
 「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点 「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容	平均					標準偏差			
		年	20	19	18	17	20	19	18	17
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.58	4.54	4.51	4.47	0.39	0.31	0.33	0.33
		秋	4.63	4.58	4.54	4.49	0.39	0.29	0.31	0.32
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.56	4.55	4.51	4.48	0.43	0.31	0.32	0.33
		秋	4.62	4.57	4.53	4.48	0.42	0.29	0.32	0.32
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.58	4.53	4.48	4.43	0.37	0.30	0.31	0.33
		秋	4.61	4.56	4.50	4.43	0.41	0.28	0.30	0.32
Q4	教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した	春	4.54	4.44	4.38	4.35	0.42	0.36	0.38	0.40
		秋	4.57	4.50	4.42	4.35	0.43	0.34	0.36	0.38
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.57	4.57	4.54	4.51	0.46	0.31	0.32	0.33
		秋	4.64	4.60	4.56	4.50	0.41	0.30	0.32	0.33
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.44	4.49	4.44	4.40	0.50	0.33	0.35	0.36
		秋	4.54	4.52	4.46	4.39	0.46	0.31	0.35	0.36
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.53	4.42	4.36	4.31	0.34	0.31	0.31	0.33
		秋	4.56	4.45	4.38	4.31	0.35	0.30	0.32	0.32
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.31	4.23	4.14	4.07	0.41	0.36	0.37	0.38
		秋	4.39	4.26	4.18	4.10	0.43	0.37	0.38	0.37
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた(できる)	春	4.17	4.18	4.11	4.05	0.45	0.36	0.35	0.35
		秋	4.28	4.21	4.14	4.06	0.43	0.34	0.35	0.35
Q10	私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた	春	4.40	4.35			0.45	0.36		
		秋	4.50	4.39			0.41	0.35		
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.12	4.20	4.16	4.12	0.62	0.45	0.44	0.45
		秋	4.25	4.25	4.19	4.12	0.56	0.43	0.44	0.45
Q12	私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる	春	4.47	4.42	4.39	4.35	0.42	0.36	0.35	0.36
		秋	4.55	4.45	4.40	4.35	0.40	0.34	0.36	0.35
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.89	4.55	4.54	4.53	0.20	0.29	0.26	0.29
		秋	4.85	4.49	4.45	4.45	0.26	0.29	0.30	0.28
Q14	この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか	春	3.35	3.06	2.90	2.86	0.65	0.57	0.59	0.57
		秋	3.38	3.14	3.00	2.95	0.71	0.63	0.64	0.62
全質問合計(Q13、Q14を除く)		春	4.44	4.41			0.34	0.30		
		秋	4.51	4.45			0.33	0.29		

※Q10 学生の成長実感は2019年度に新設です。これに伴い、全質問合計も昨年度からの表示としてあります。

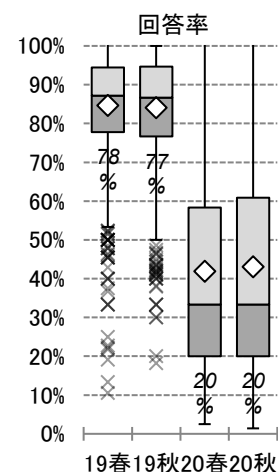
¹ 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。

コロナ禍への対応で不利な条件にあったにも拘わらず、ほぼ全項目で評価が改善しています。Q9 目標達成における授業別集計値の平均値は 4.28 と、春学期の 4.17、昨年秋学期の 4.21 を有意に超えています。他項目も含めた昨年度同時期との比較は下表の通りです。前回の集計で大きく低下していた Q11 興味関心の向上と Q6 教材・教具効果の両項目も、昨年同時期と「有意差なし」まで盛り返しました。他の 12 項目はすべて昨年同時期を有意に上回っています。

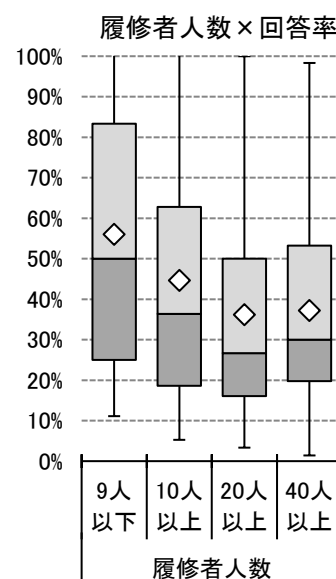
項目	実施	n	平均	標準偏差	前年同期比	
					実測値	t検定P値
Q13出席率	'20秋	1,113	4.846	0.260	△.360	5E-174 **
	'19秋	1,127	4.486	0.292		
Q14平均学修時間	'20秋	1,113	3.378	0.708	△.235	1.1E-16 **
	'19秋	1,127	3.143	0.631		
Q8質問・調査努力	'20秋	1,113	4.388	0.426	△.123	1.9E-13 **
	'19秋	1,127	4.265	0.367		
Q7授業に臨む姿勢	'20秋	1,113	4.564	0.350	△.118	1.3E-17 **
	'19秋	1,127	4.446	0.304		
Q10学生の成長実感	'20秋	1,113	4.504	0.407	△.118	1.4E-13 **
	'19秋	1,127	4.386	0.347		
Q12有用性	'20秋	1,113	4.553	0.401	△.102	6.5E-11 **
	'19秋	1,127	4.451	0.341		
Q9目標達成	'20秋	1,113	4.283	0.427	△.069	1.3E-05 **
	'19秋	1,127	4.214	0.342		
Q4事前・事後学修指示	'20秋	1,113	4.567	0.435	△.067	2.4E-05 **
	'19秋	1,127	4.500	0.341		
Q1教員目標明示	'20秋	1,113	4.628	0.388	△.049	0.00033 **
	'19秋	1,127	4.579	0.289		
Q2教員努力	'20秋	1,113	4.623	0.415	△.049	0.00062 **
	'19秋	1,127	4.575	0.288		
Q3教員シラバス対応	'20秋	1,113	4.605	0.413	△.048	0.00063 **
	'19秋	1,127	4.557	0.283		
Q5教員質問相談対応	'20秋	1,113	4.636	0.412	△.034	0.01351 *
	'19秋	1,127	4.602	0.302		
Q6教材・教具効果	'20秋	1,110	4.535	0.460	△.016	0.16864
	'19秋	1,127	4.519	0.314		
Q11興味関心の向上	'20秋	1,113	4.248	0.559	▼.007	0.37831
	'19秋	1,127	4.254	0.433		

特に、Q13 出席率、Q14 平均学修時間の伸びは大きく、Q8 質問・調査努力や Q7 授業に臨む姿勢も改善が顕著です。遠隔授業が定着する中、「学生が積極的に学ぶ姿勢」が強まったようにも見受けられます。一人で頑張らざるを得ない状況が続いたことが学習者としての成長を促したとすれば、価値ある「副産物」と言えそうです。

但し、右図に示す通り、回答率（回答数÷履修者人数）は春学期と同様に昨年度を大きく下回っています。「真剣に授業に取り組み、且つ授業に肯定的な認識を持つ学生ほど回答する割合が高い」と仮定した場合、回答にはバイアスがかかっている可能性も否定できず、肯定的な気持ちで授業に臨めば、当然ながら得るものも増えるはずで、時間の経過とともに心証が強化されてきたとも考えられなくはありません。良好な結果ですが、少し割り引いて数字を受け止めた方が良い部分が含まれるかもしれません。



右図は、履修規模（履修者人数を四分位数で区切って階級としました）による回答率の違いを調べた結果です。9名以下の比較的少小規模な授業でも回答率8割以上に達した授業は29%に過ぎません。授業改善に向けた課題を形成するにも、これまでの授業改善行動の効果を測定するにも、一定以上の回答率はキープしたいところです。前回の分析では、「回答率の高さと有意に相関しているのは、Q5 教員質問相談対応」であるとお伝えしましたが、今回のデータでも同様です。回答率とQ5 教員質問相談対応の間には弱いながらも有意な正の相関が確認できます。普段から学生の声（質問や相談）に耳を傾け、適切な対応（効果的なフィードバックなど）を取る姿勢を示していることが、回答率を高く保つ上での一助にはなりそうです。

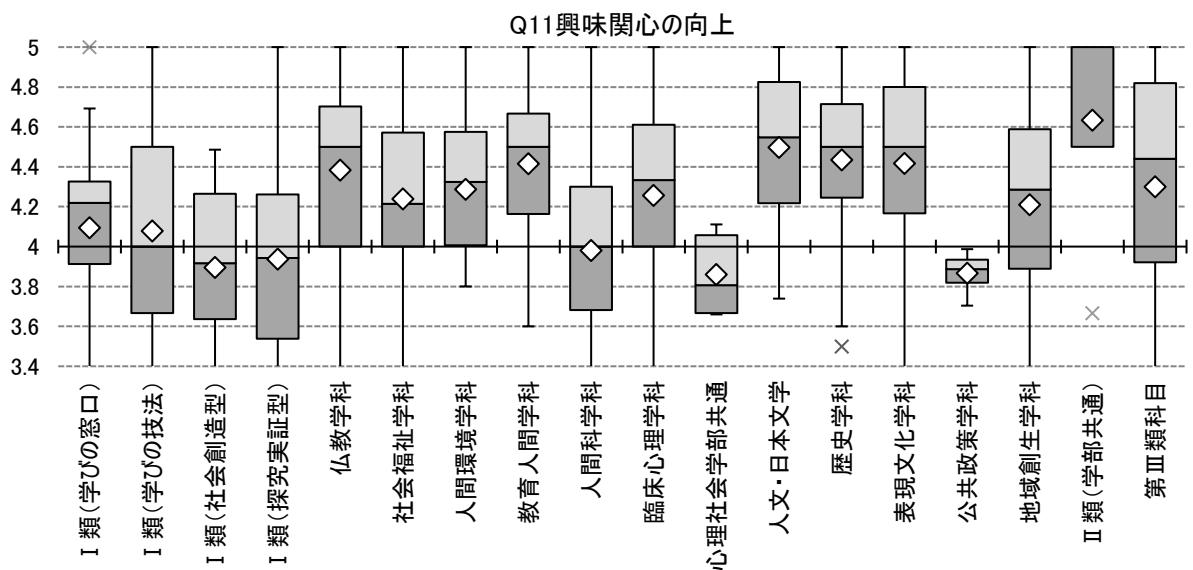
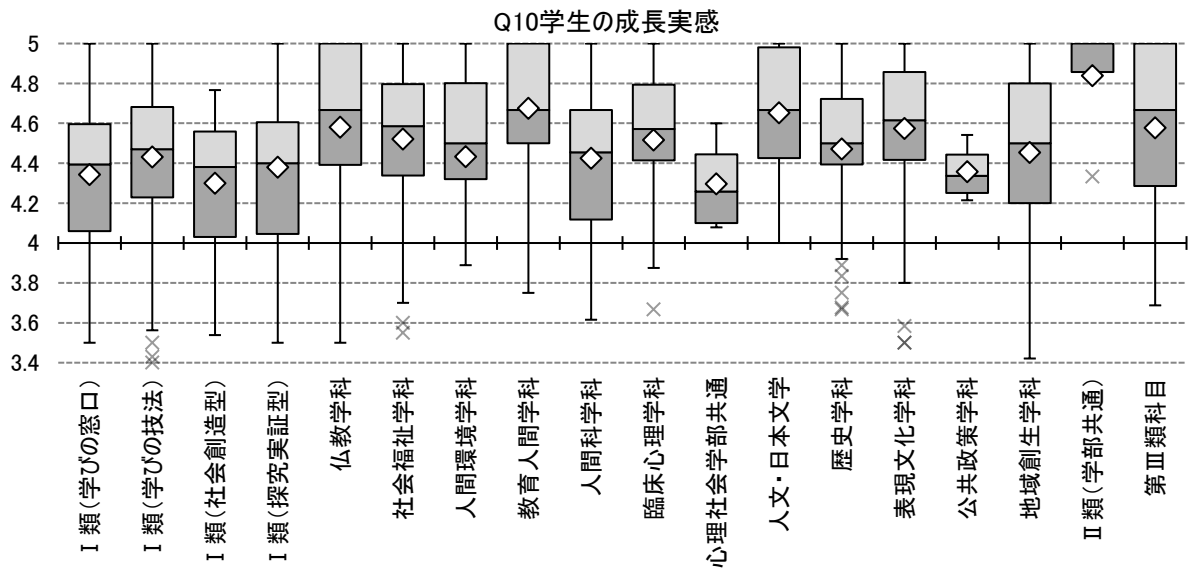
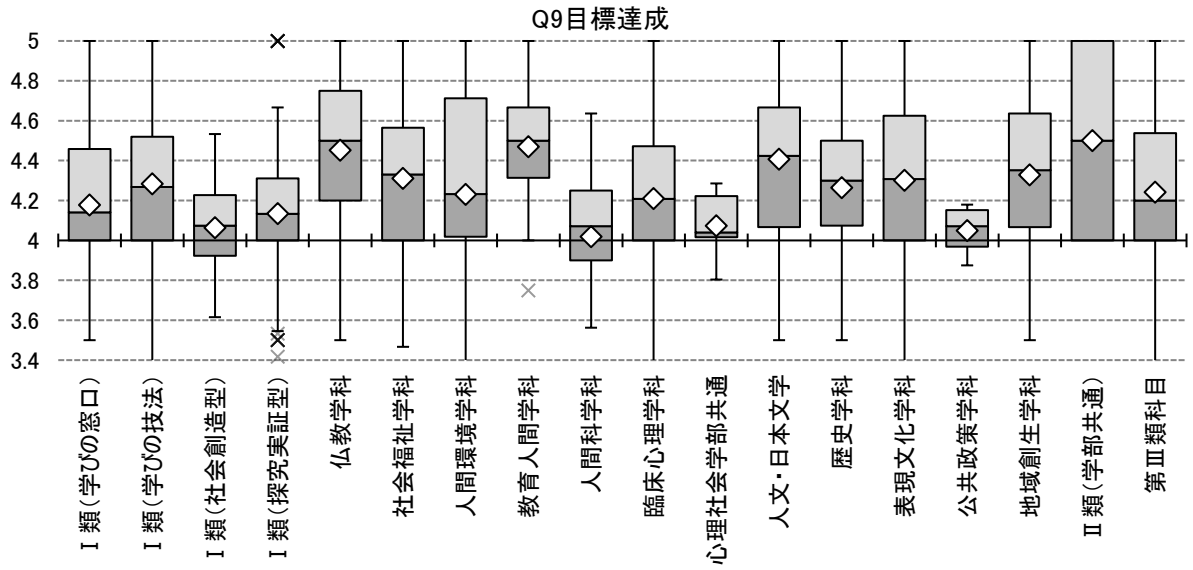


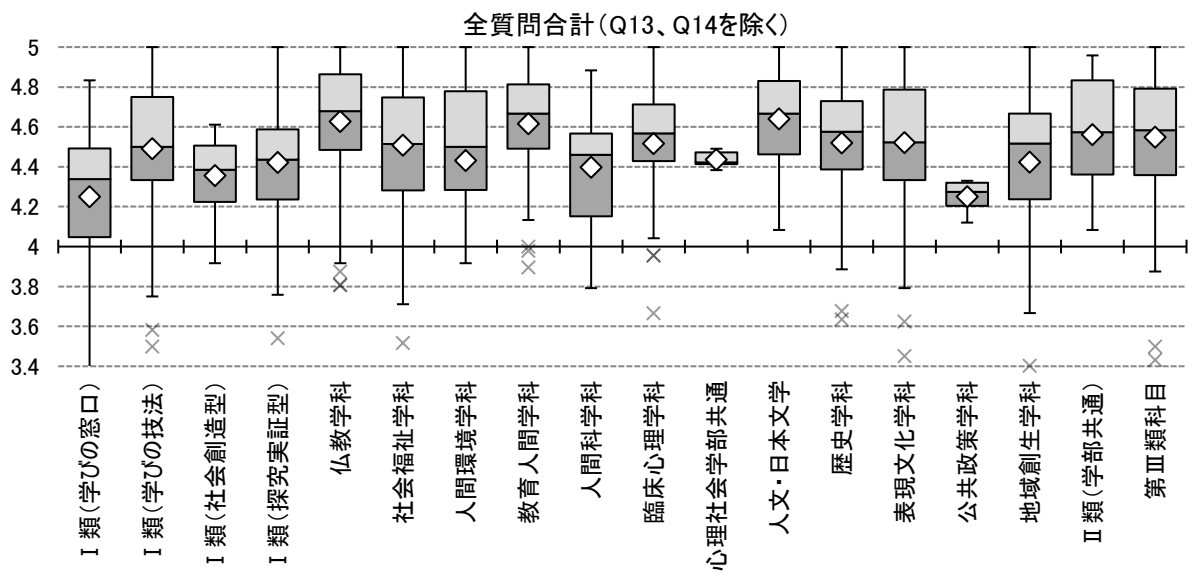
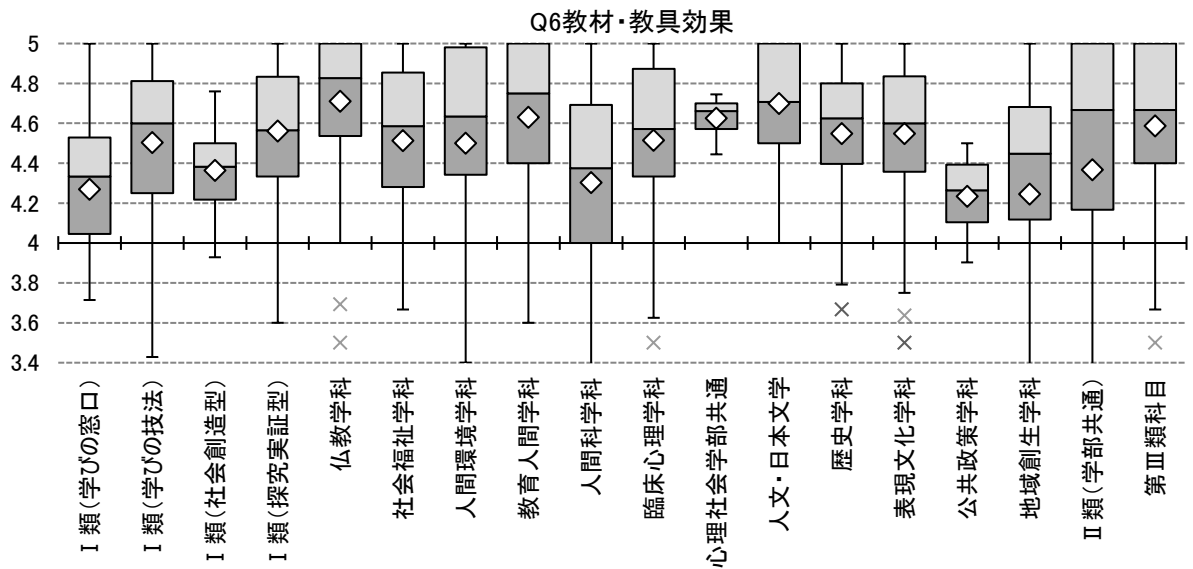
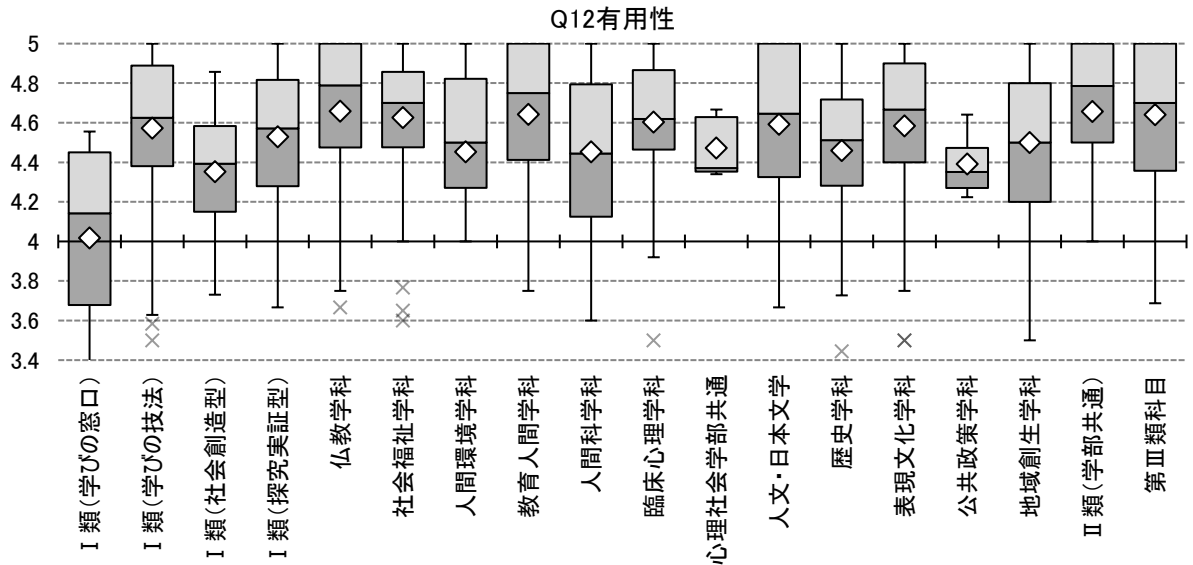
Q9 目標達成、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上を目的変数に、先生方の直接的なコントロールが比較的容易と考えられる Q1～Q6 の各項目を説明変数にした重回帰分析の結果は下表の通りです。プラスの有意な偏回帰係数が確認されたセルに網掛を施してあります。前回の分析では、Q9 目標達成を目的変数とする偏回帰係数の出方に昨年度までと大きな違いがありましたが、今回は以前と似た出方に戻ってきたように見受けられます。但し、決定係数は以前よりも小さくなっており、評価項目に含まれない「目的変数に影響を及ぼす要素」が新たに生じていると考えるのが好適です。以降、個々の項目のデータを見ながら、考察に努めてみたいと思います。

目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	0.237	P < 0.001 **	-0.023	0.6076105	0.105	0.0842
Q2 教員努力	0.040	0.4110	0.329	P < 0.001 **	0.258	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.054	0.1759	0.061	0.0779	-0.053	0.2628
Q4 事前・事後学修指示	0.084	0.0255 *	-0.088	0.0078 **	-0.082	0.0657
Q5 教員質問相談対応	-0.079	0.0668	0.050	0.1845	0.098	0.0593
Q6 教材・教具効果	0.291	P < 0.001 **	0.321	P < 0.001 **	0.561	P < 0.001 **
定数項	1.123	P < 0.001 **	1.516	0.0000 **	0.193	0.2433
決定係数(修正 R ²)	0.327 (19 秋 0.478)		0.427 (19 秋 0.599)		0.435 (19 秋 0.602)	

ご参考： 各説明項目の偏回帰係数（2019 年度秋学期）

目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	0.131	0.0274 *	0.208	P < 0.001 **	0.066	0.3095
Q2 教員努力	-0.003	0.9713	0.245	P < 0.001 **	0.355	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.036	0.4906	-0.126	0.0065 **	-0.148	0.0101 *
Q4 事前・事後学修指示	0.168	P < 0.001 **	0.015	0.6758	-0.110	0.0106 *
Q5 教員質問相談対応	0.050	0.3792	0.160	0.0016 **	0.250	P < 0.001 **
Q6 教材・教具効果	0.431	P < 0.001 **	0.422	P < 0.001 **	0.707	P < 0.001 **
定数項	0.527	P < 0.001 **	0.177	0.1139	-0.844	P < 0.001 **





「教員による授業への取り組み」(Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6)

いずれの項目も春学期と同等以上の評価を得ています。前回の結果で低下が見られた Q6 教材・教具効果も有意に改善し、昨年度秋学期を平均値で上回る（但し有意差はありません）ところまで回復しています。一方、6 項目すべてで四分位範囲や標準偏差が昨年度秋学期よりも大きくなっており、新しい生活様式への適応ができたケースと好適な手法が確立できてないケースとが分かれた様子です。改善が遅れた授業でのキャッチアップを加速するには、高い評価を得ている授業でのやり方を知見として共有するのが近道の一つだと考えます。

「学生による取り組みと成果」(Q7、Q8、Q9)

Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力は前回に引き続き評価を伸ばしました。リモートで学ぶ中、自力で何とかしなければならない場の経験を重ね、必要な姿勢と方策を獲得してきているとも考えられます。Q9 目標達成は前回の結果で低下が見られましたが、今回は昨年度秋学期を有意に超えるところまで回復しています。新しい学びの環境への適応が進むとともに、先生方の工夫と改善という助けもあって得られた結果と拝察いたします。

「授業に対する満足度（学びの成果）」(Q10、Q11、Q12)

3 項目とも前回は有意に上回る結果を得ており、改善幅もかなり大きな値となっています。前回は「低下なし」で踏みとどまった Q10 学生の成長実感と Q12 有用性は、昨年度秋学期を 0.1 ポイントも上回る結果を得ています。Q11 興味関心の向上も、前回の大きな低下から回復していますが、授業間の差異が広く、回復の度合いはすべての授業で一様というわけではありません。単元の学習内容の先にあるものを覗き込む機会としての「教科書から離れた先生方のコメントや学生同士の討論などを通じた多様な思考への接触」を作り出せたかどうかは差を作ったものと思われまます。「どちらかと言えばそう思う」に相当する 4.0 に届かない授業は、Q10 の 6.7%、Q12 が 6.4% に対して、Q11 は 25.7% と大きな割合です。

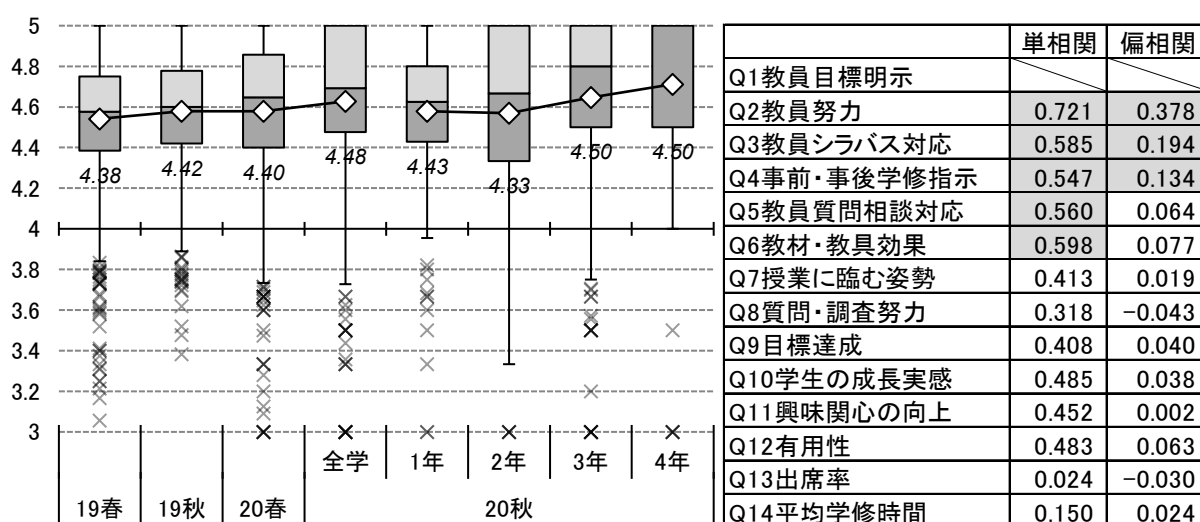
「出席率、平均学修時間」(Q13、Q14)

前掲 (p. 4) の表に見る通り、昨年度秋学期からの伸びが最も大きいのが Q13 出席率、Q14 平均学修時間です。ただし、前者は「出席」の概念が昨年度までとは異なるため、直接的な比較はできません。Q14 平均学修時間は前回の結果で大きな伸びがあり、今回はそれを維持した形です。今期の「成果」を来年度にどう繋いでいくかは、全学で取り組むべき課題の一つだと思います。但し、「まったくしない」が春学期 3.6%、秋学期 4.1%（昨年度は、春学期 12.7%、秋学期 12.1%）と少数ながら残っていますし、「1 分～30 分」も含めると、授業外での学修時間が不足すると思われるケースが全回答の 27.2% を占めています。

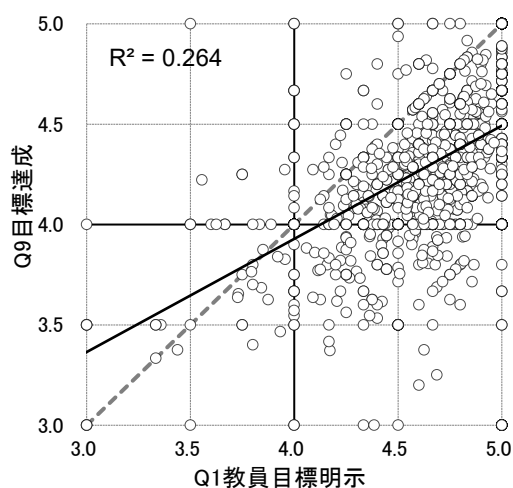
■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近4回分の追跡、および当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第1四分位数です。これを下回った場合、キャッチアップが急務とお考えください。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について、各々の相関行列で上位25%に含まれるケースに網掛を施してあります。因果の方向や第三要素の介在など考慮しなければならないこともありますが、基本的には、高い偏相関で結ばれる項目はそれぞれ別個に改善策を講じるより、セットで改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いはずです。

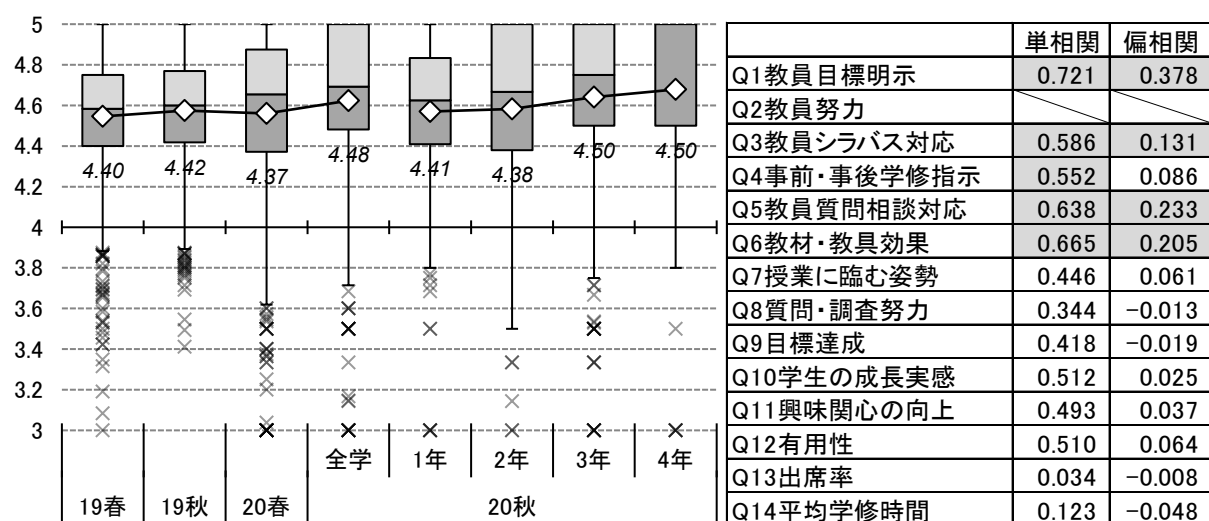
Q1 教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



中央値や箱の上端には連続して上昇が見られ、箱の下端もこれまでで最も高い位置にあります。相関の出方もこれまでと大きく異なるところはなく、Q2 教員努力との高相関にも変わることはありません。明確な目標を示すからこそ、その達成に向けた先生方の弛まぬ努力が学生により良く伝わるのだと思います。Q9 目標達成などとの相関は希薄ですが、Q9 目標達成で「5. そう思う」を選んだ学生の 89.6%が、Q1 教員目標明示でも「5. そう思う」を選んでおり、逆に Q1 で一段下の「4. どちらかと言えばそう思う」を選ぶと、Q9 目標達成での「5. そう思う」の選択率は 10.7%にまで急落します。目標とするところをしっかりと伝えることは、科目の到達目標を達成させるための十分条件にはなり得ませんが、必要条件であることは間違いなさそうです。右図でも、{Q1=Q9} の位置に引いたグレーの破線を上方にある授業は例外的で、Q1 が Q9 の上限を実質的に決定しています。到達目標は学び終えて答えを導くべき問いで示すのが効果的です。

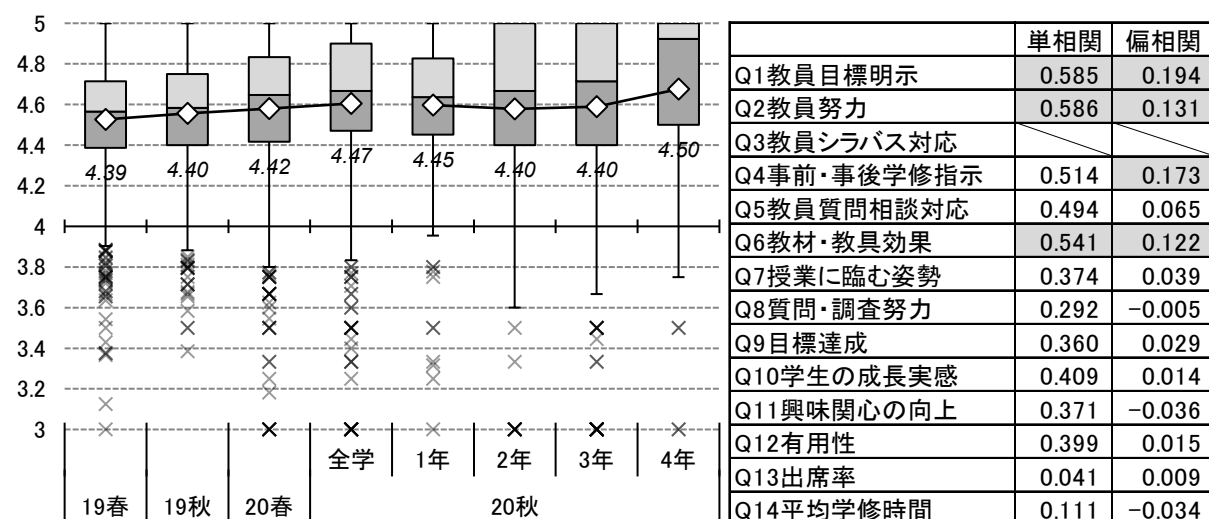


Q2 教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



中央値は連続して上昇してきており、昨年度秋学期との間にも母平均の差に有意性があります。前回の結果で拡大していた標準偏差は今回もあまり縮小しておらず(0.43→0.42)、授業間の差異はやや大きめなままです。先生方の内なる意欲は学生が直接見て取れるものではなく、改善が遅れた授業でキャッチアップを図るには、高相関で結ばれる項目の改善を先行させて、「行動」の中に意欲を読み取ってもらうしかありません。相関係数を降順で追ってみると「科目の到達目標を明確に示した上で、教材・教具の効果的な用法を工夫するとともに、質問や相談に対し親身に応じること」が、この項目(Q2)に高い確度で改善をもたらすと思われます。試しに、Q2教員努力を目的変数、Q1教員目標明示、Q6教材・教具効果、Q5教員質問相談対応の3項目を説明変数に重回帰分析を行ってみたところ、決定係数(修正R²)は0.637とかなり大きな値が算出されました。

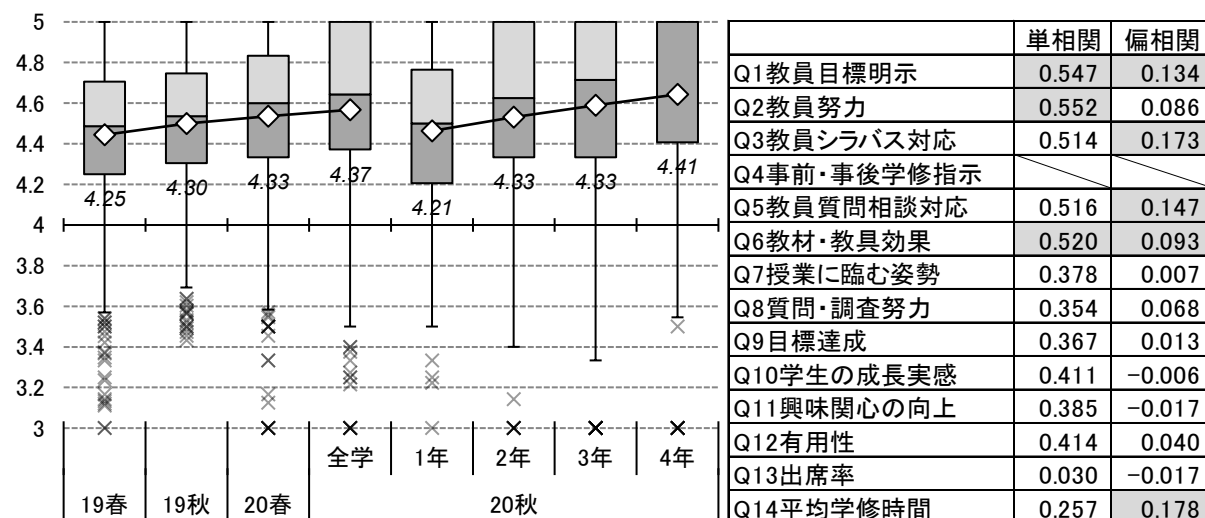
Q3 教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った



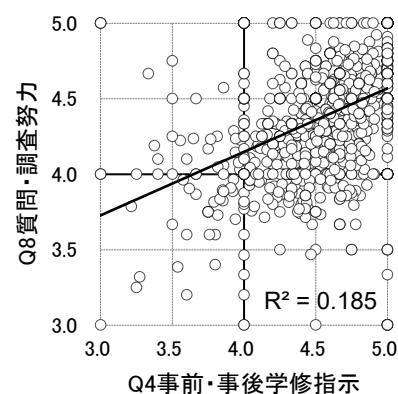
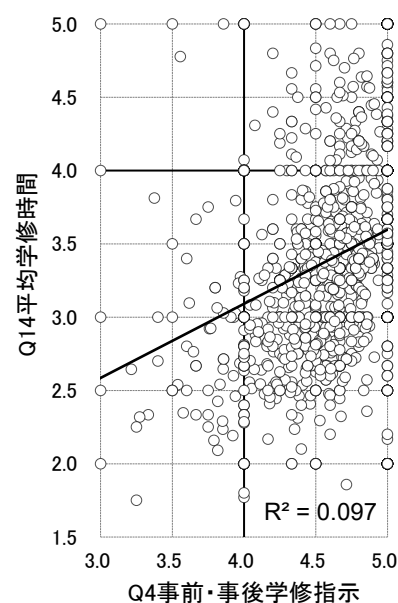
小幅ながらも改善が着実に積み上げられてきています。他項目との相関の出方に前回との違いはありません。シラバスを起草する段階で、到達目標を明確にしておけば、それを学生にもしっかりと伝えることができるでしょうし、併せて、目標の達成のためにどのような学習活動を授業

内外に配列するかまで踏み込んで検討しておけば、事前事後の学修にも明確な指示が出せます。改善が遅れた授業でのキャッチアップを図るには、「シラバスの記載から逸脱しない」という意識を強く持つことよりも、指導計画立案に際して具体性をもった熟慮に注力すべきと思われます。

Q4 教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した

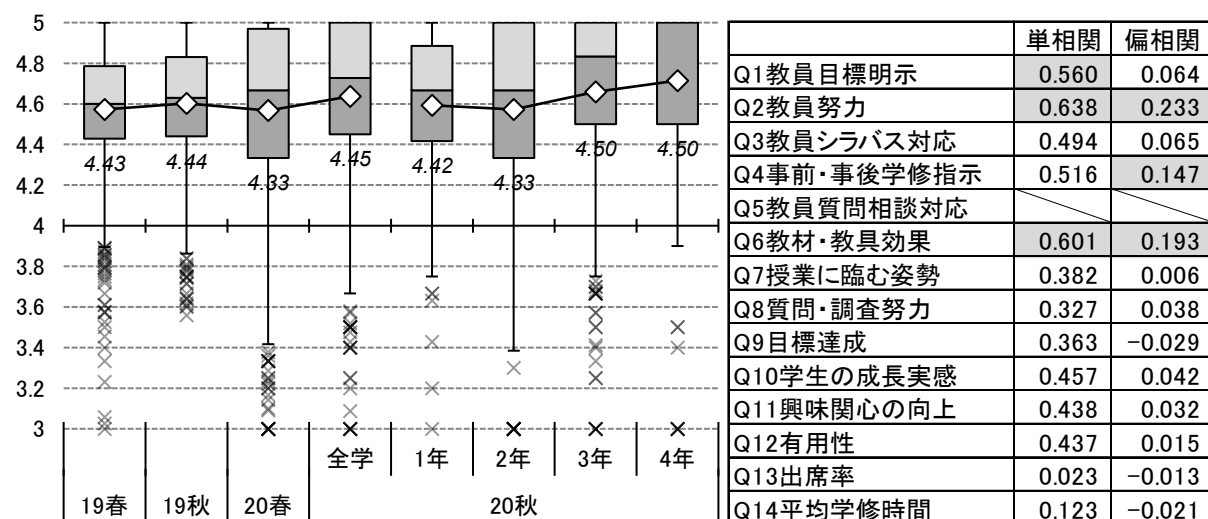


着実に評価を高めてきています。全体の4分の1の授業が「満点」となりました。相関の出方に前回との大きな違いはありません。Q14 平均学修時間との間にも比較的強固な偏相関が見られます。Q14 平均学修時間の側から見た場合には、Q8 質問・調査努力に次ぐ2番目に大きな相関係数（単相関、偏相関とも）が観測されています。質問や調査に向けた努力は学生側の行動であるため、先生方が直接的にコントロールできる項目の中で、平均学修時間を延伸するための最も有効な糸口はここ（Q4）にあると言えます。右の散布図に見る通り、近似線を挟んだ上下方向のばらつきはかなり大きく出ています。具体的な指示があっても、事前・事後学修に課したタスクの質や量が適正な範囲に収まっていないと過重な負担を学生に強いる（このケースはそれほど多くなさそうですが）か、短時間で終わってしまいます。また、取り組んだ成果を実感できる（発表の機会がある／フィードバックが得られる、成果を教室[オンラインを含む]に持ち込んでチームに貢献する等）環境が整っていないければ、タスクや課題の履行率も高まらないはず。Q8 質問・調査努力との相関も曖昧であり、「答えを仕上げるべき問い」の形で課題を与えるなど、不明の所在や調査すべきことを具体的に捉えやすい形での指示も工夫したいところです。



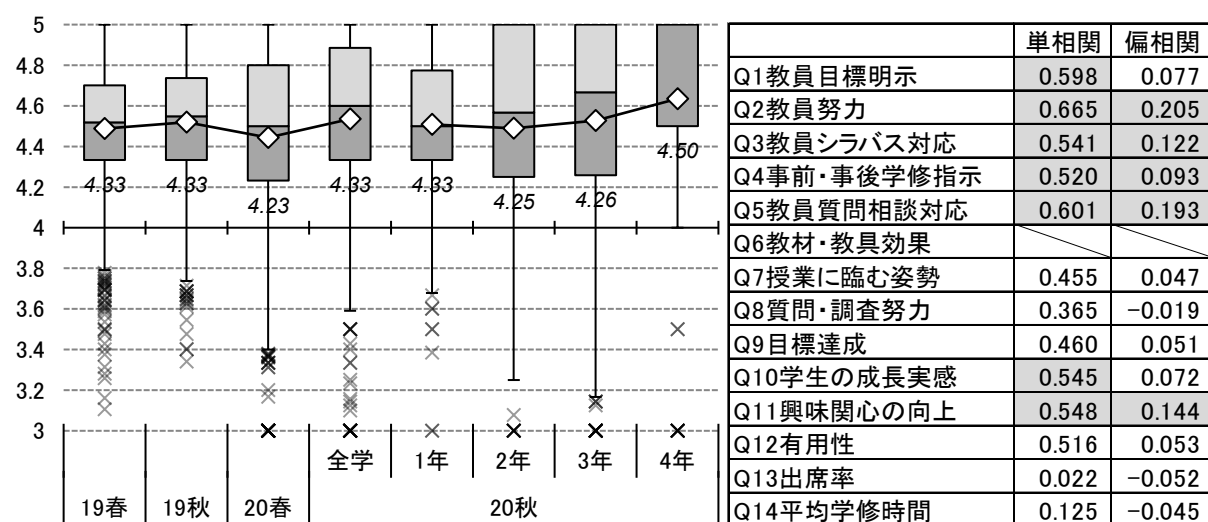
昨年度までは、明確な指示を出せば、学生はそれに応じて課題に取り組み、生じた疑問や不明を解消する行動（＝質問や調査）を取る傾向がかなり明確でしたが、本年度はQ4とQ8の相関がかなり弱くなっており、非対面の環境下で先生や周囲（TA等を含む）の支援が得にくい中で、不明解消や調査の行動を正しく取れない（＝方法への習熟が不足する）学生がまだ少なくないのかもしれない。指示の具体性を高めるとともに、「やり方」に範を示す必要もありそうです。

Q5 教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



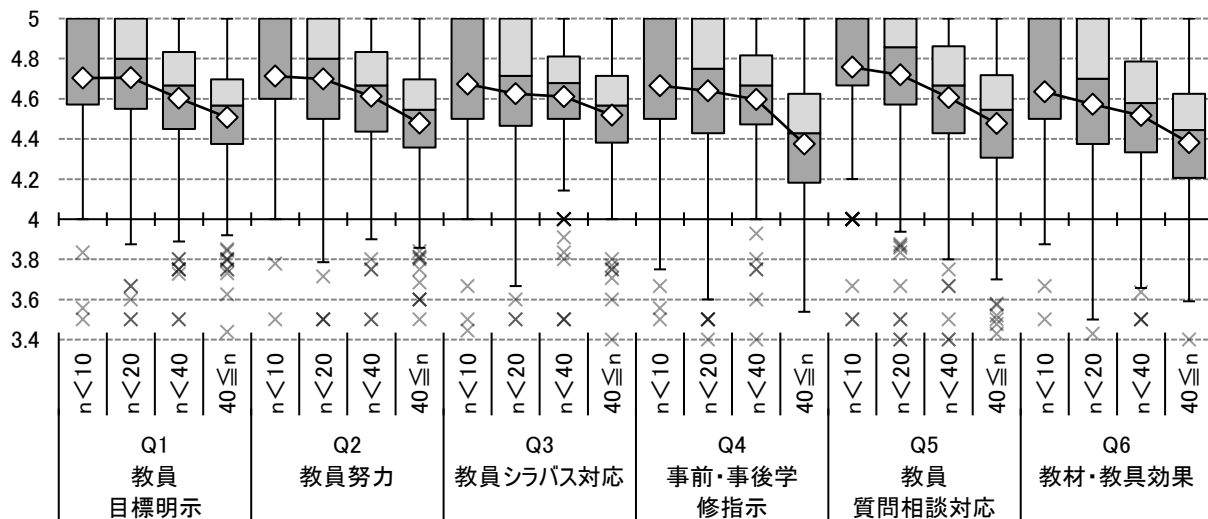
前回の結果で箱の下端が大きく下がっていましたが、今回は昨年度秋学期とほぼ変わらないところまで戻しています。但し、下方のひげは1年前より目に見えて長く、外れ値となった授業もかなりの数に上ります。対面での授業が十分に行えなかった中で、一部の授業では学生との双方向のコミュニケーションに改善の余地を残してしまったのではないのでしょうか。

Q6 教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった



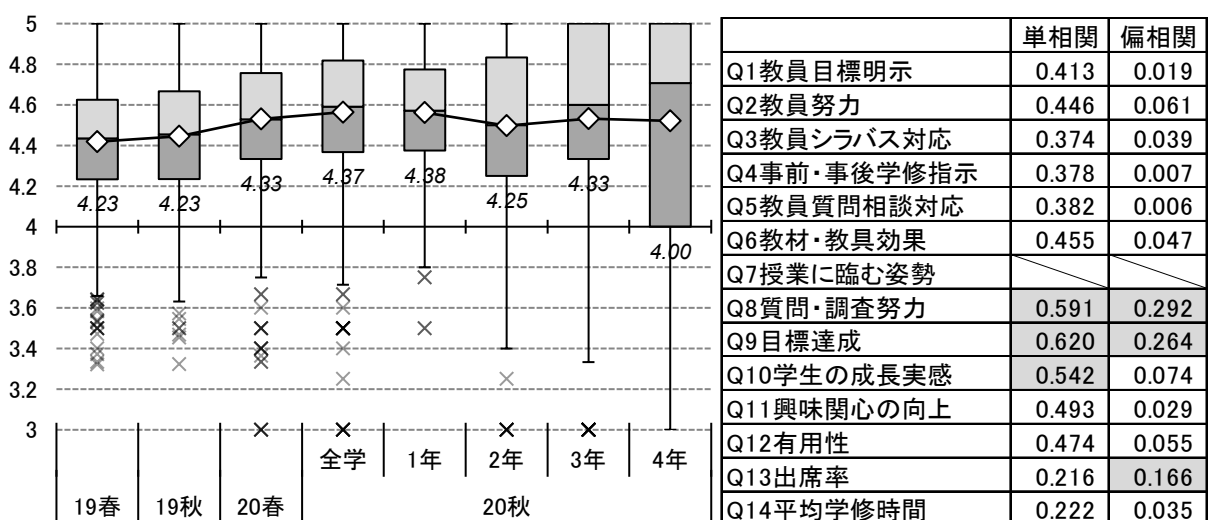
前回の落ち込みから回復していますが、授業間の差はまだ昨年度よりも大きいです。前述の通り、先生方の直接的なコントロールが可能な項目の中でQ9～Q11への寄与度が最も大きい項目ですので、箱の下端に届かない授業では自由記述意見も参考に、キャッチアップを急ぎましょう。

下図は、Q1～Q6の各項目について、履修者数規模での違いを探るべく作成した箱ひげ図です。履修人数の四分位数で階級を分け、それぞれの集計値分布を表示しました。質問文の内容からはQ5 教員質問相談対応が人数の不利を最も大きく受けると予想しましたが、実際は、Q4 事前・事後学修指示やQ6 教材・教具効果の方が「40名以上」での低下が目立ちます。



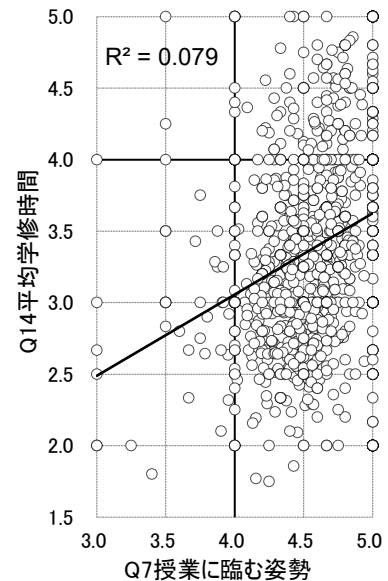
Q4 事前・事後学修指示では、大人数の場合に提出物の点検などの負荷が大きくなるため「提出物」としての課題を与えにくく、一方通行になりがちという状況も想像できるところです。事前・事後学修のタスクを添削や返却を前提とする提出物の形に拘らず、人数規模に応じた好適な形を考えていく必要があるかと思います。Q6 教材・教具効果では、少人数ほど密度高く行われることの多い「教室内での対話」（教え合い・学び合いを含む）が教材・教具の不備をカバーし、否定的な回答を減らしていると考えられることもできそうです。大人数でも積極的に採り入れましょう。

Q7 私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ

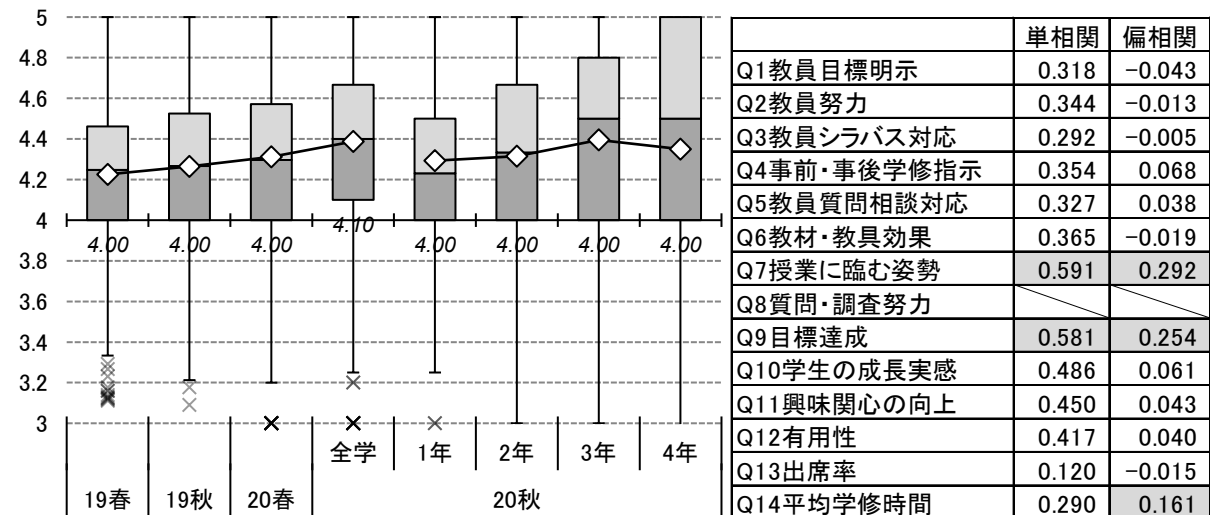


前回を超える結果で、連続して評価を伸ばしてきています。Q8 質問・調査努力との高相関からは、不明の解消に向けた行動を如何に取らせるか（問い掛けなどのきっかけ作りと具体的な学習を進めるための方策への習熟を図ること）が、この項目（Q7）の改善には欠かせないはずで

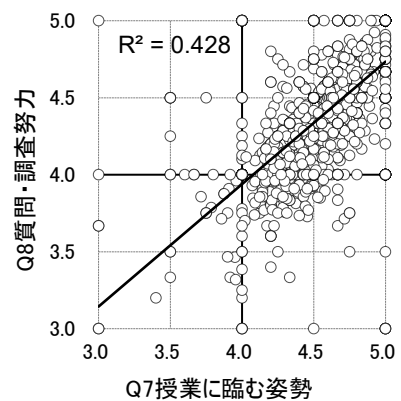
Q9 目標達成との間にも高相関が観測されますが、「目標を達成できた／できそうだ」との見込みから、自分の努力は十分な水準にあるとの認識を作っているとの、本来とは逆の因果関係も想定されるところです。実際のところ、Q14 平均学修時間との相関は曖昧であり、十分な時間をかけた授業準備や課題の仕上げなどの事後学修なしに、「真剣に授業に臨んだ」との認識を持つ学生が一定数を占めているようです。適正な負荷とハードルを与えないことには、「このくらいで十分／真剣に取り組んだことになる」との認識を持たせてしまいます。右図で近似線から下方に大きく離れた授業では、適切なタスクを与えることで、学びがより深く、確かなものになった可能性もありそうです。



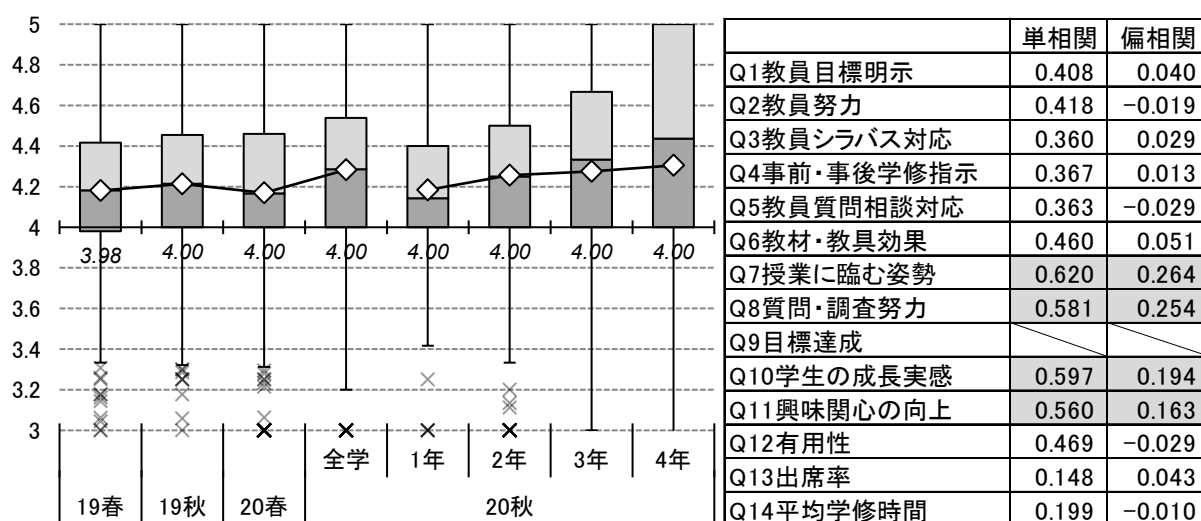
Q8 私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた



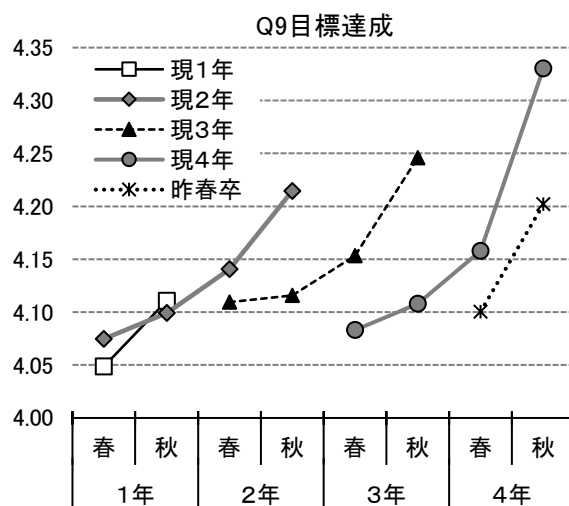
着実に改善が図られてきており、箱の下端がはじめて4.0ポイントを離れました。中央値も4.4まで上昇しています。リモートで授業を受ける中、不明の解消に自ら進んで取り組まなければならない状況が春学期から続いたことで、そのやり方を学んできたと考えれば、如上の変化にも納得のいくところがあります。Q7 授業に臨む姿勢との平均値の差（春学期は0.22、秋学期は0.17）も若干ながら縮小しており、「真剣に授業に臨むこと」と「不明解消に自ら取り組むこと」の間に存在するギャップは少しずつ解消しているように見受けられます。右図を見ると、そのギャップ（＝近似線からの距離／マイナスの残差）がまだ大きい授業も少なくありません。不明の所在に気づかせた上で、その場で取るべき行動を具体的に示し、残差の解消を図る必要があるかと思われます。



Q9 私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）



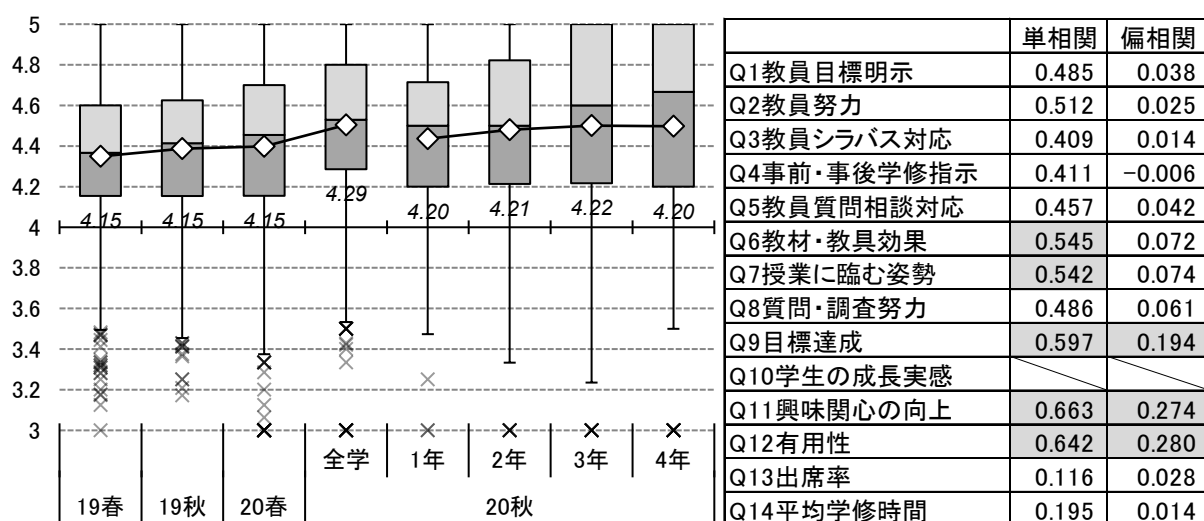
前回の結果で低下が見られた平均値は 0.1 ポイント以上も上昇し、これまでで最も高い評価となりました。右下図に見る通り、前回は現 1 年が現 2 年の 1 年前を下回ったことで全体の平均を押し下げていました。現 1 年は今期に回復したとはいえ、春学期に身につけるべきことが十分に定着していない可能性もありますので、進級後の授業では、例年以上の注意深さをもって学生の学び方などを観察していく必要があるかと思えます。2 年以上の各学年は、いずれもそれぞれ一つ上の学年の 1 年前を大きく上回る結果になりました。リモートでの学修には様々な支障があったと思いますが、科目の到達目標の達成という点では、昨年度と同等以上の成果が得られているようです。先生方の工夫と学生の頑張りの賜物と拝察いたします。



下表は Q9 目標達成を説明変数とした場合の、Q10～Q12 の各項目の回帰式と同モデルの決定係数の一覧です。データは授業別集計ではなく学生の回答を用いました。いずれのケースでも 2019 年度と比べて決定係数は小さな値です。昨年度との最大の違いは「対面でのやり取りが減ったこと」であろうと思われます。周囲との対話や先生からのフィードバックを通して得る様々な気づきが、興味関心の喚起や学んだことの持つ意味をより深く広く知ることには大切なのは想像に難くありません。オンラインでも学生間／先生とのやり取りをできる限り充実させましょう。

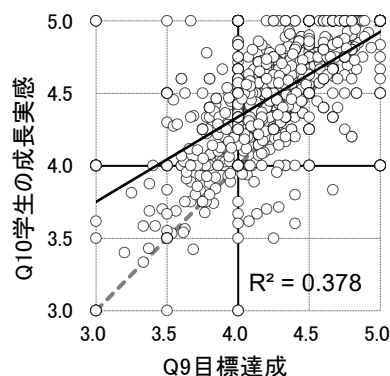
説明変数:	Q10 学生の成長実感				Q11 興味関心の向上				Q12 有用性			
Q9 目標達成	19春	19秋	20春	20秋	19春	19秋	20春	20秋	19春	19秋	20春	20秋
回帰係数	0.69	0.69	0.60	0.59	0.75	0.75	0.72	0.70	0.60	0.60	0.48	0.47
切片	1.43	1.44	1.88	1.96	1.02	1.02	1.08	1.16	1.88	1.87	2.45	2.50
決定係数 R2	0.49	0.51	0.35	0.36	0.44	0.46	0.33	0.32	0.38	0.39	0.23	0.22

Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた

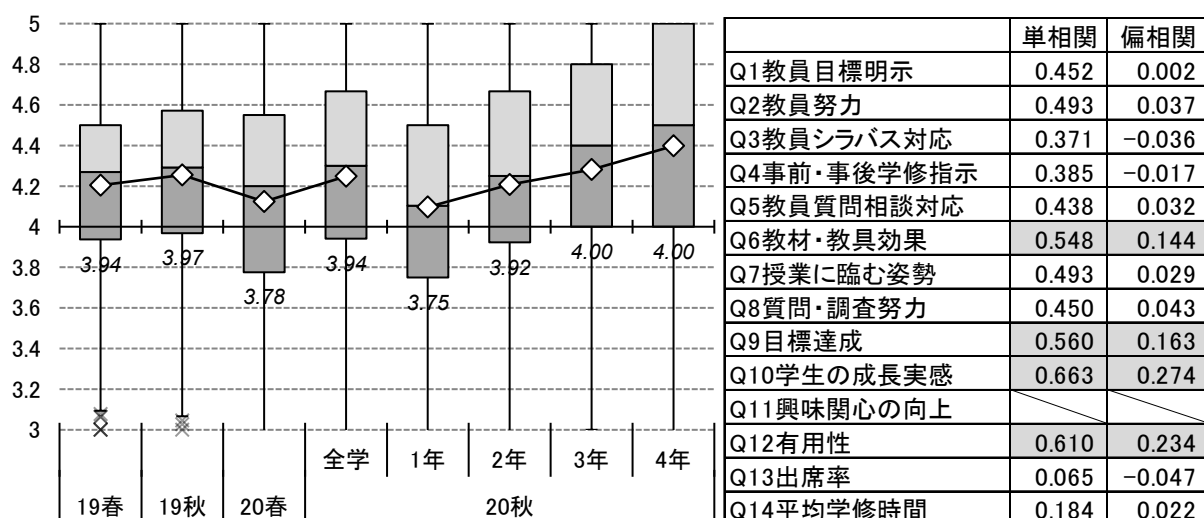


春学期を上回る評価を得ています。昨年度秋学期と比べると、箱の下端は0.14ポイントも高くなっています。Q11 興味関心の向上、Q12 有用性との強い相関はこれまでと変わりません。気づきや新しい物の見方を得ることが興味の喚起と有用性の認識に直結すると考えられます。Q9 目標達成との相関も、昨年度ほどではありませんが比較的強固です。

右の散布図からは、Q9 目標達成の換算得点が Q10 学生の成長実感の下限値をほぼ決定している様子も窺えます。近似線から下方に大きく離れた授業では、学生自らが学んで知の地平を押し広げる体験が十分であったか、学んだことでできることが増えた(=コンピテンシーの増大)ことを実感させる場をしっかりと調べていたか、振り返ってみる必要があるかと思えます。



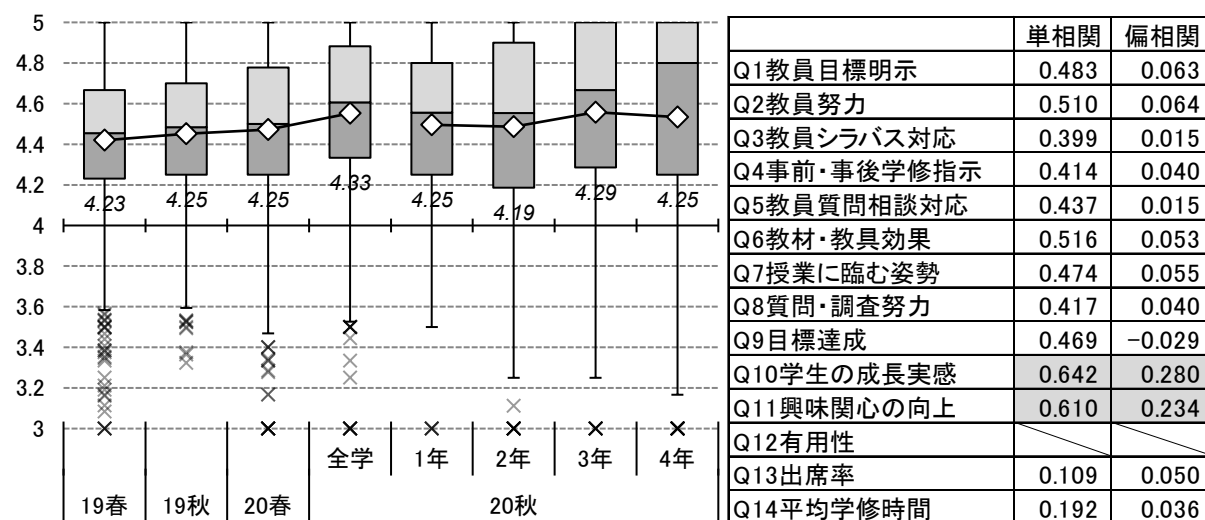
Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



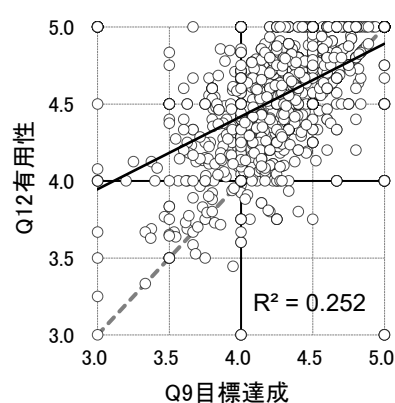
前回の結果ではかなり大きな低下が見られましたが、今回は昨年度秋学期とほぼ同じ水準まで持ち直しています。外からの直接的な働きかけで「好きにさせる」のは困難でしょうが、高相関

で結ばれている項目の改善を図ることで、間接的に「科目や関連分野を好きになる」という結果を引き出すのは可能かと思われます。この項目（Q11）を目的変数、Q10 学生の成長実感と Q12 有用性を説明変数とする重回帰分析の決定係数（修正 R^2 ）は 0.501 と比較的大きな値を示しており、各説明変数の偏回帰係数は Q10 が 0.589、Q12 が 0.399 という結果です。有用性以上に成長実感が大きな寄与度を持っていますので、優先すべきチャレンジは Q10 の改善ということになりそうです。学生に「学んだことをもとに解決策を考えるべき課題」を提示し、調べたり、話し合ったりする中で、納得できる解を導きだすことができたという体験を授業の中で重ねさせることでも、「成長」（＝自分が関り、解決できる範囲の拡大）を実感させることは十分に可能と思われます。Q10 学生の成長実感では、前掲の通り、4.8 ポイント以上に達する授業が 4 分の 1 を占めており、キャッチアップを図ろうとした場合のモデルとなる実践は学内に豊富に揃っています。

Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる

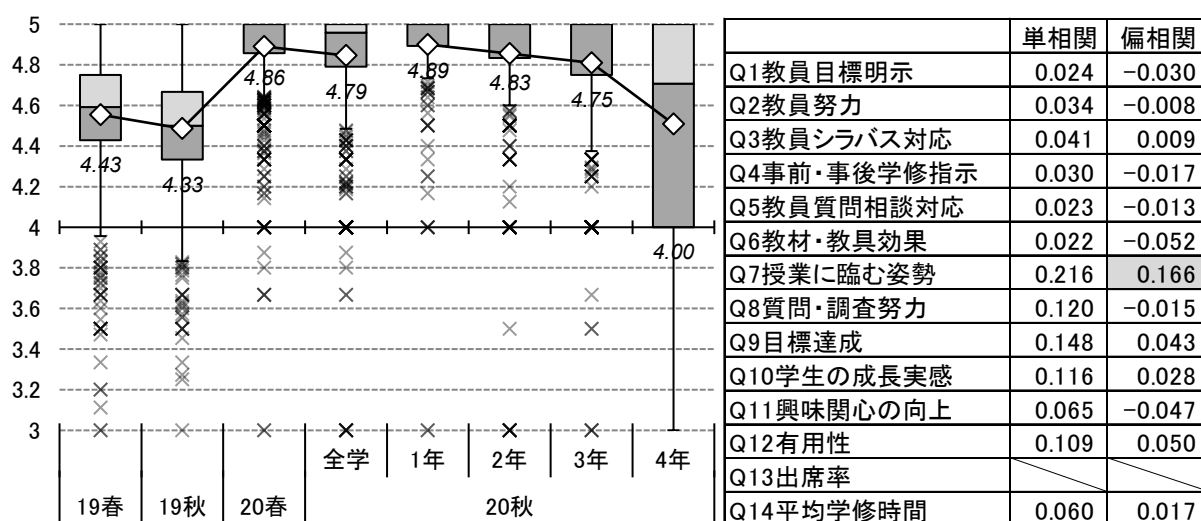


前回は上回る評価を得ており、中央値は 4.6 を超えました。右図中に描いた基準線（{Q9=Q12} の位置を表すグレーの破線）の下側には分布は薄く、{Q9 目標達成 ≤ Q12 有用性} となる授業が全体の 89% と大半を占めています。Q9 目標達成を確かなものにすれば、Q12 有用性の評価も高い確度で上がると期待できそうです。前回の報告でも触れた通り、Q9 との相関は特に強固なものではありません。前掲 (p. 13) の通り、この項目 (Q12) を目的変数、Q9 を説明変数とした回帰式の決定係数 (前掲) は

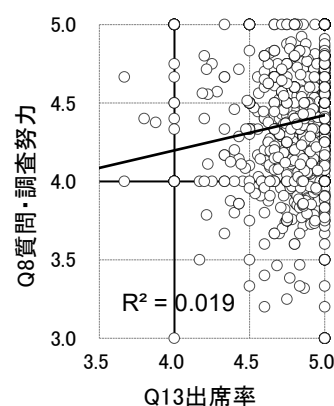


0.2 を少し超える程度に止まります。基準線から上方に離れた距離が大きい授業が多いことから、「この授業で得たもの」が「科目に固有の知識・技能」に限られないと考えることも可能ではないでしょうか。学び方やものの見方の獲得などに加え、自分事としての諸問題の所在に気づけたことなど、「教科書・教材に書かれたこと以外」に価値を見いだすことも少なくないと考えれば、基準線を大きく上方に超えて位置する授業が少なくないことにも十分な説明が付きそうです。

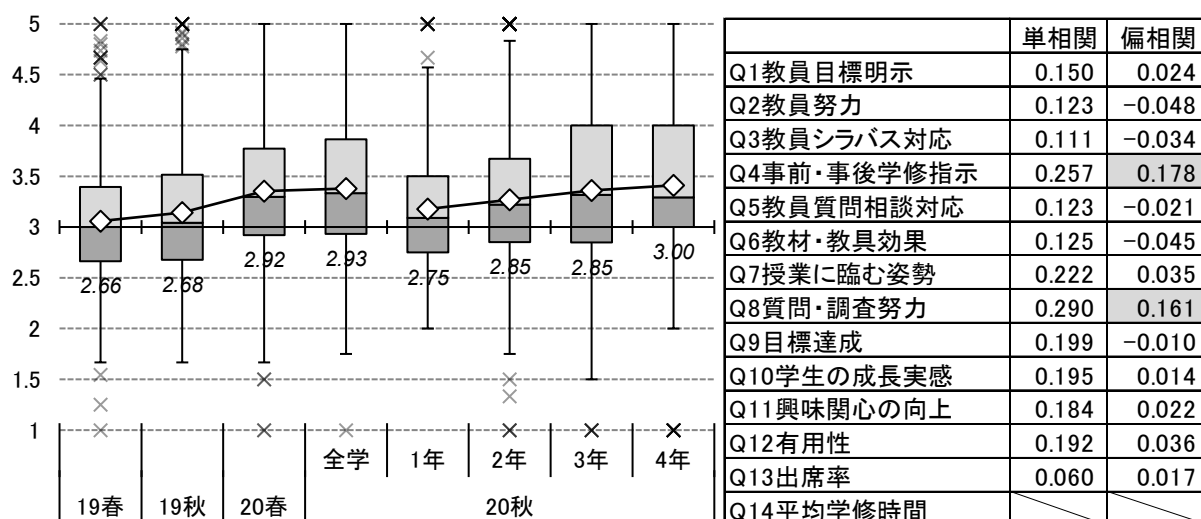
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



本年度は「出席」の概念が従来と異なるため、単純に比較できませんが、昨年までの実績を大きく上回ります。Q7 授業に臨む姿勢との間には比較的強固な偏相関が見られますが、Q8 質問・調査努力やQ14 平均学修時間との相関は弱いものに過ぎません。「欠席せずに授業に参加していること」を以て「真剣に授業を受けている」と誤認している学生が依然として一定数を占めていると考えられます。右図で近似線から下方に外れた距離（残差）の大きい授業ほど、認識を改めてもらう必要がある学生が多いのではないのでしょうか。



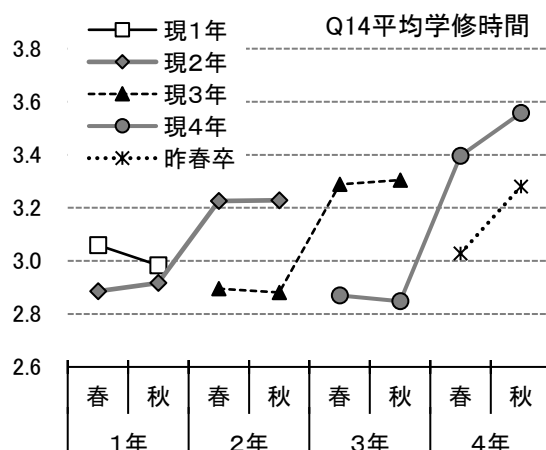
Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか



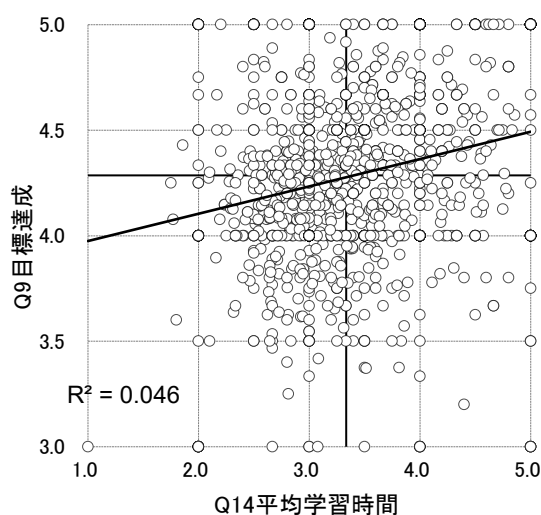
昨年度までを大きく上回る結果です。「61～120分」に相当する4.0に達している授業も23.6%（昨年度春学期の8%から13%、21%と推移）まで増えてきました。次ページのグラフに示す通り、2年～4年は春学期・秋学期ともにそれぞれ一つ上の学年の1年前を大きく上回っており、今期の特殊な状況（コロナ禍におけるリモート学習）が、学習習慣の形成に寄与した可能性が窺えます。

相関行列では、Q4 事前・事後学修指示と Q8 質問・調査努力との間には比較的強固な偏相関が観察されています。この項目 (Q14) の改善を進めるには、具体的で達成可能且つチャレンジングな課題をきちんと与えることが重要になると思われます。個々の学生に閉じて取り組ませる課題／タスクだけでは「サボる」という選択肢もあり、それを封じるためにルールの強化を図るのでは、学びの場が窮屈なものになりかねません。それぞれの学生が授業準備の成果を教室に持ち寄る場を設けて「チームへの貢献」という要素を課題に組み込むことなどにも改善効果が見込めると思います。また、授業で学んだこと (先生の説明を聞いたり、資料を読んだり、学生同士で話し合ったりして得た知識や理解) に基づいて、自分の答えを作り出すべき問いをきちんと用意して、答えの仕上げにじっくり取り組ませるようにすれば、達成可能性を担保した上で、より深く確かな学びへのチャレンジを促せるのではないのでしょうか。

なお、1年生は春学期に比べてわずかな低下が見られます。春学期の段階でも「一つ上の学年の1年前との差が他学年に比べて小さめ」でしたが、その差はさらに小さくなり、春学期にはあったアドバンテージの大半を失っています。平均学修時間は学びへのモチベーションの大きさを示唆する指標の一つです。リモート学習の中で学修が個の活動に閉じた結果、周囲からの支援や刺激が受けられなかったことなどを原因として学修への意欲が維持できない状況があるとしたら、何らかの策を講じる必要があります。全面的な対面授業への回帰はまだ少し先になると思われますが、仮に如上の懸念が現実のものだとすると、効果的なケア／対策を講じないまま時間が経過すればするほど対処は難しくなります。新年度を迎えたら、授業評価アンケートを待たずに、平均学修時間の変化を把握したいところです。



なお、Q9 目標達成との相関は昨年度までの 0.3 前後であったのに対し、本年度は春学期 0.17、秋学期 0.20 とさらに弱いものになりました。前回の報告書では、「時間をかけて頑張れば何とかなるところを超えたレベルで学修上の障害があった授業も少なくなかった」との懸念をお伝えしましたが、まだ一部には同様の状況が残っているように見受けられます。右の散布図 (縦軸・横軸とも中央値で座表面を分割) において、近似線から大きく下方に離れた授業では、学生の目標達成を支援する指導 (質疑応答や学び方のガイドなど) にもう一歩踏み込んでおく必要があったかもしれません。



参考資料 1

実施率

参考資料1-1. アンケート実施率科目区分別

■学部1174科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	
01 I類(学びの窓口)	302	18	18	100.0%
04 I類(社会創造型)	305	37	37	100.0%
10 人間環境学科	309	18	18	100.0%
13 人間学部共通	311	1	1	100.0%
15 公共政策学科	319	4	4	100.0%
19 社会福祉学科	308	71	70	98.6%
20 人間科学科	312	58	57	98.3%
05 教育人間学科	310	52	51	98.1%
11 歴史学科	316	107	104	97.2%
15 人文学科・日本文学科	315	104	98	94.2%
08 I類(探究実証型)	306	119	111	93.3%
12 臨床心理学科	313	51	47	92.2%
14 仏教学科	307	143	130	90.9%
21 地域創生学科	320	72	65	90.3%
06 第Ⅲ類科目	324	62	55	88.7%
18 表現文化学科	318	120	105	87.5%
09 I類(学びの技法)	303	156	132	84.6%
16 心理社会学部共通	314	6	5	83.3%
07 第Ⅱ類科目(学部共通)	323	9	5	55.6%
計	1208	1113	92.1%	

■大学院69科目

科目区分	授業数	実施数	実施率	
02 院仏教学専攻(修士・博士)	301	30	30	100.0%
07 院史学専攻(修士・博士)	302	10	10	100.0%
01 院社会福祉学専攻(修士)	305	4	4	100.0%
08 院比較文化専攻(修士・博士)	307	4	4	100.0%
03 院宗教学専攻(修士・博士)	308	8	7	87.5%
05 院臨床心理学専攻(修士)	304	20	14	70.0%
04 院国文学専攻(修士・博士)	303	1	0	0.0%
計	77	69	89.6%	

参考資料1-2. アンケート実施率(学部) 2005年度春学期～2020年度春学期

年度	学期	実施率	実施数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172
2020年度	春学期	92.2%	1174	1274

2020年度	秋学期	92.1%	1113	1208
---------------	------------	--------------	-------------	-------------

※2020年度からweb方式での実施へ変更。
実施数は集中講義を除く全科目。

参考資料 2

自由記述回答
頻出キーワード分析

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に

「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」

として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1として出現頻度の上位10ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。今回は今年度春学期からの質問文の変更があったため、前々回は掲載がありません。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」（効果点）と後半の「改善できる点」（改善点）に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

- (1) 質問の前半に対する回答（効果点）と後半に対する回答（改善点）を分けて集計・分析を行っています。
- (2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「○○で分かり易かった」「△△△をしてくれたので分かり易かった」など、分かり易い理由となった「○○○」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。
- (3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例：「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった」などに限定して仕分け・集計。

今回の特徴

1. 新型コロナの感染拡大を受けて全授業がオンラインで実施されました。このためオンライン授業自体について、あるいはその実施方法に関する記述が多くみられた一方で、従来の対面授業においてよく見られた効果点、改善点も継続して確認されています。そこでキーワードとしてはオンライン授業そのものに対する全般的な意見は「オンライン授業」としてまとめ、その他の具体的な内容についてはできる限り個別のキーワードとして分類集計しました。
2. 回答総数は春学期の17,158件から13,392件と約22%減少しました。また、自由記述回答の

記載数は春学期の4,618件に対し3,385件と約26%減でした。

効果点と改善点

1. 効果点（『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点）

「**グループワーク**」が春学期同様1位（144件）となりました。特徴的であるのは「I類・第II類科目（学部共通）・III類」、「1年生」による突出した回答数が1位になった要因です。2位は120件の「**丁寧**」で、前回春学期の5位から順位を上げました。ただ、出現率としては春学期と大きく変わらず、2位～4位の回答数が減ったことが要因です。3位は前回と変わらず「**総合評価**」（108件）、4位は前回の8位から順位を上げた「**プリント・資料**」（プリント、資料が分かりやすい／充実していた／理解が深まった：89件）、5位は「**説明・解説**」（説明、解説が分かりやすい：86件）です。ここまではほぼ1年生の意見が反映された結果です。6位に入った「**オンライン授業**」（オンライン授業に対する様々な効果点に関する意見）は2年生、及び回答人数帯82人以上の意見が突出しています。

出現率で見ると、大きく伸ばしたのは「**事例・具体的**」（事例、具体例で分かりやすい、理解が深まった）、「**フィードバック**」（アドバイス・コメント・添削等、フィードバックしてもらえてよかった）、「**体験談・現場**」（教員の体験談や現場の話聞くことによって理解が深まった）の2つで、ともに前は番外にあったものです。逆に大きく減らしたのは「**オンライン授業**」（97.3⇒60.5）「**レポート・課題**」（100.2⇒47.8）でした。「オンライン授業」は、それが定着したことによるコメント減少ということも可能性として考えられますが、実はこの二つのキーワードは後述の改善点で1位（レポート・課題）、2位（オンライン授業）を占める重要改善課題です。

2. 改善点（改善できる点）

1位と2位は前回と同じ「**レポート・課題**」（75件）、「**オンライン授業**」（72件）となりました。しかし、出現率で見ると「レポート・課題」が前回の90.3から56.0へ大きく減少（＝改善）、「オンライン授業」も前回の60.0から53.8へ改善しました。改善のご努力が数字として表れた形です。3位は前回5位の「**時間**」（時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／授業時間以外の負担が大きい：66件）でした。出現率で前回の23.9から49.3へと2倍以上の数値となり大きく悪化しました。新型コロナの影響による学事日程の遅れが影響していることは想像に難くありませんが、個々の意見には必ずしもその理由ではないと思われるものも含まれています。今回はここまでの1位～3位が4位以下を大きく引き離れたTOP集団を形成しています。引き続き重点的な改善行動が望まれるところです。

4位以降は「**グループワーク**」（4位：32件/前回9位）「**テスト・試験**」（5位：28件/前回6位）、「**プリント・資料**」（6位：24件/前回7位）と常連が並びます。

7位の「**通信・機器**」は前回4位でしたが改善しました。（出現率：25.1⇒17.9）

さらに改善が大きかったのは「**質問**」（質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない）で、出現率で27.4から10.5に大きく減少しました。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探ることができます。

- 「レポート・課題」(改善点 1 位/効果点 10 位)
- 「オンライン授業」(改善点 2 位/効果点 6 位)
- 「グループワーク」(改善点 4 位/効果点 1 位)
- 「プリント・資料」(改善点 6 位/効果点 4 位)
- 「説明・解説 (不足)」(改善点 8 位/効果点 5 位)
- 「質問」(改善点 11 位/効果点 11 位)
- 「フィードバック」(改善点 14 位/効果点 12 位)
- 「発表」(改善点 15 位/効果点 13 位)

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となります。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

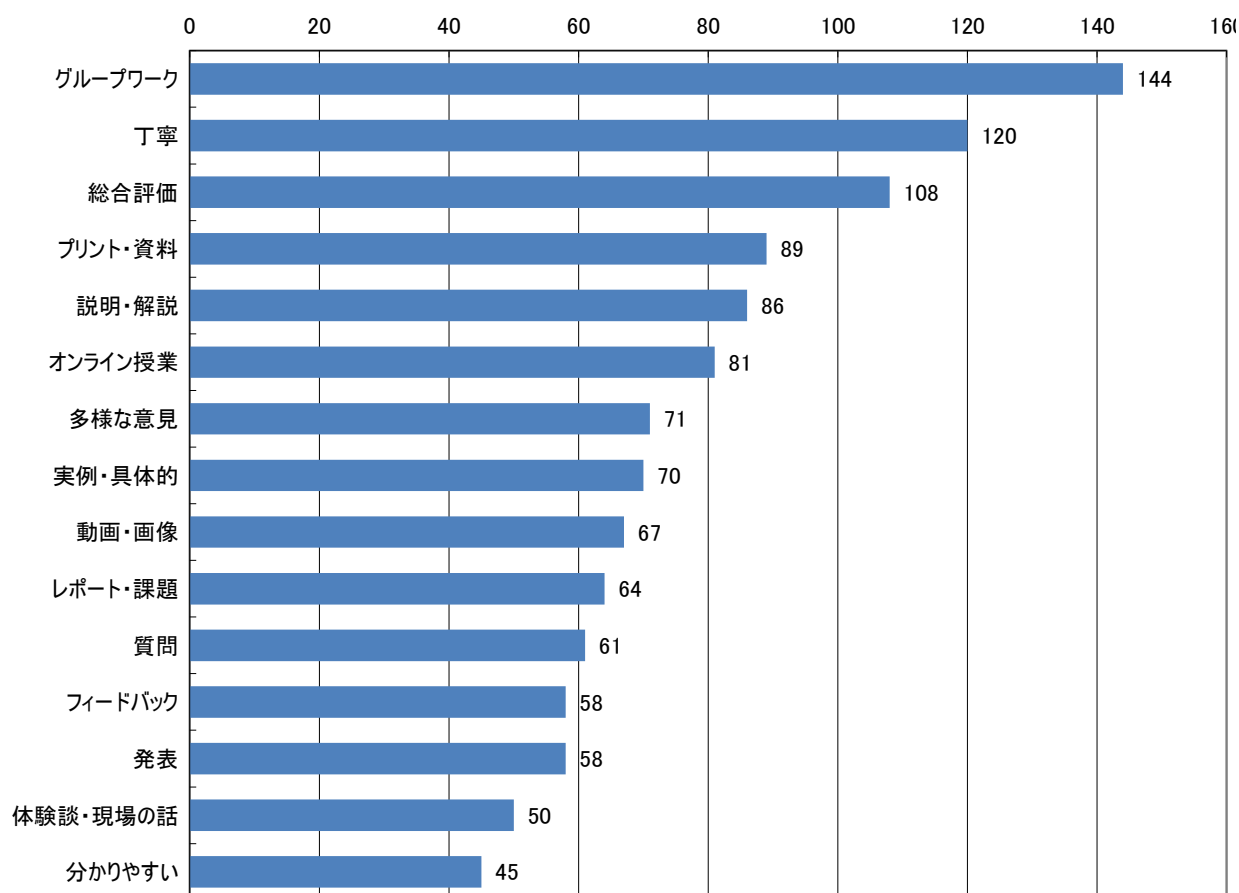
※2 出現率について

「出現率前回比較 全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

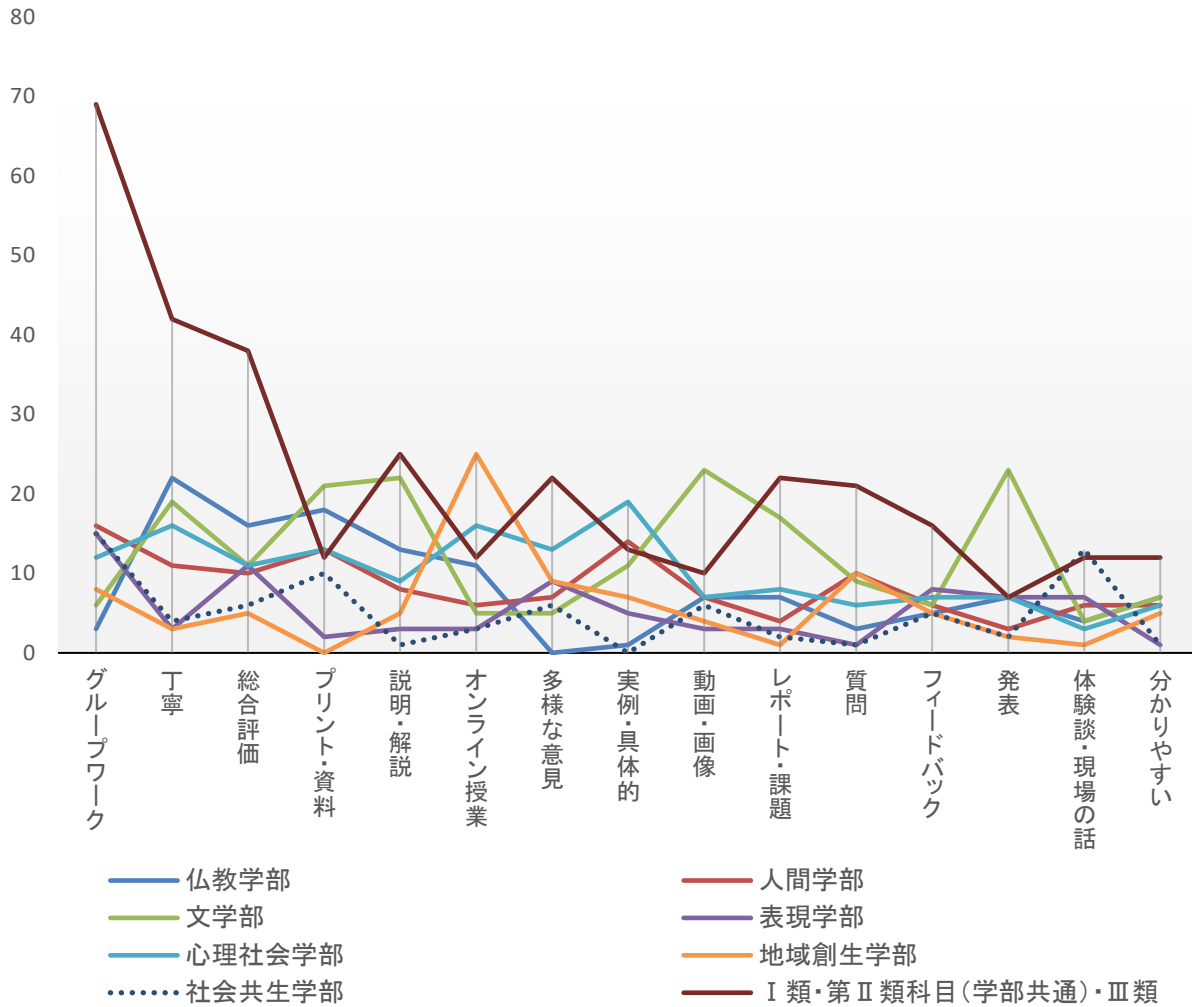
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【全学】

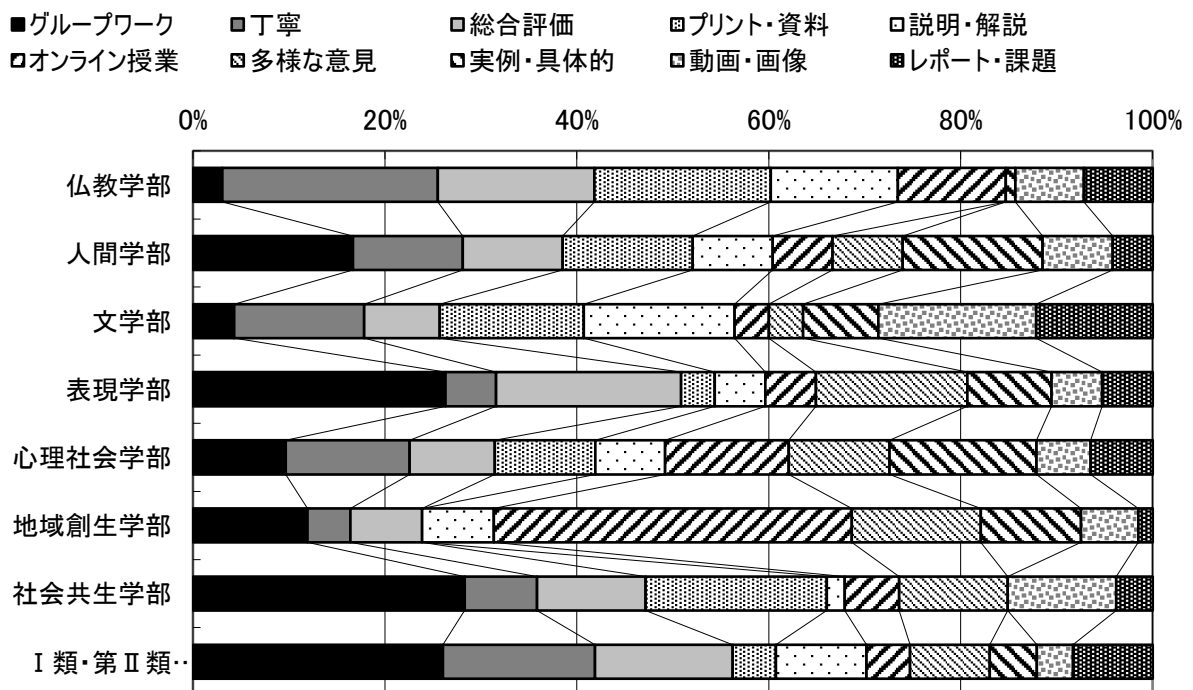


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでのディスカッション、会話、意見交換をする機会を持ててよかった／グループワークが学習意欲につながった／他人の意見を聞いて良かった	144
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、フィードバック、添削、質問対応	120
総合評価	おもしろかった、楽しかった、充実していた、有意義だった、興味を引かれた、理解が深まった、知識を得られた、意欲が高まった	108
プリント・資料	プリント、資料が分かりやすい／充実していた／理解が深まった ※「丁寧なプリント、資料」は「丁寧」に分類	89
説明・解説	(授業について) 説明、解説が分かりやすい ※「丁寧な説明、解説」は「丁寧」に、「具体的な説明、事例による説明が分かりやすい」は「事例・具体的」に、「動画による説明が分かりやすい」は「動画・画像」	86
オンライン授業	オンデマンド方式(動画配信)のため、あとから(好きな時に)見直すことができよう／リアルタイムで授業を受けられてよい／オンライン授業でよかった／進め方がよかった／音声ファイルがあってよかった ※「オンラインのグループで話せてよかった」は「グループワーク」に、「オンラインで意見を聞いてよかった」は「多様な意見」に、「オンラインで質問しやすかった」は「質問」に、「分かりやすい動画」は「動画・画像」に分類	81
多様な意見	多様な意見を聞いて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった	71
実例・具体的	実例、具体的で分かりやすい、理解が深まった／具体的で分かりやすかった／具体的に理解できた	70
動画・画像	・動画、画像で分かりやすい／理解が深まった ※「動画が見返せてよかった」は「オンライン授業」に分類	67
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった ※「レポート、課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に、「レポート、課題にフィードバックがあってよかった」は「フィードバック」に分類	64
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	61
フィードバック	フィードバックしてもらえてよかった(アドバイス・コメント・返事・添削含む) ※「丁寧なフィードバック」は「丁寧」に分類	58
発表	発表を行って(発表を見て)、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	58
体験談・現場の話	・現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった ・先生の経験談、体験談を聞くことによって理解が深まった	50
分かりやすい	授業が分かりやすい ※分かりやすい理由の記載があるものは各項目に分類	45

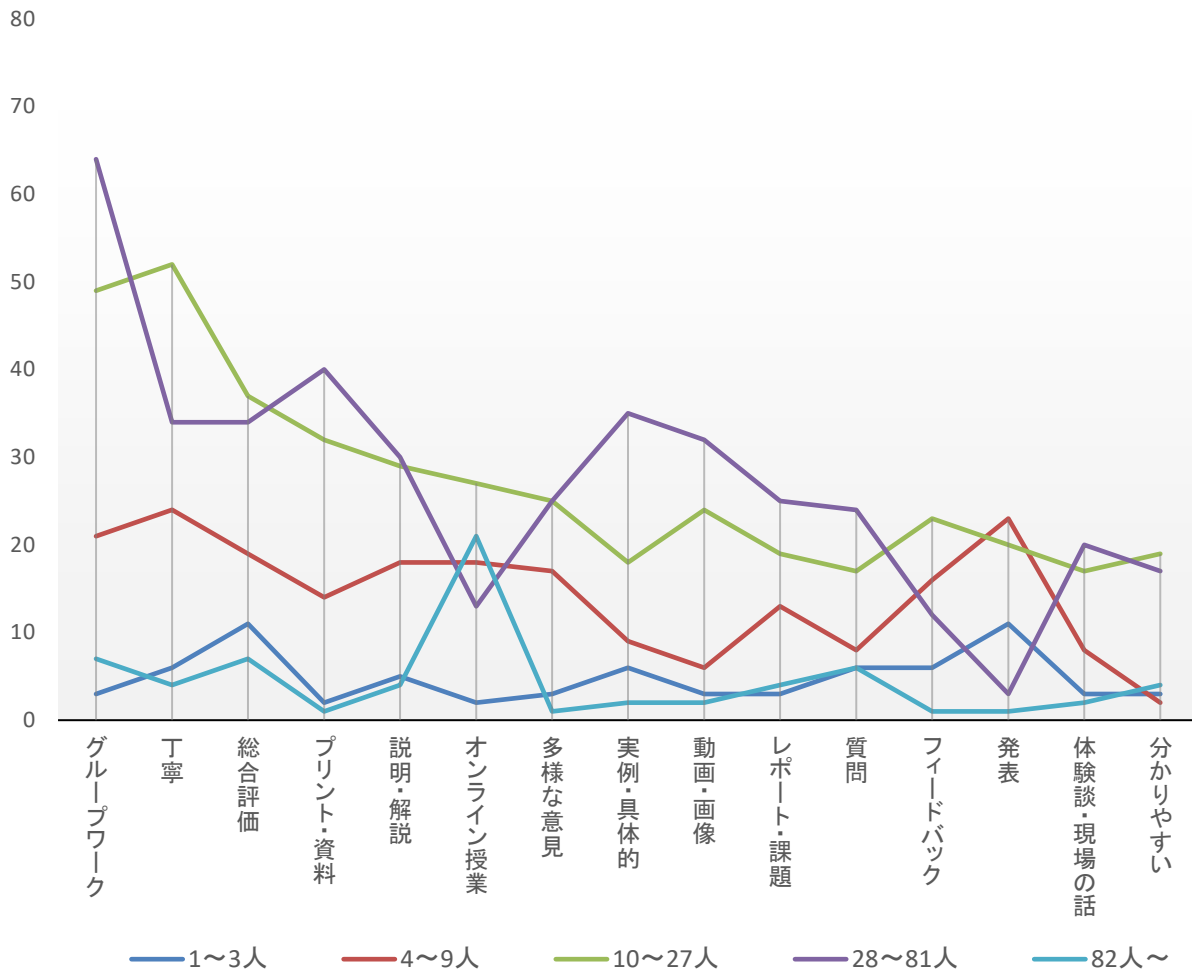
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学部別】



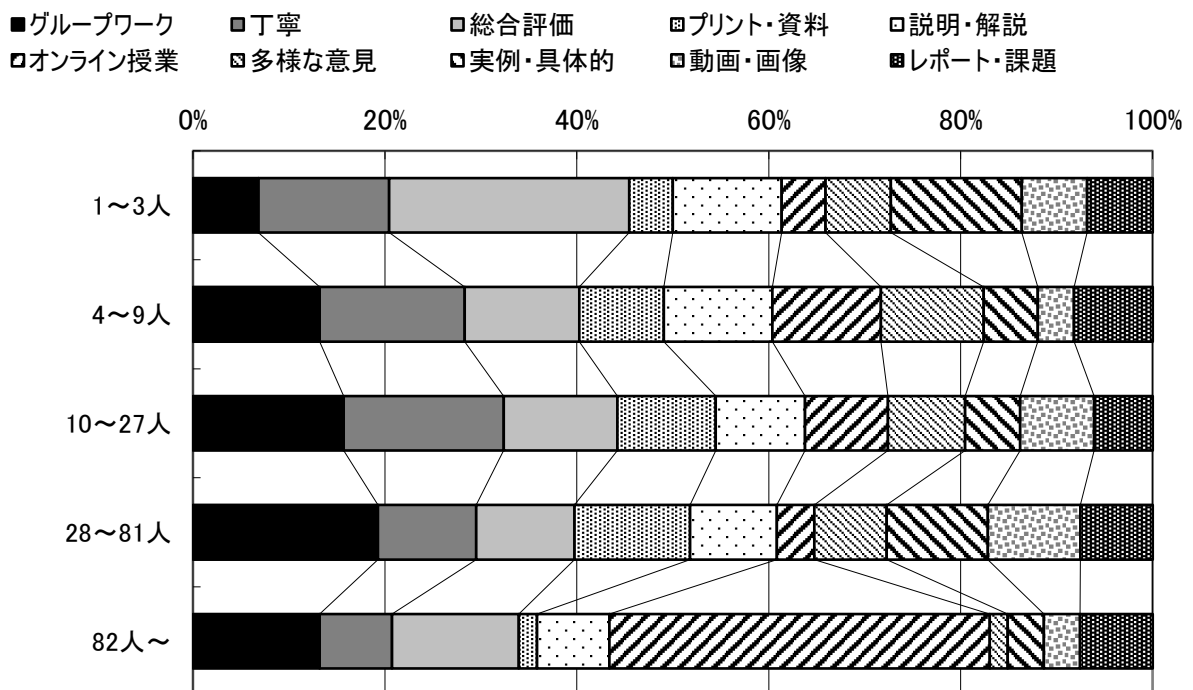
上位10項目の学部別割合



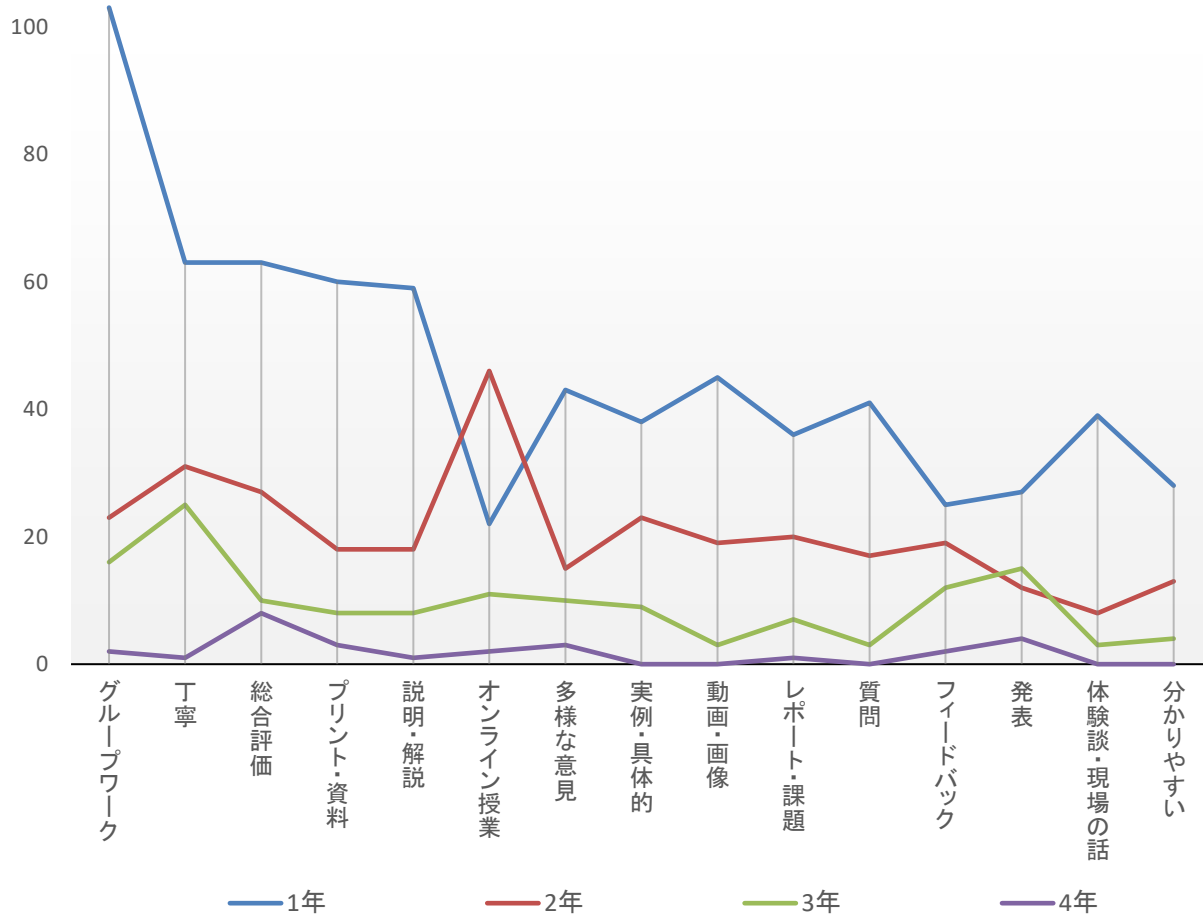
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【回答人数帯別】



上位10項目の回答人数帯別割合

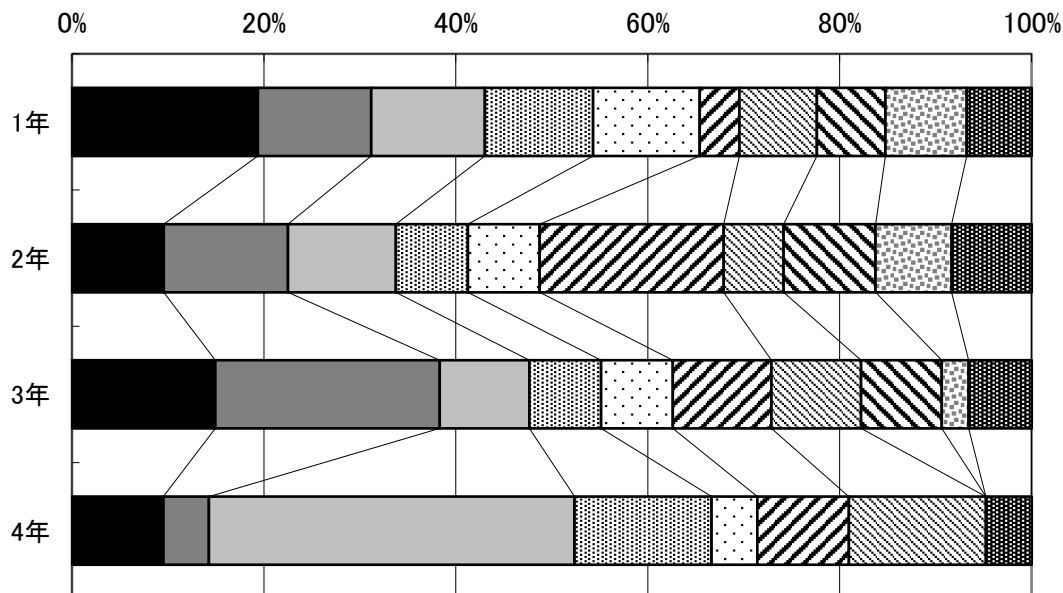


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学年別】

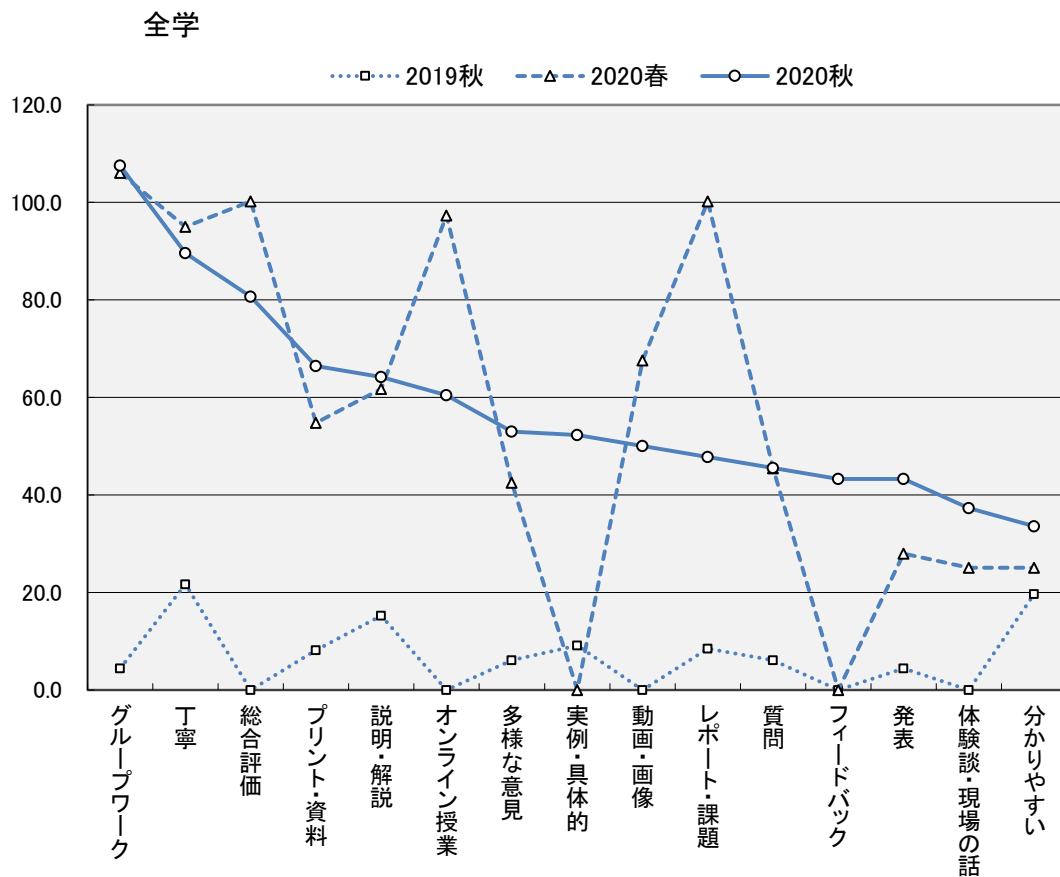


上位10項目の学年別割合

- グループワーク
- 丁寧
- 総合評価
- ▨プリント・資料
- 説明・解説
- オンライン授業
- 多様な意見
- 実例・具体的
- ▨動画・画像
- ▨レポート・課題



自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】全学

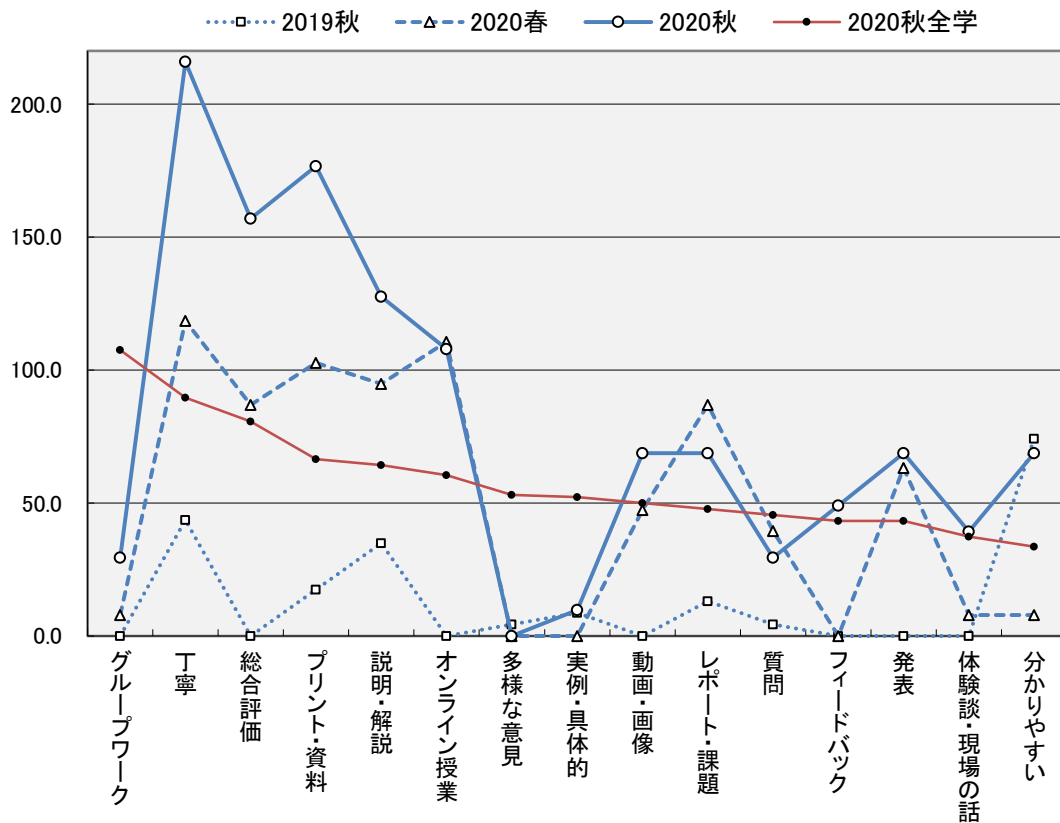


「出現率」について

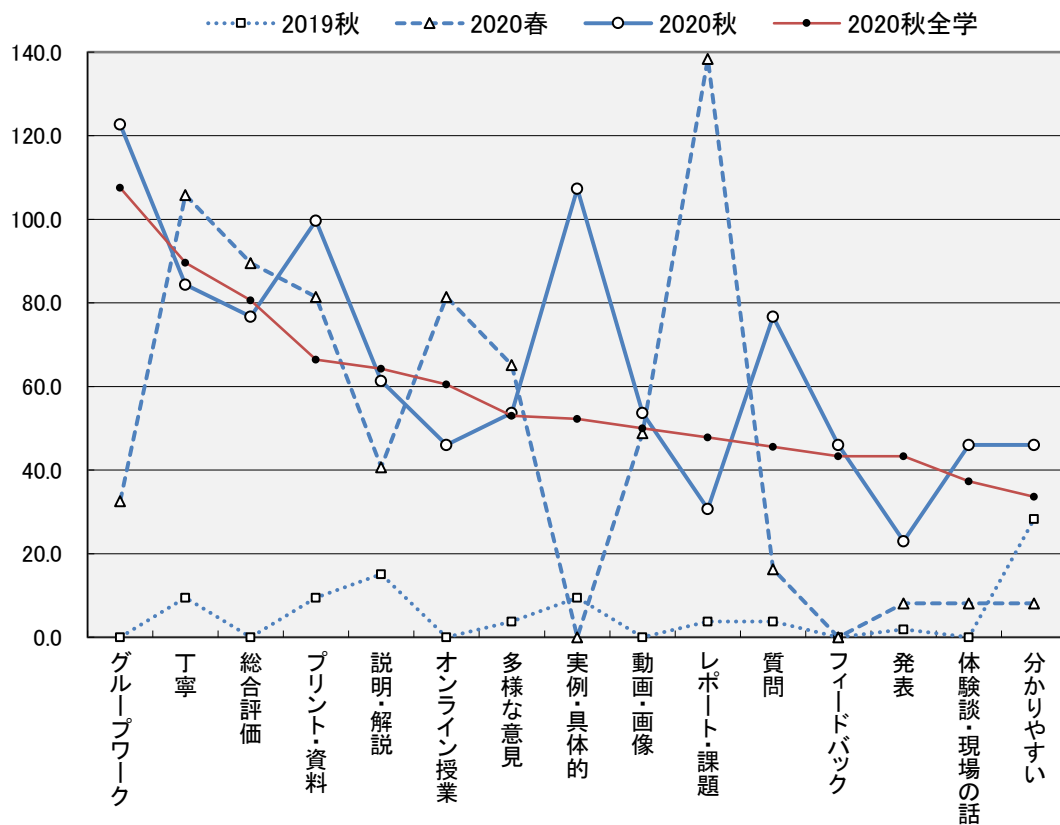
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率＝出現数／回答者数×10⁴
(回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

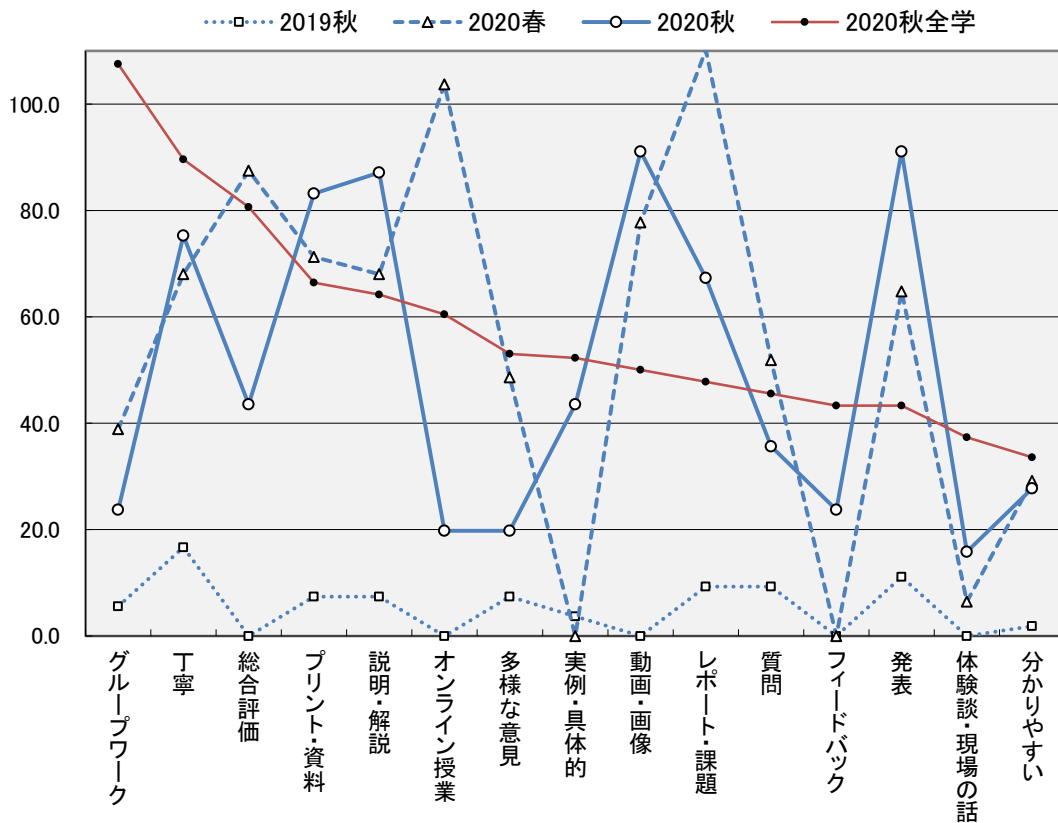


《人間学部》

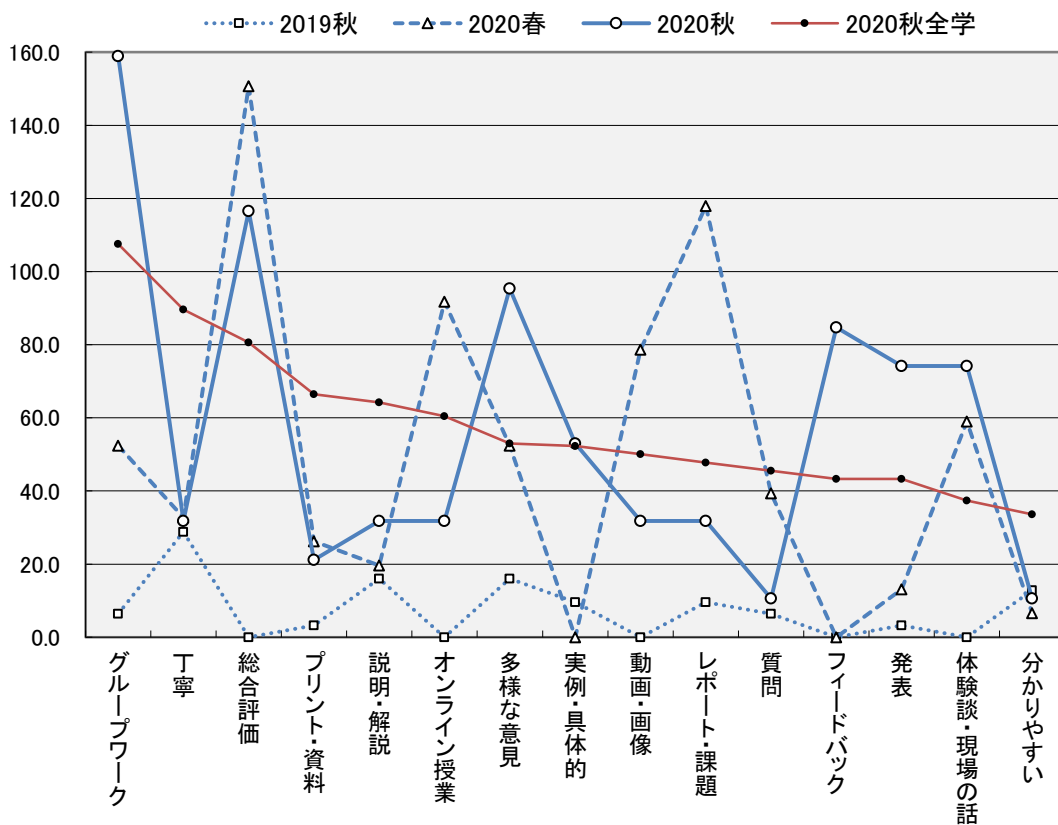


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

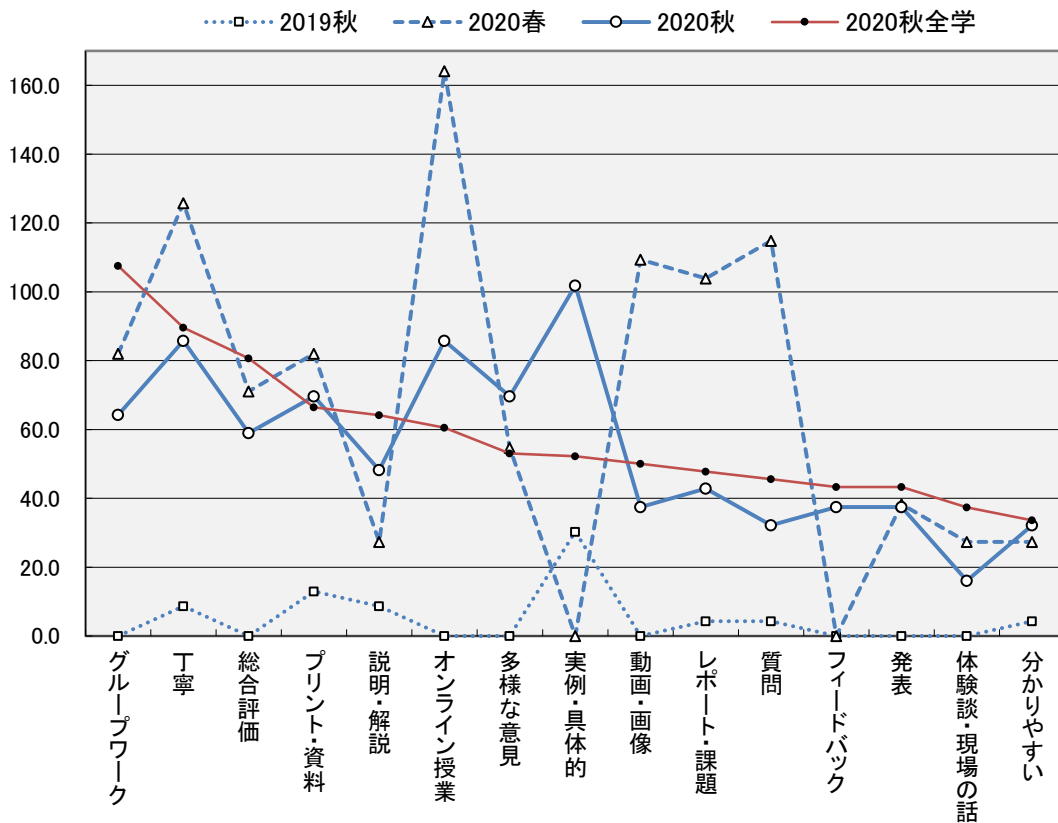


《表現学部》

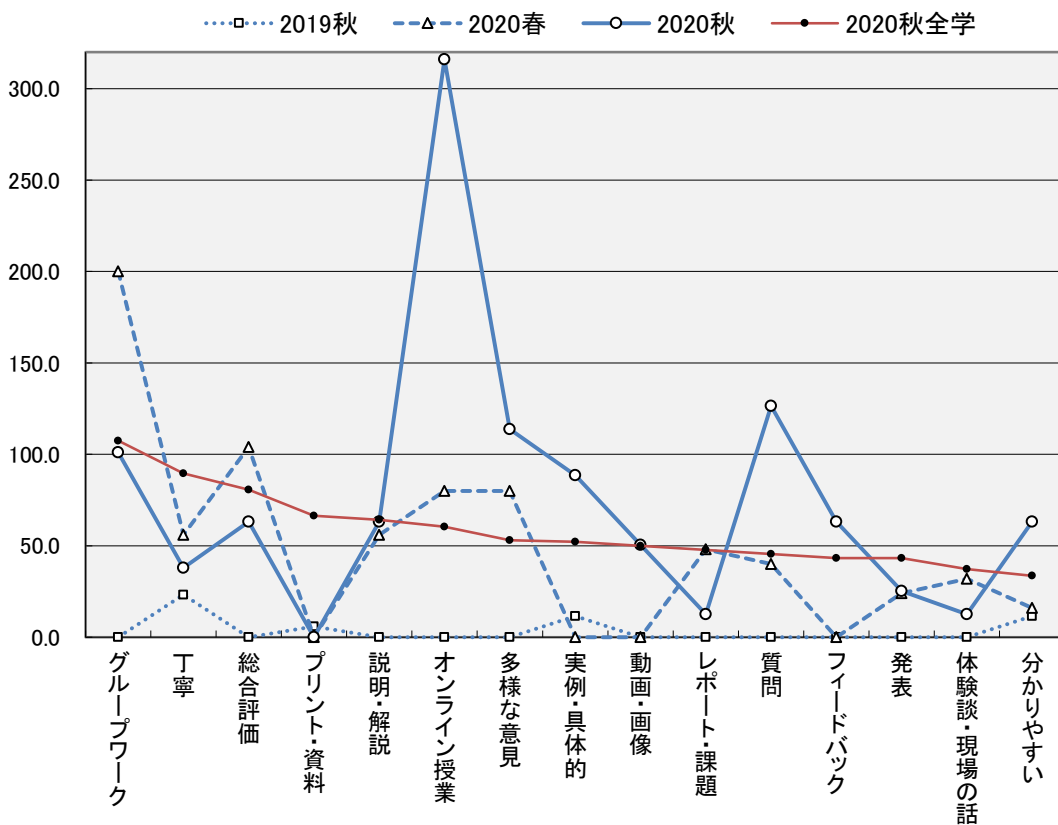


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

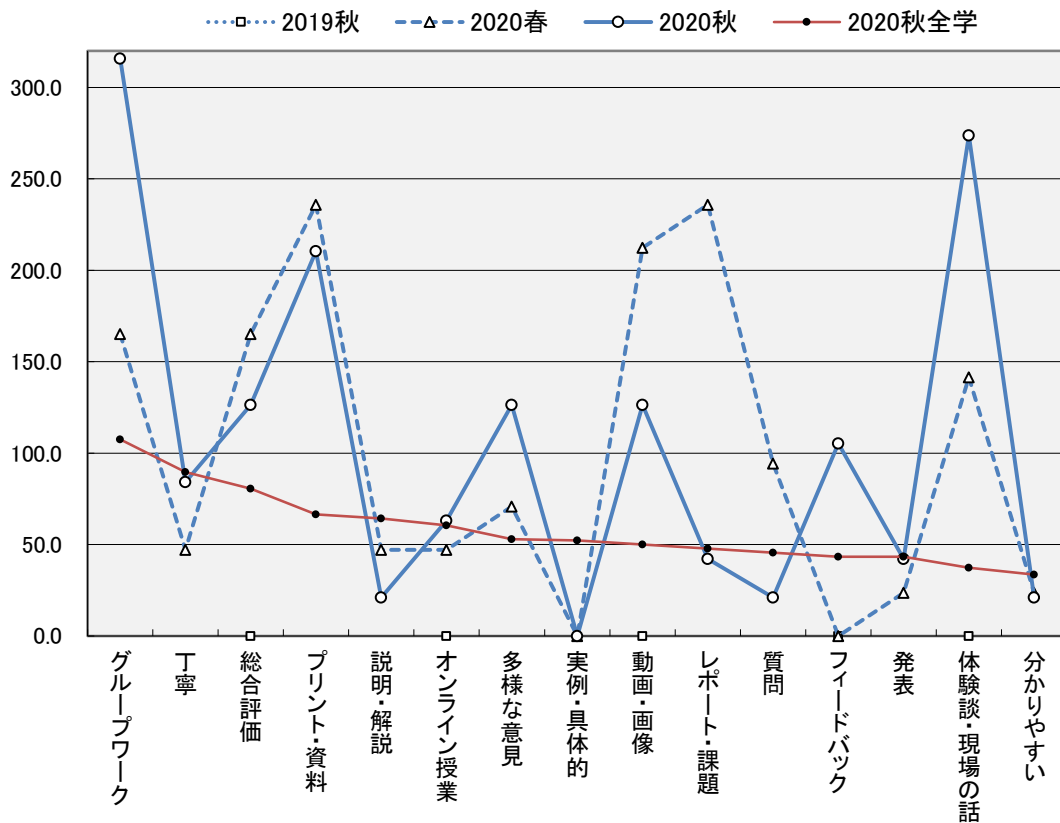


《地域創生学部》

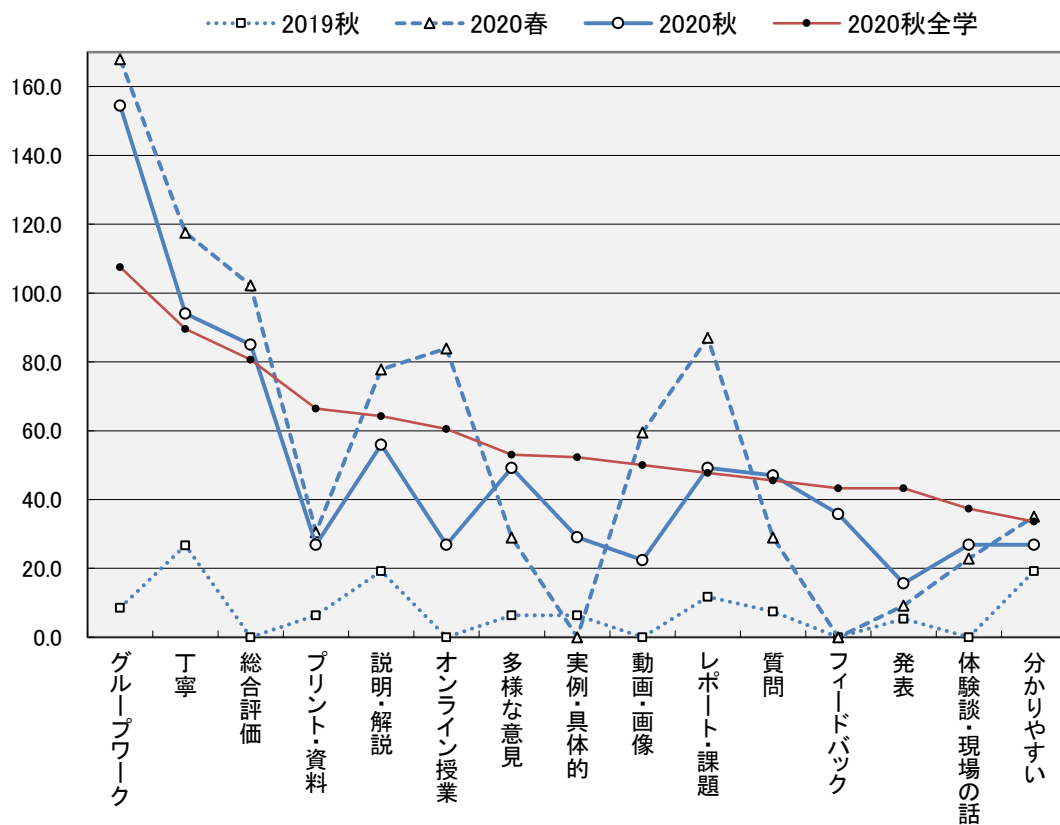


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《社会共生物学部》

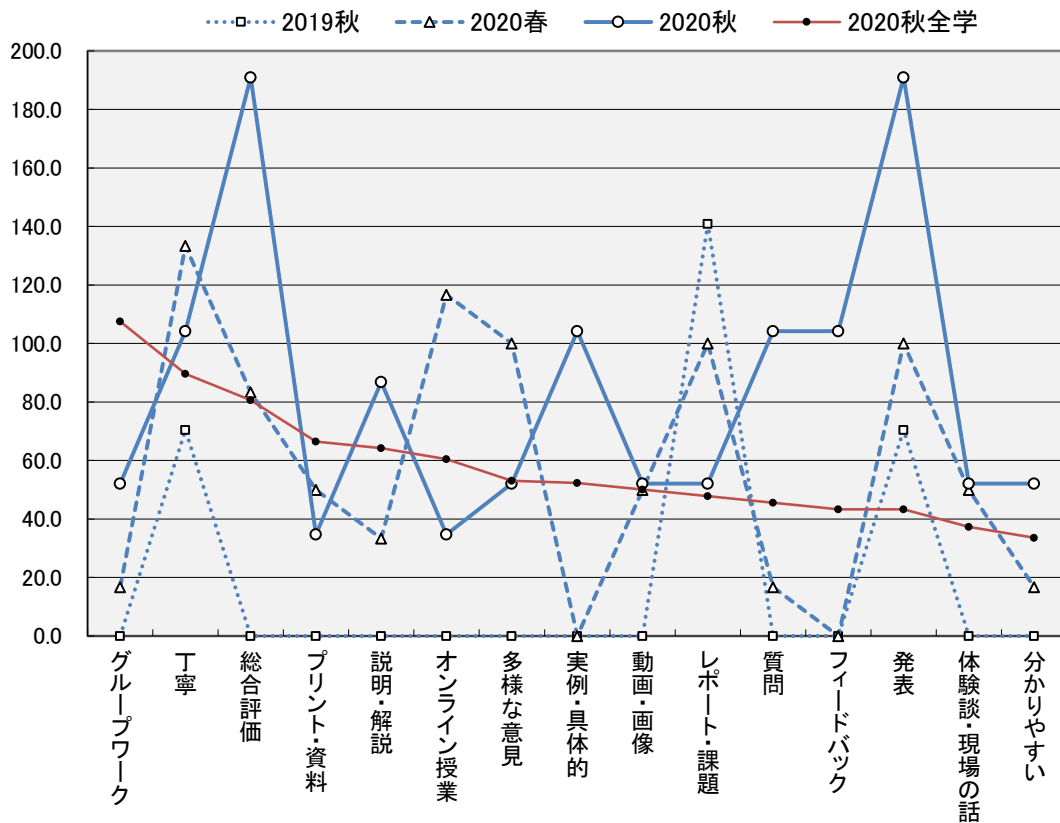


《Ⅰ類・第Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

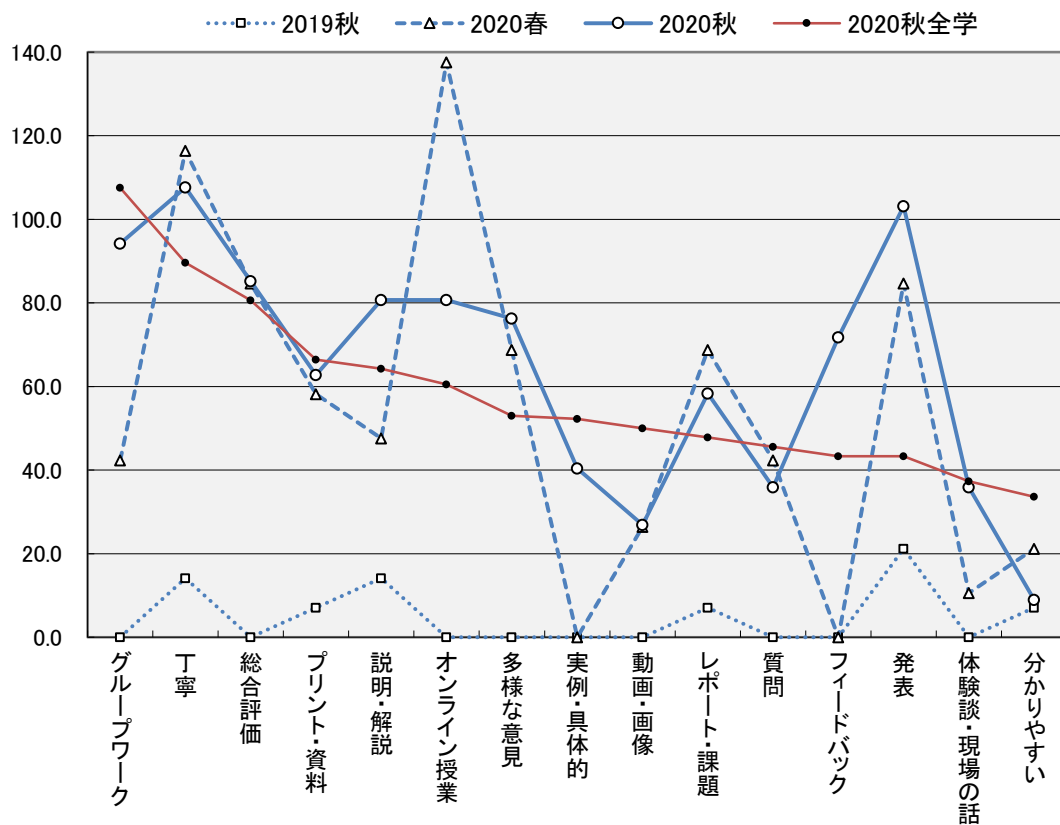


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1～3人》

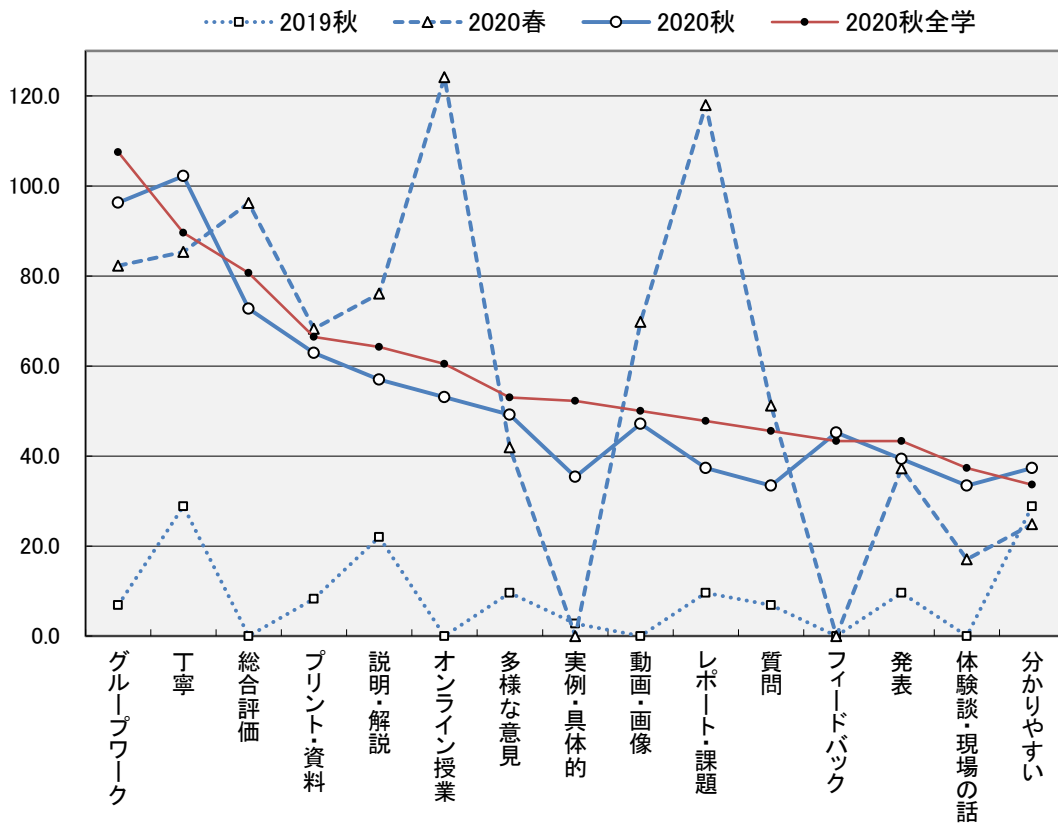


《4～9人》

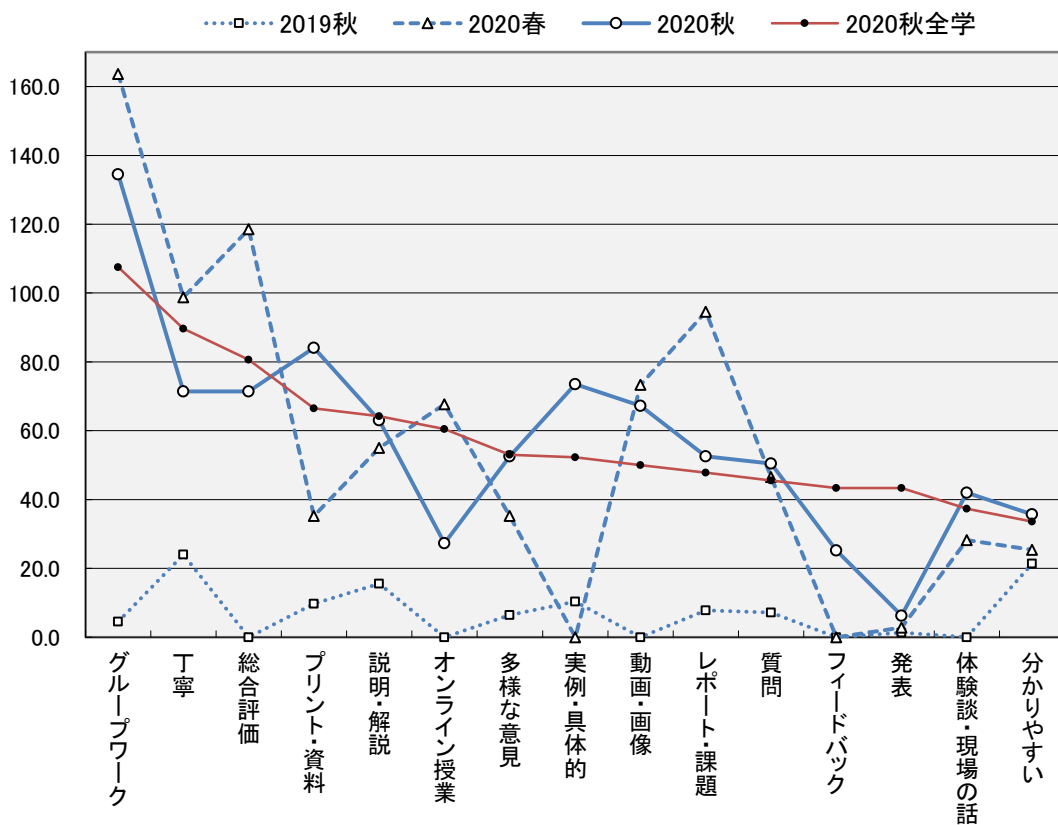


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《10～27人》

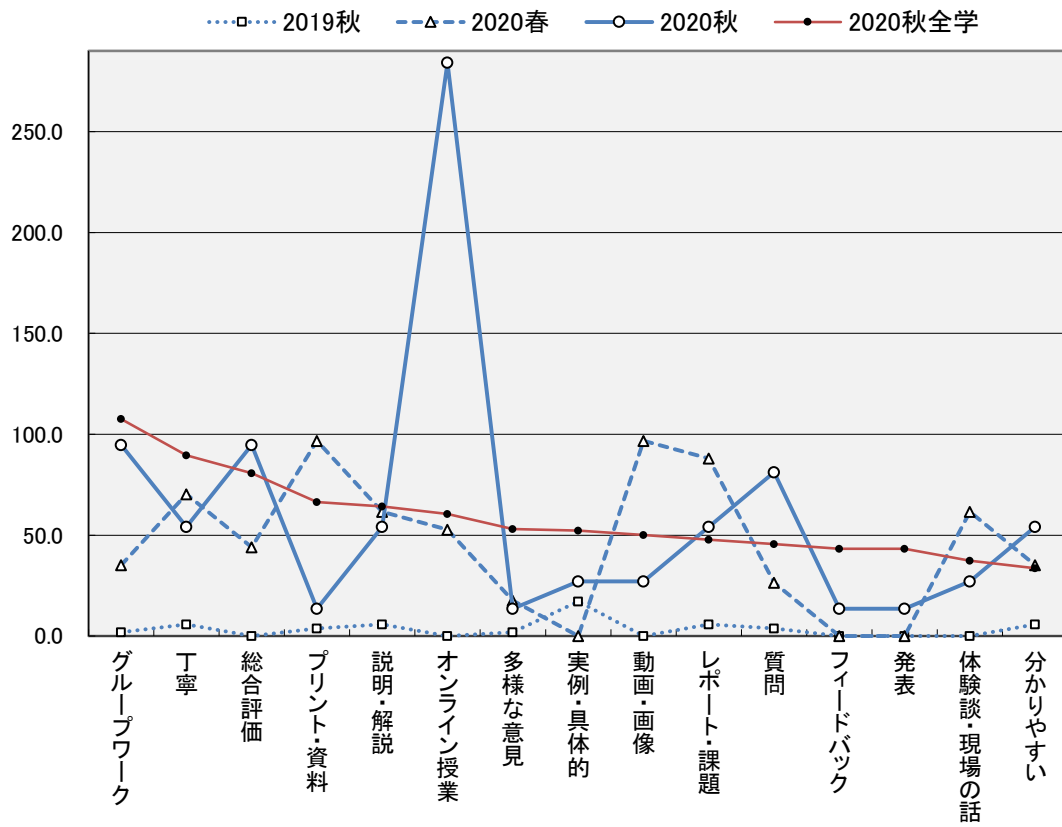


《28～81人》



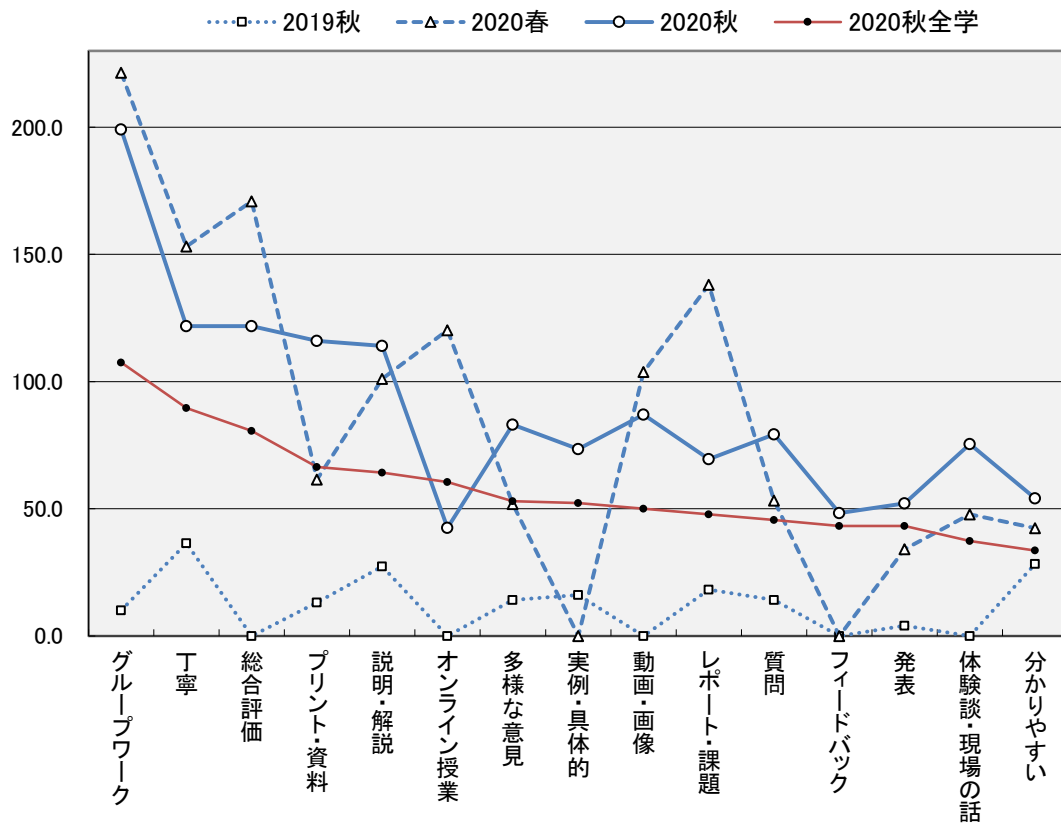
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《82人～》

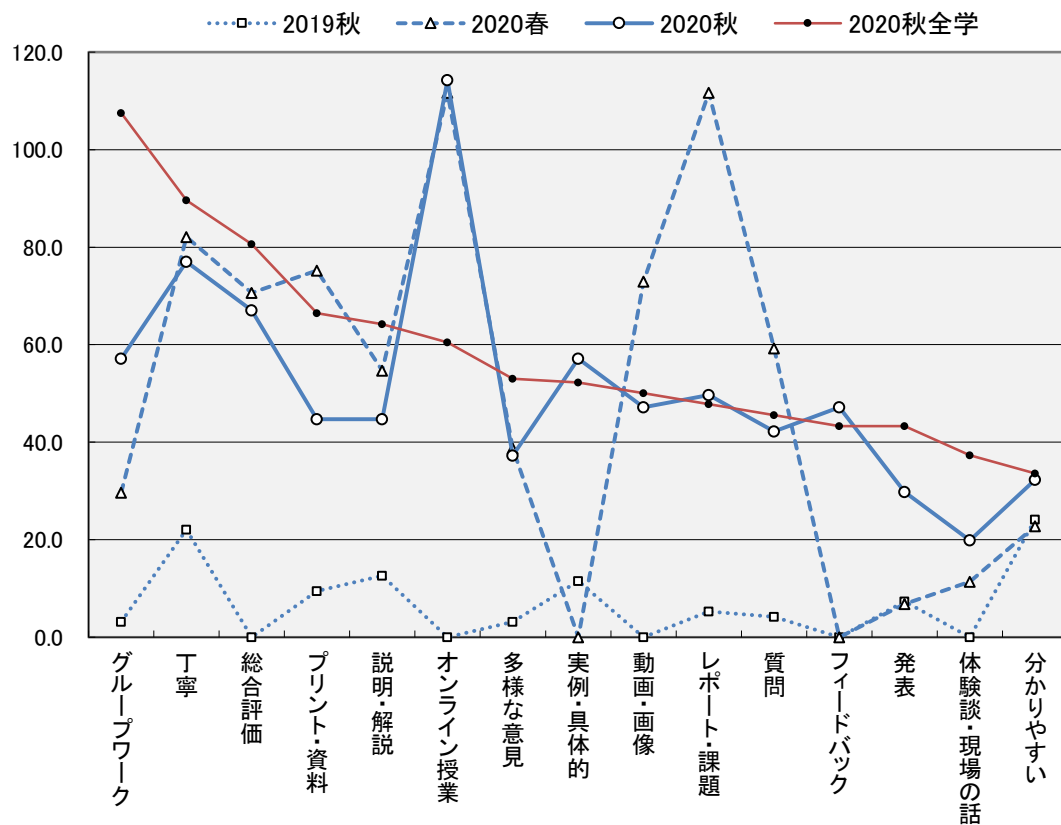


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学年別

《1年》

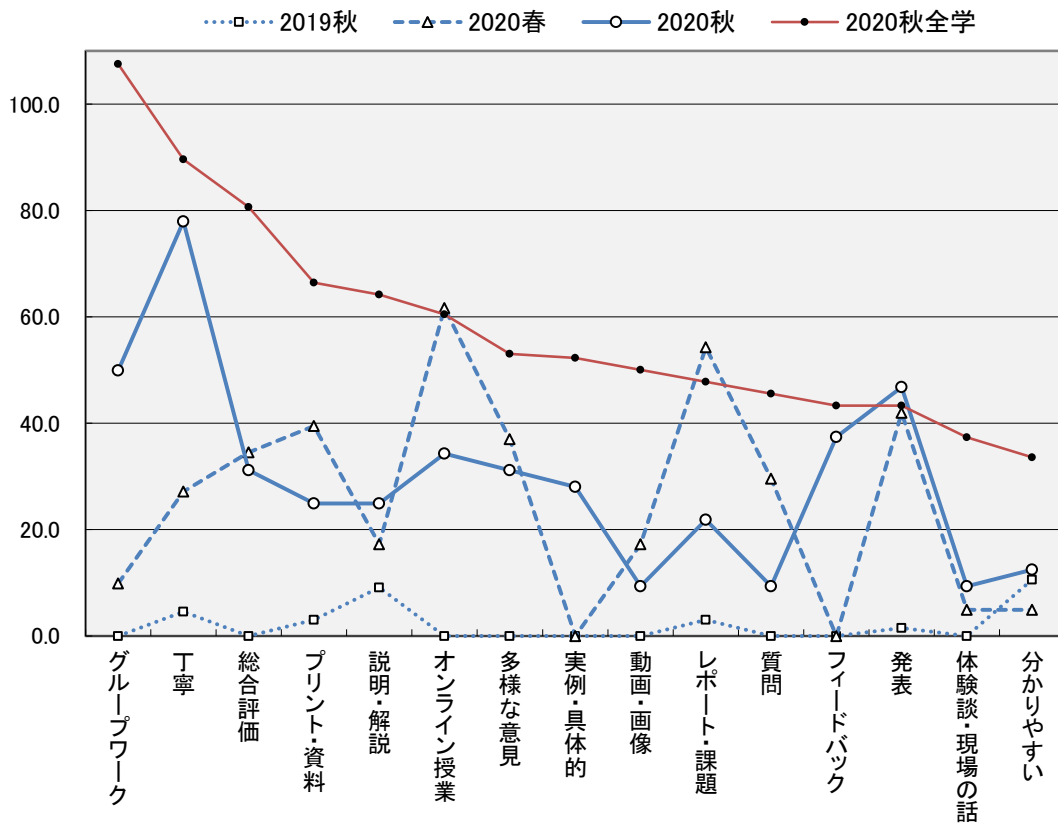


《2年》

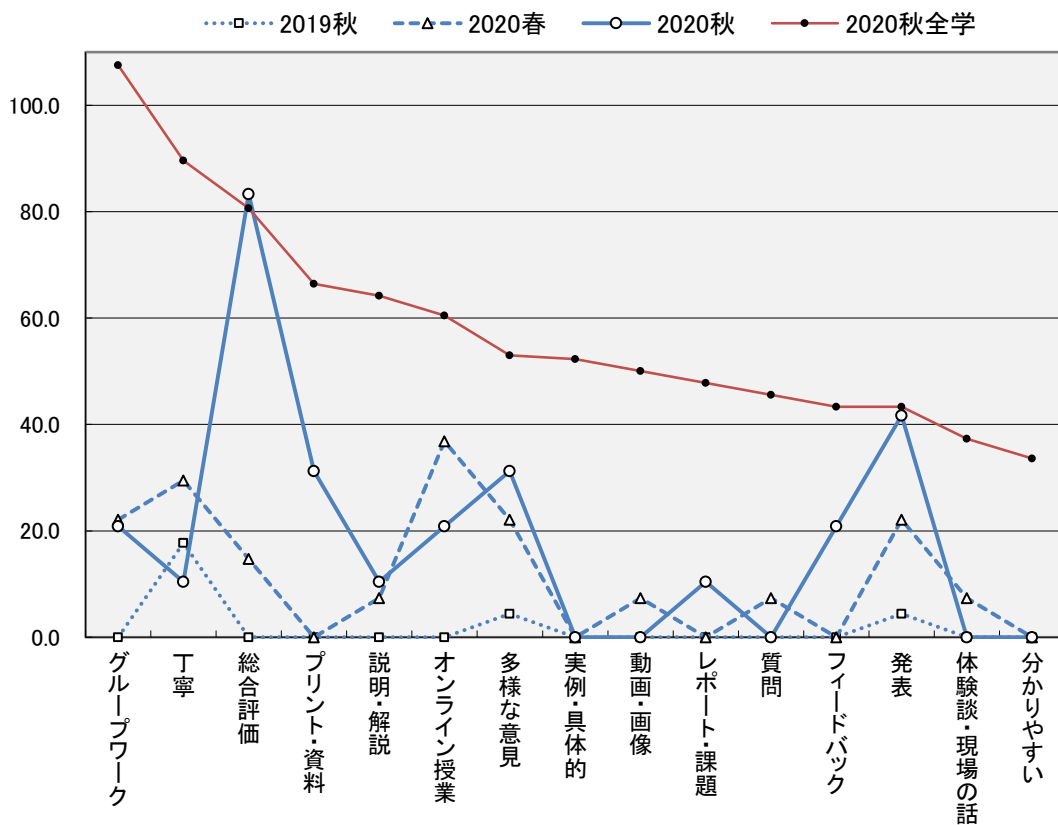


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学年別

《3年》



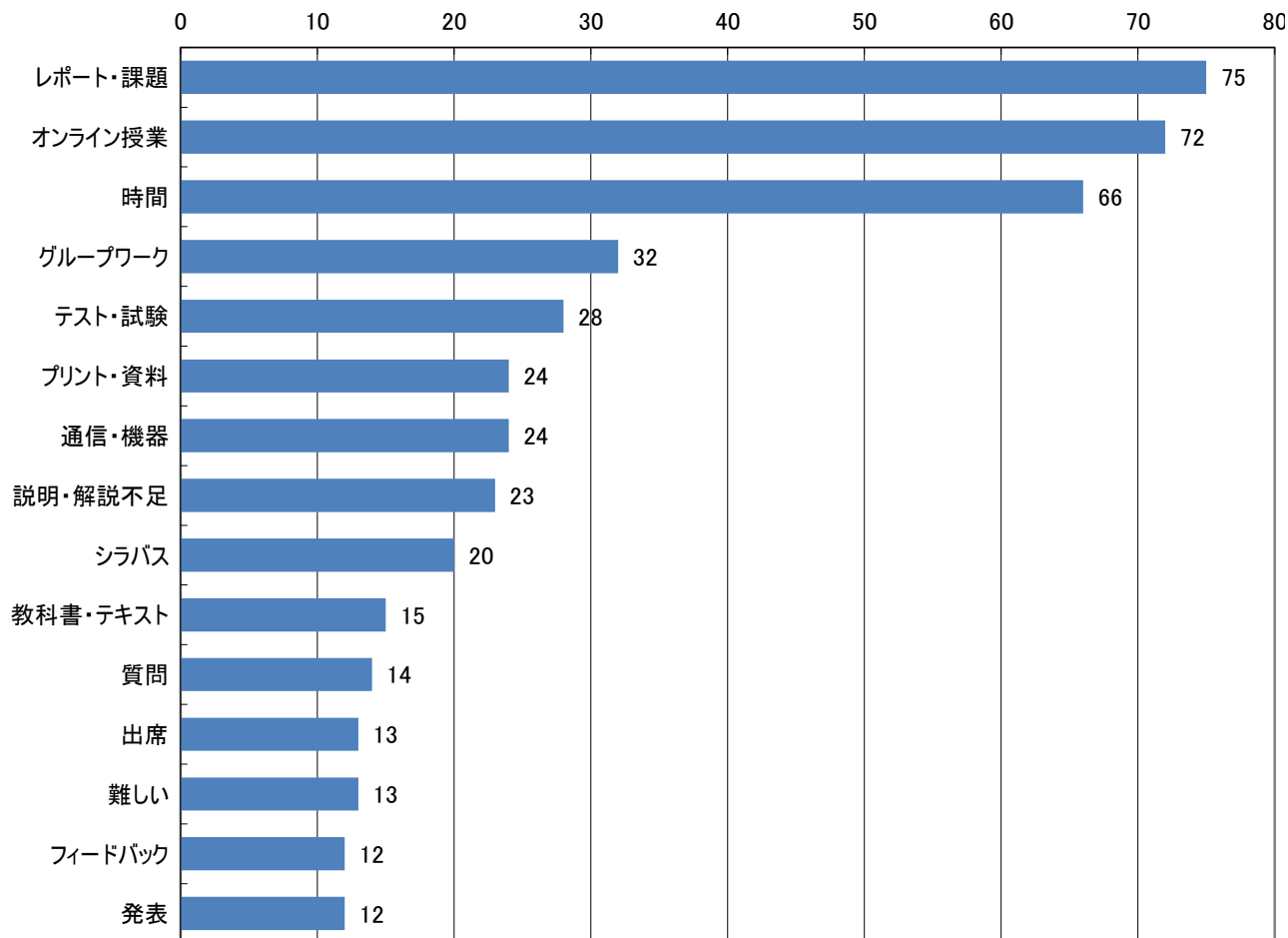
《4年》



【改善点】

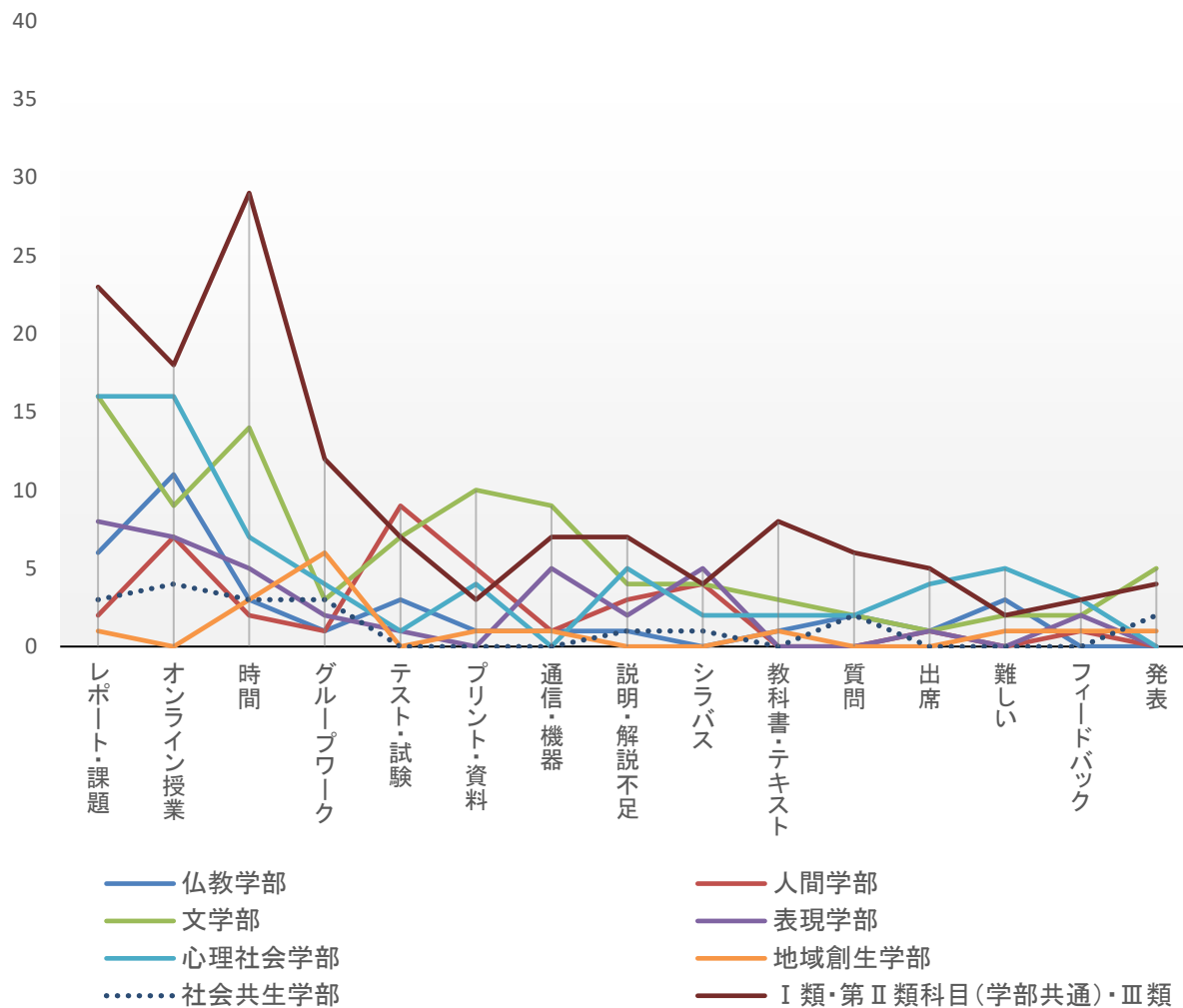
改善できる点

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【全学】

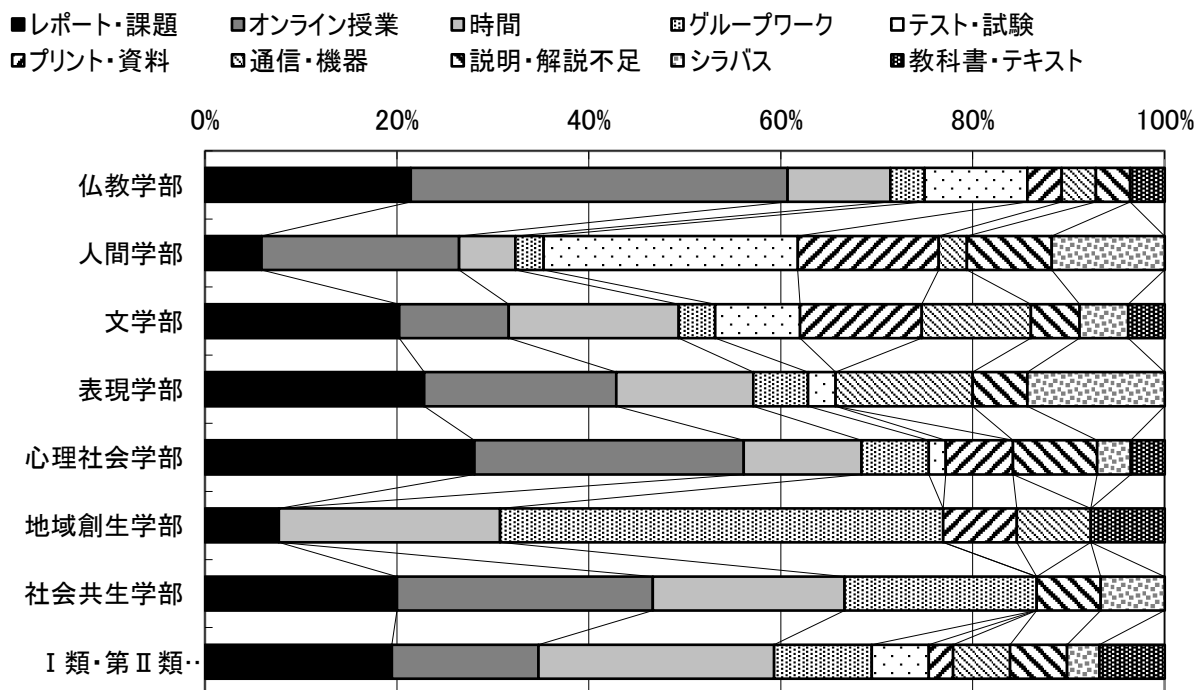


キーワード	主な内容	出現数
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／課題の提出方法を説明して欲しい ※「レポート、課題のフィードバックがほしかった」は「フィードバック」に分類。	75
オンライン授業	動画配信してほしい／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしい／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった ※「オンラインで質問しづらい」は「質問」に分類。	72
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／・授業時間以外の負担が大きい ※「テスト時間が短い、足りない」は「テスト・試験」に分類。	66
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	32
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない テスト中はミュートにしてほしい	28
プリント・資料	プリント、資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった／プリント、資料が分かりにくい／プリント、資料の内容、配布方法を改善してほしい	24
通信・機器	(先生側／生徒側の) 通信・機器のトラブルがあった ※先生の知識不足によるトラブルを含む	24
説明・解説不足	(授業について) 説明・解説が不足・不十分	23
シラバス	シラバスに沿って授業をして欲しい／シラバスと授業内容が異なる	20
教科書・テキスト	教科書、テキスト、教材が分かりにくい／テキスト、教材の内容、配布方法を改善してほしい	15
質問	質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない	14
出席	出席の取り方を改善してほしい（成績への反映の仕方など）／出席情報が反映されない（反映が遅い）、出席確認に時間がかかる／（課題提出による）出席確認は不安／出欠管理をしっかりしてほしい	13
難しい	授業・資料等が難しすぎる	13
フィードバック	フィードバックが分かりにくい／フィードバックをしてほしい／足りなかった（アドバイス・コメント・返事・添削含む）	12
発表	(無駄な) 発表をさせないでほしい／発表のさせ方、時間配分を改善してほしい	12

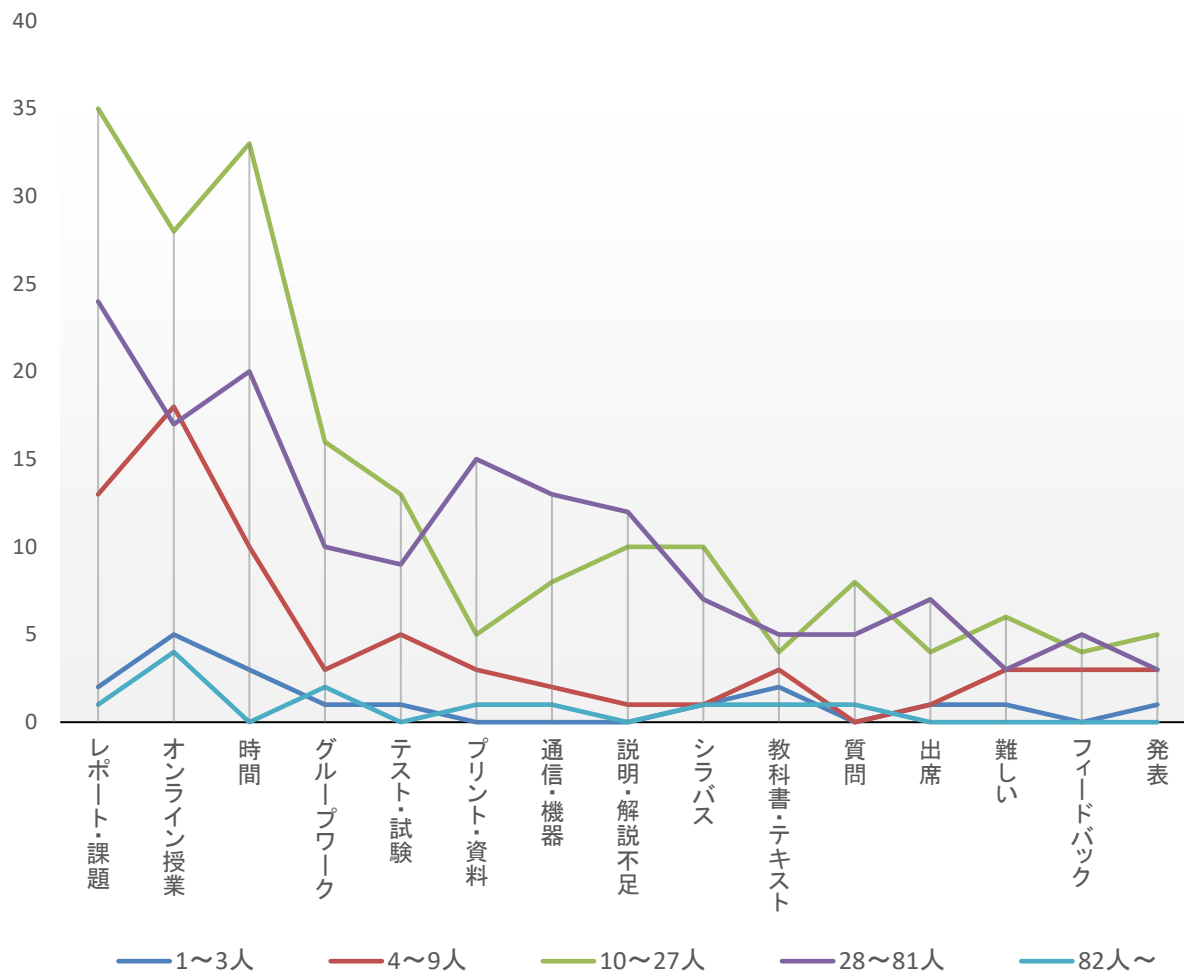
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学部別】



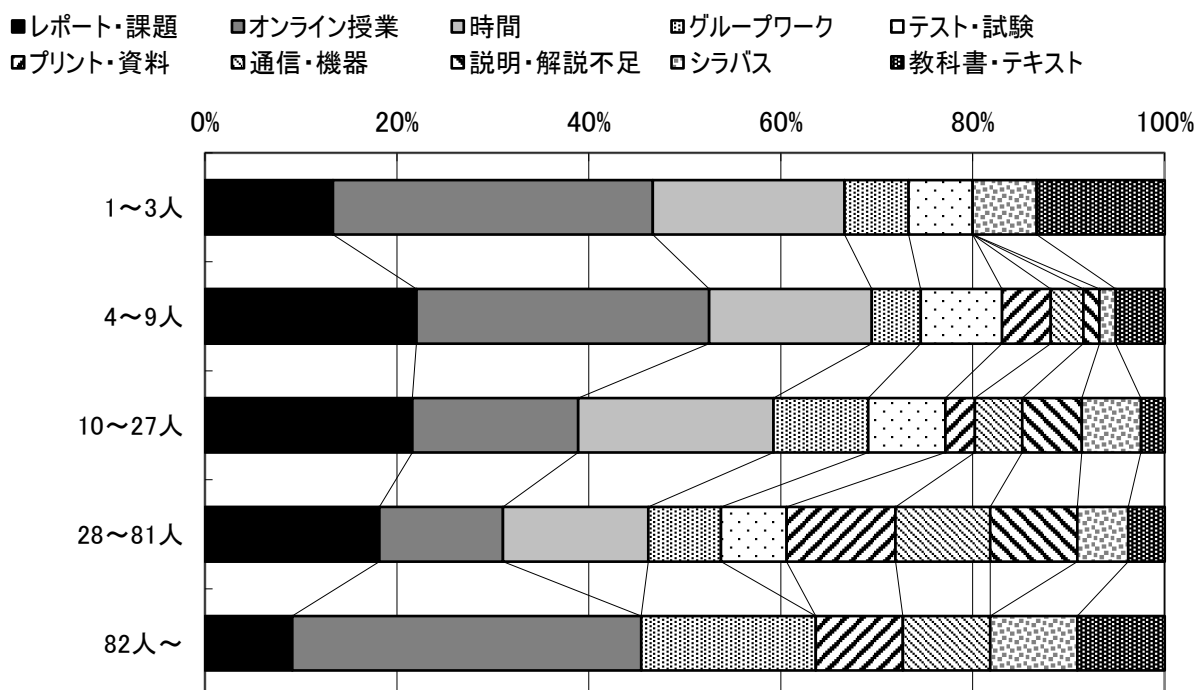
上位10項目の学部別割合



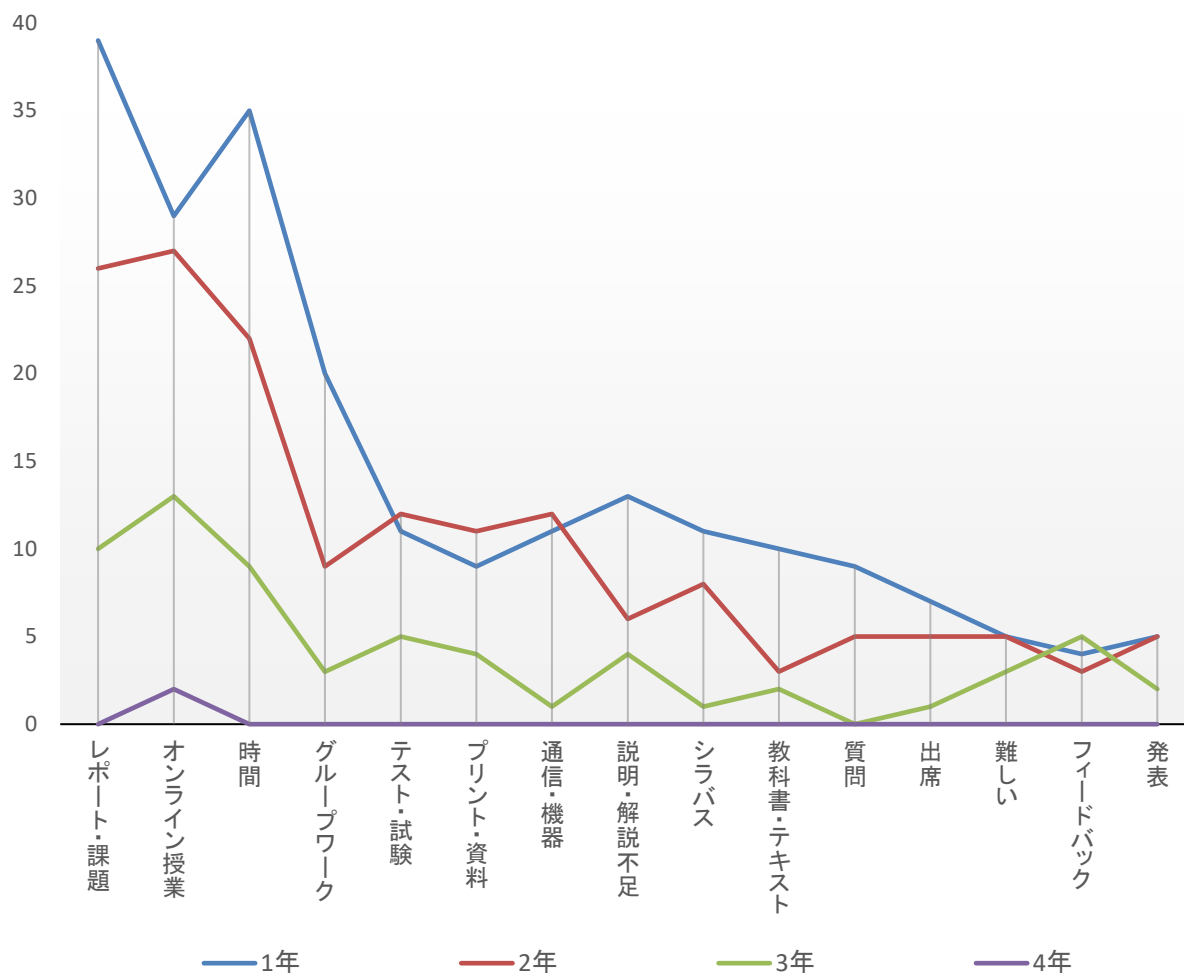
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【回答人数帯別】



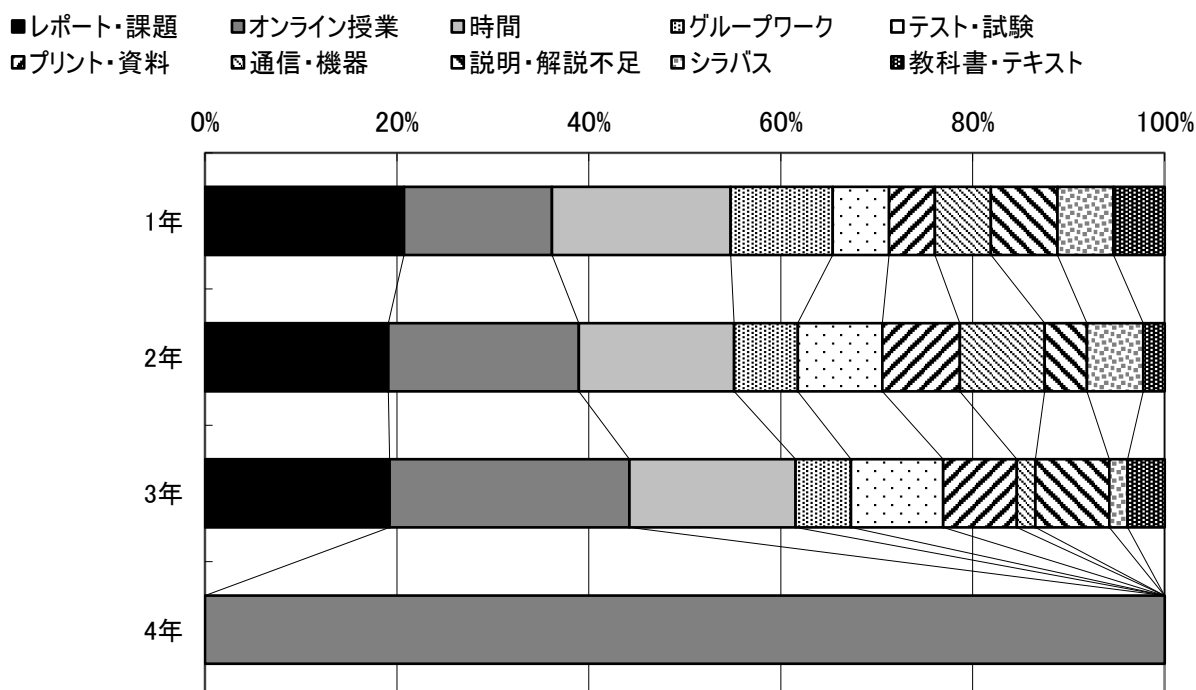
上位10項目の回答人数帯別割合



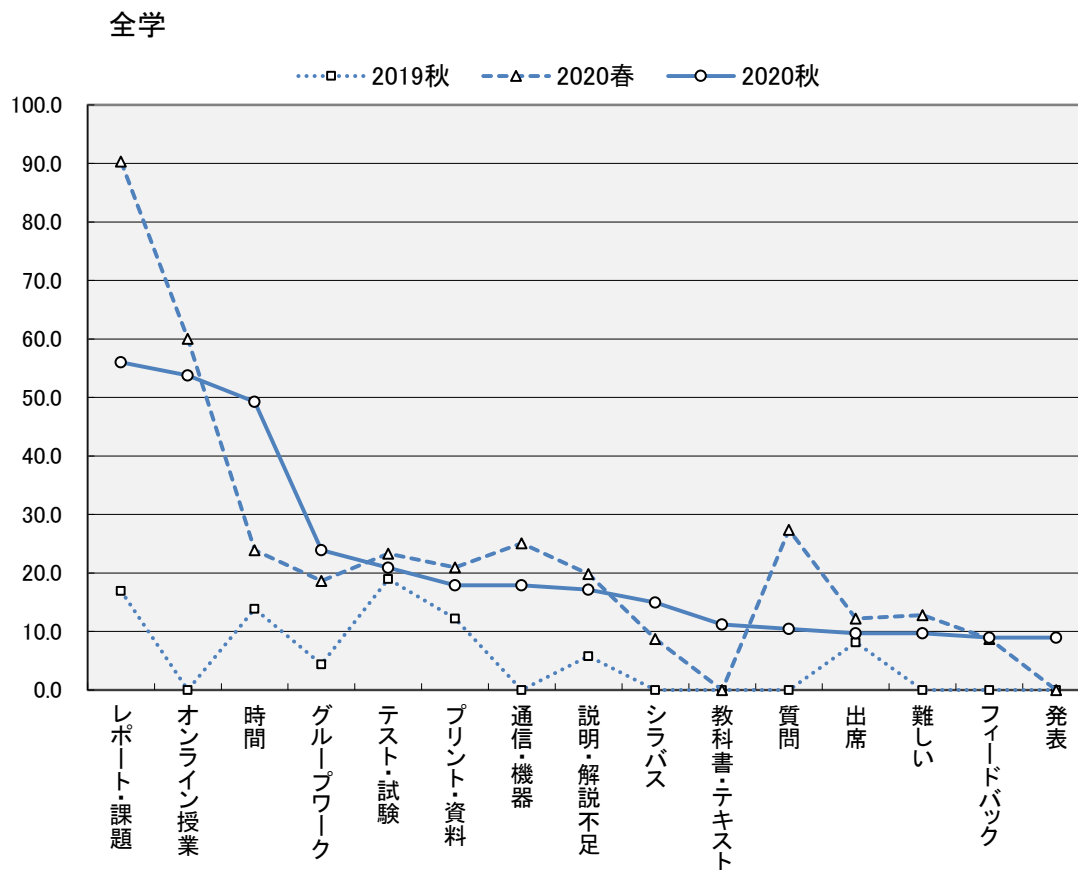
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】全学

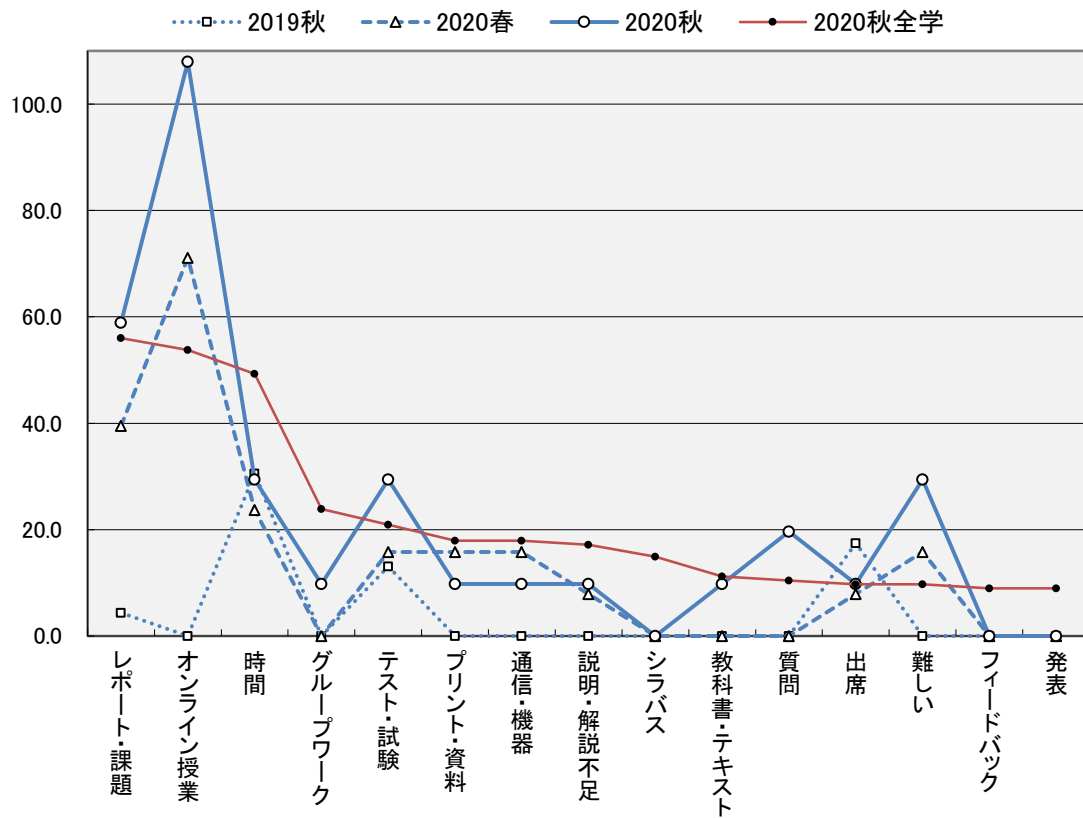


「出現率」について

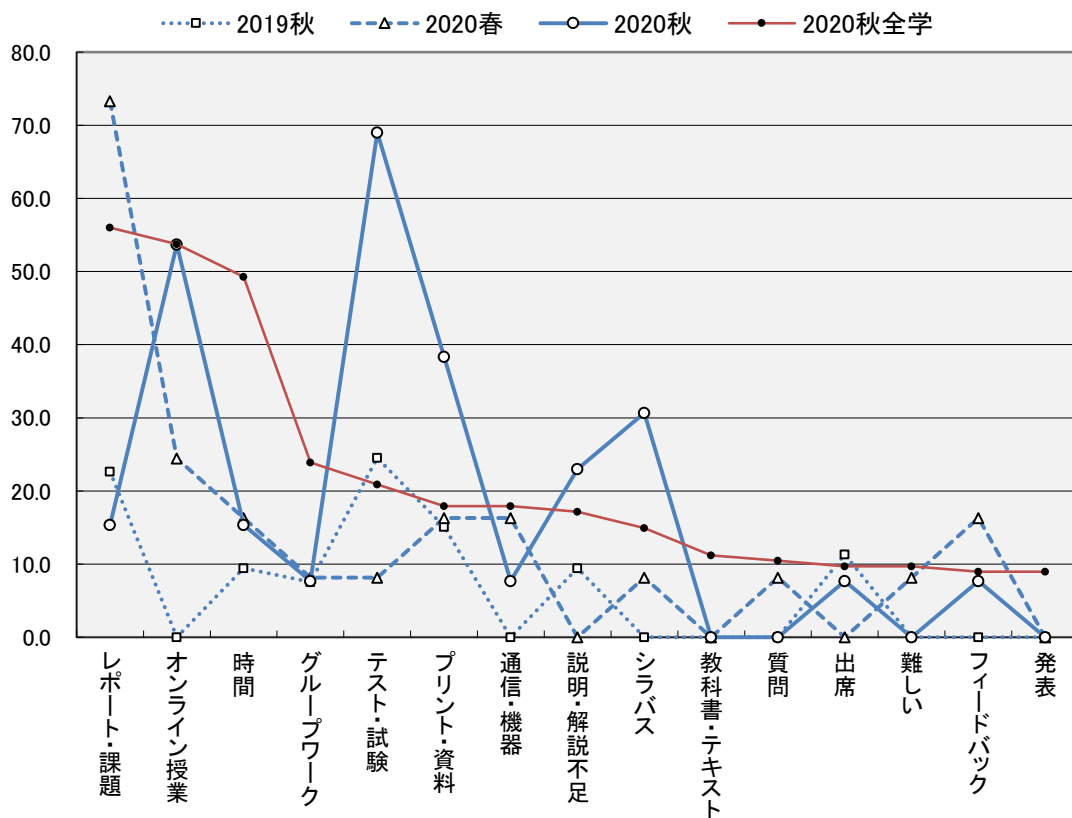
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率＝出現数／回答者数×10⁴
(回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

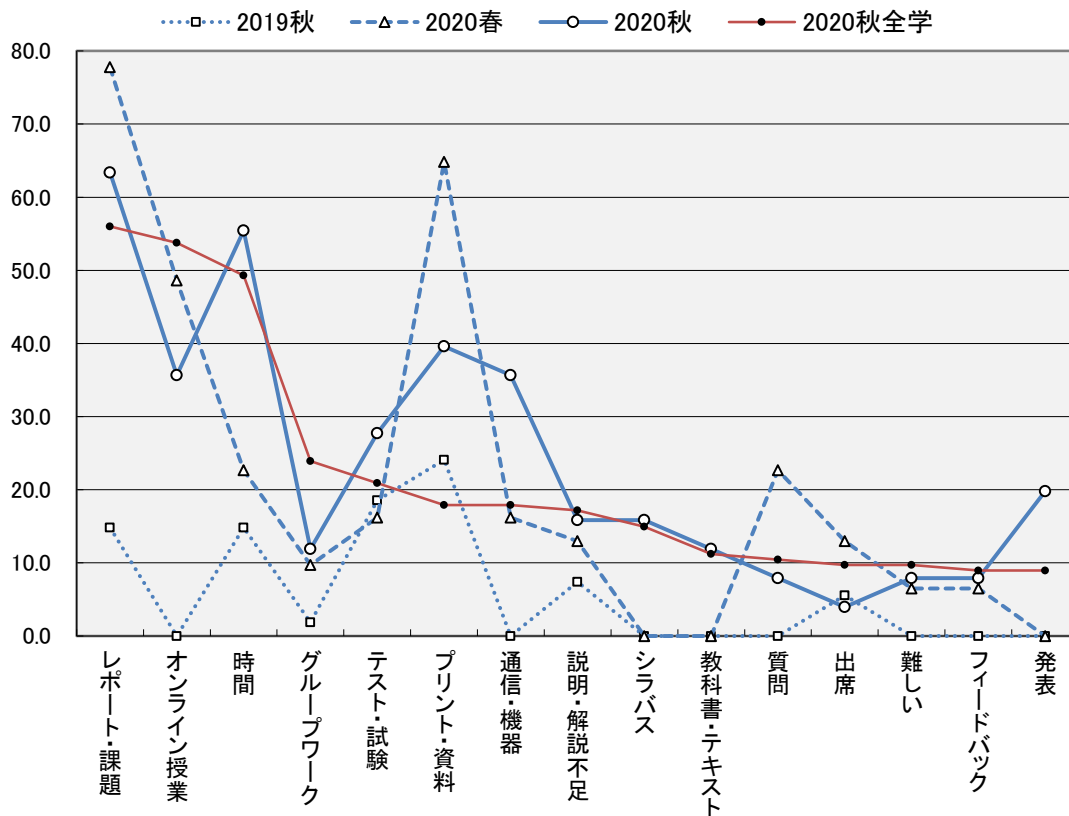


《人間学部》

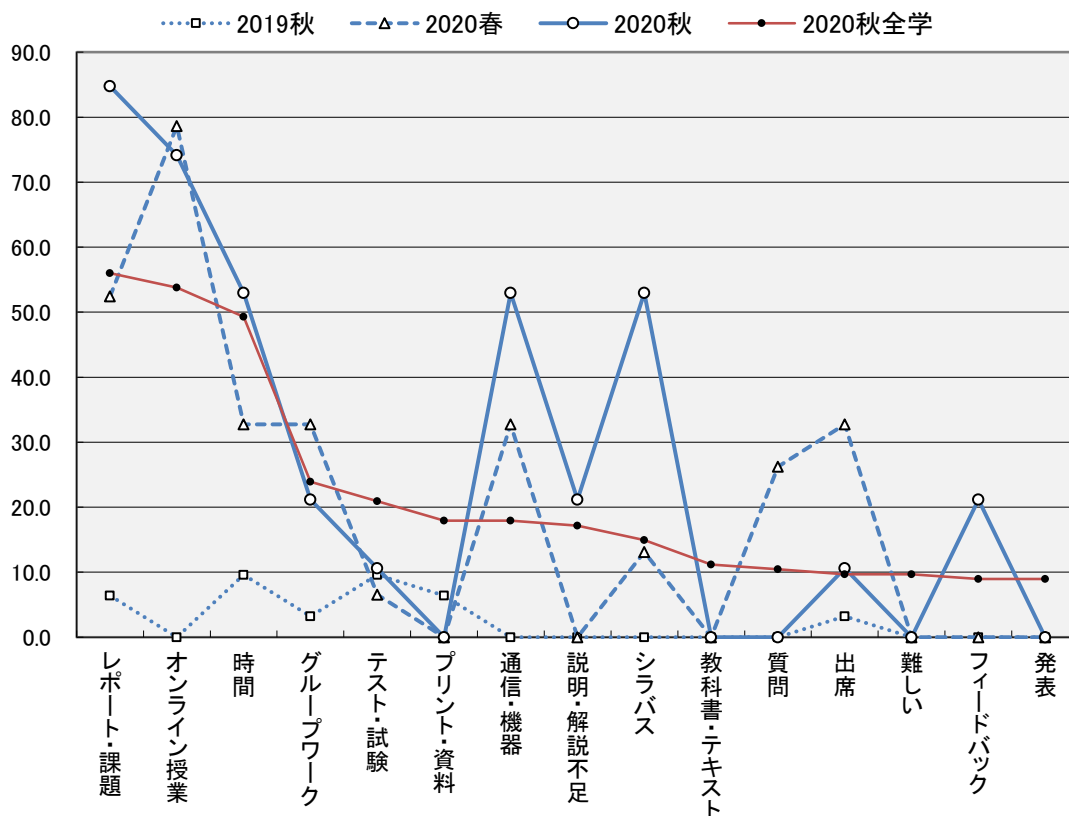


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

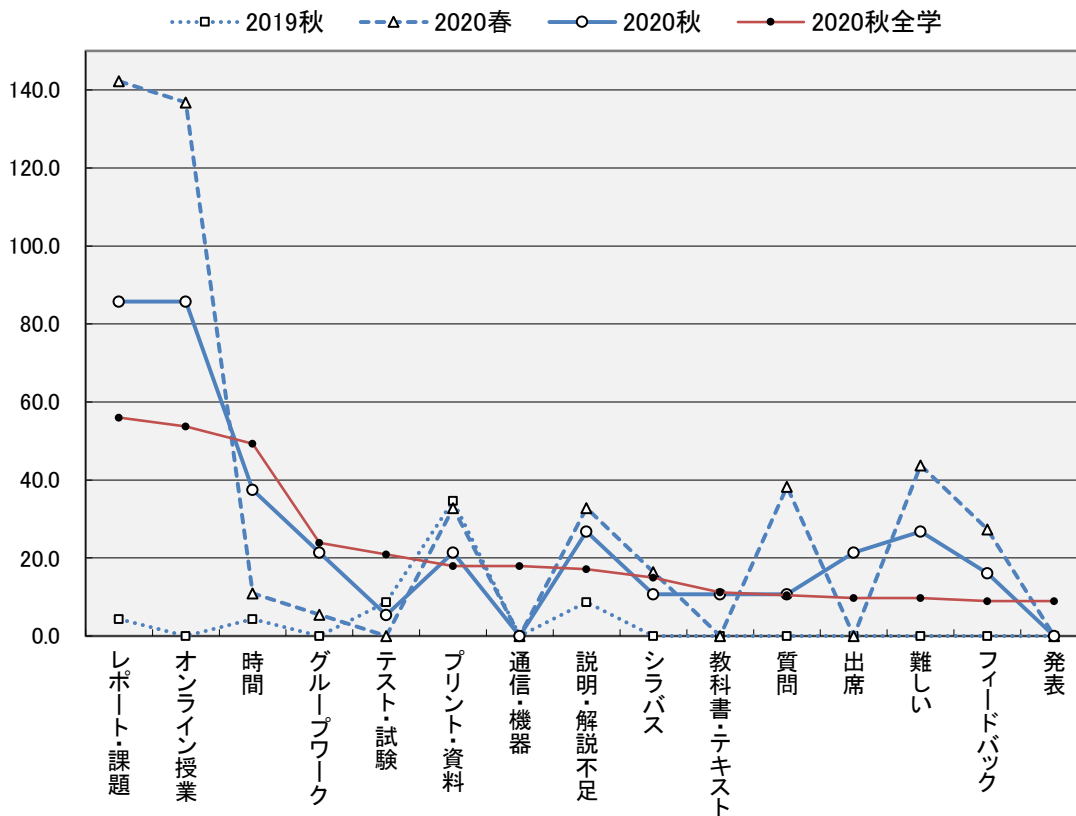


《表現学部》

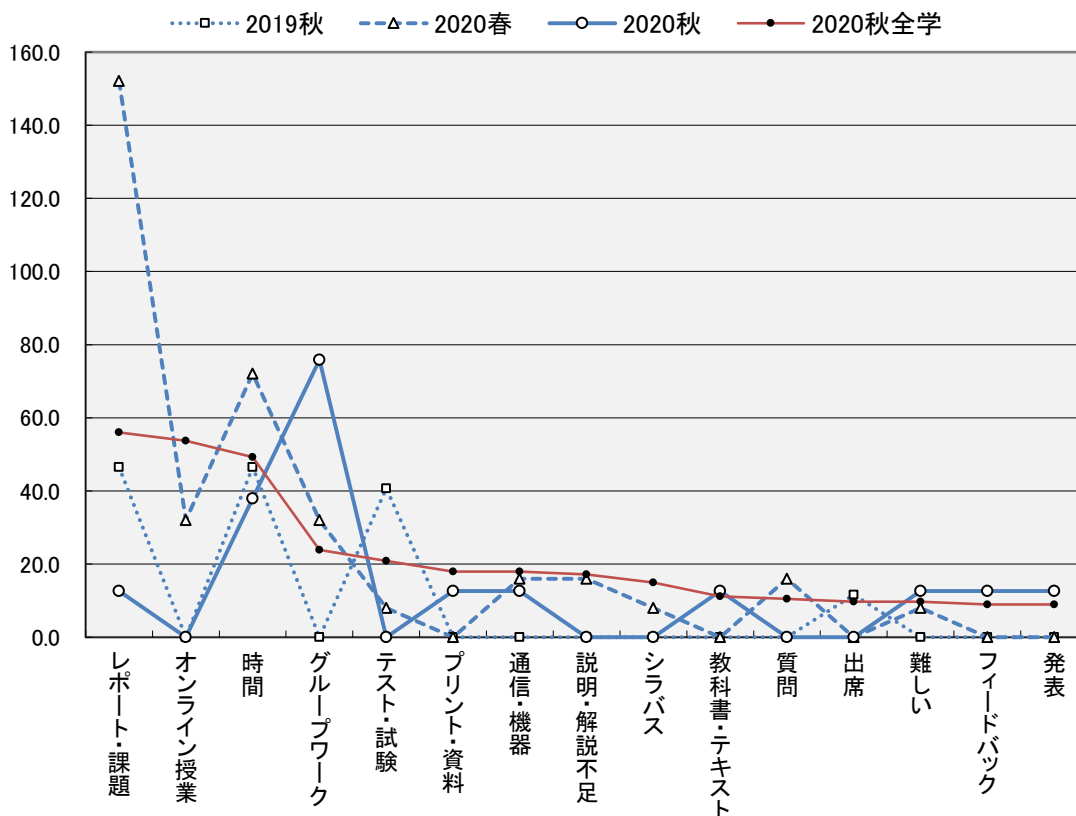


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

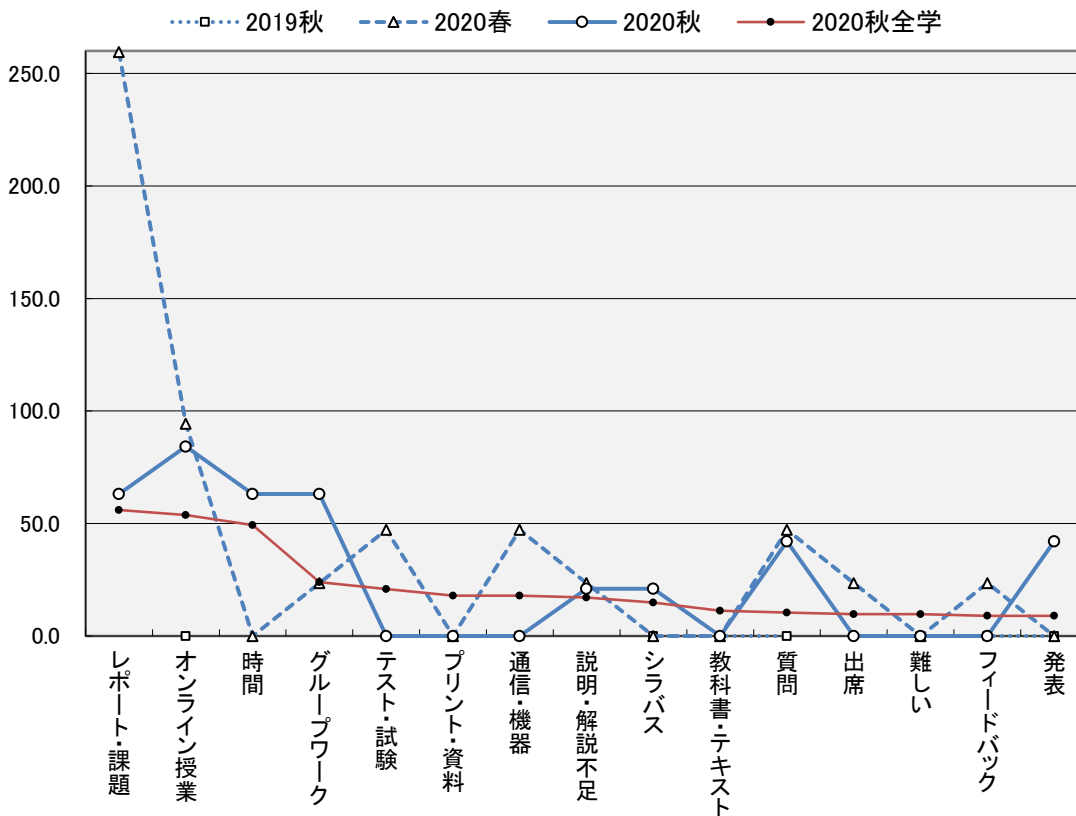


《地域創生学部》

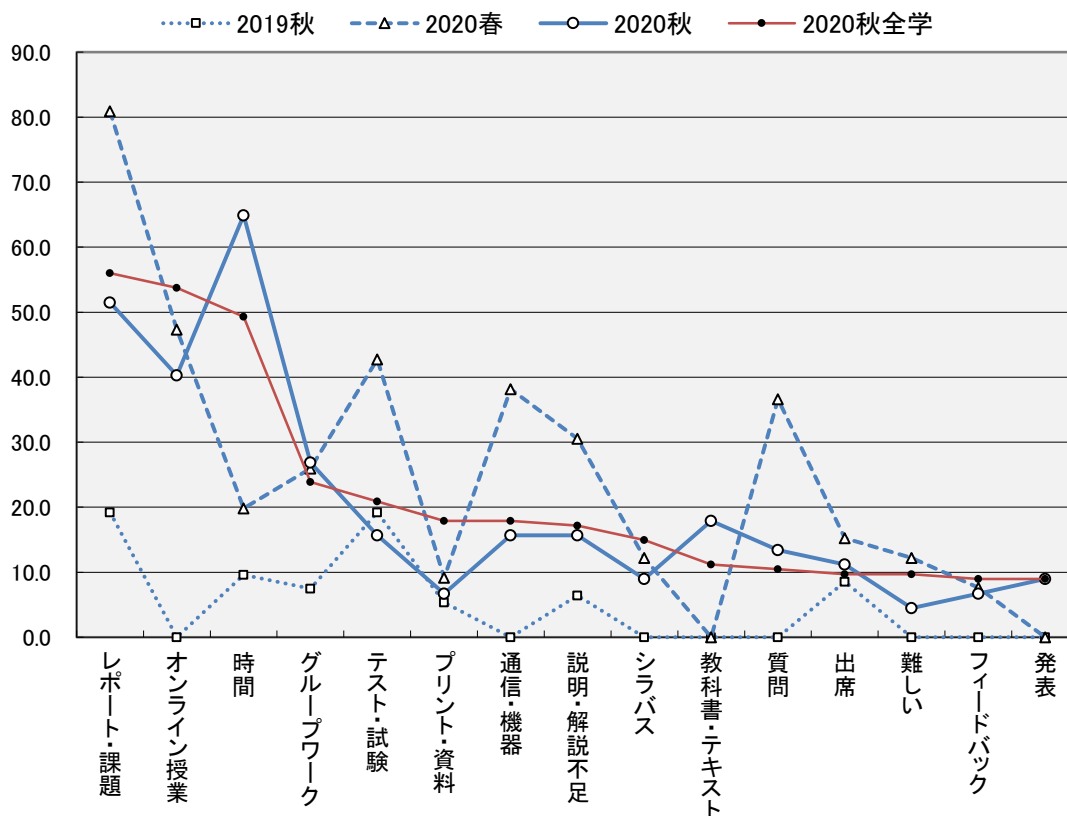


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《社会共生物学部》

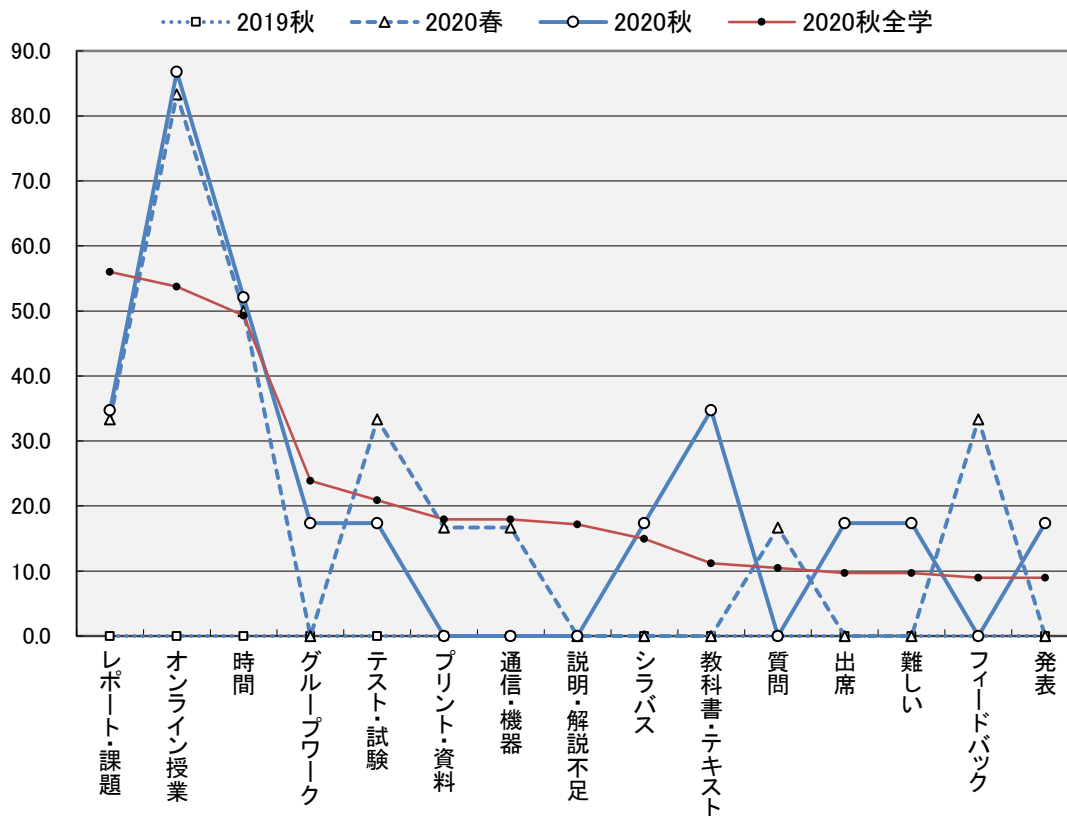


《Ⅰ類・Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

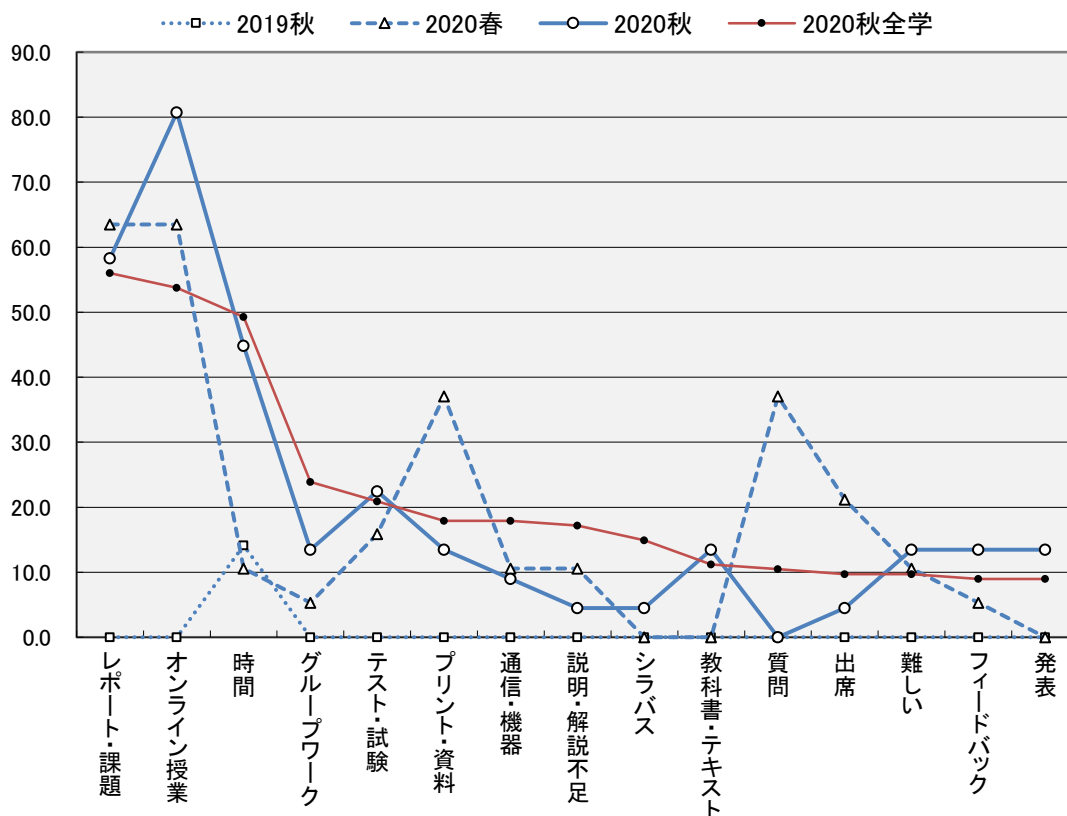


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

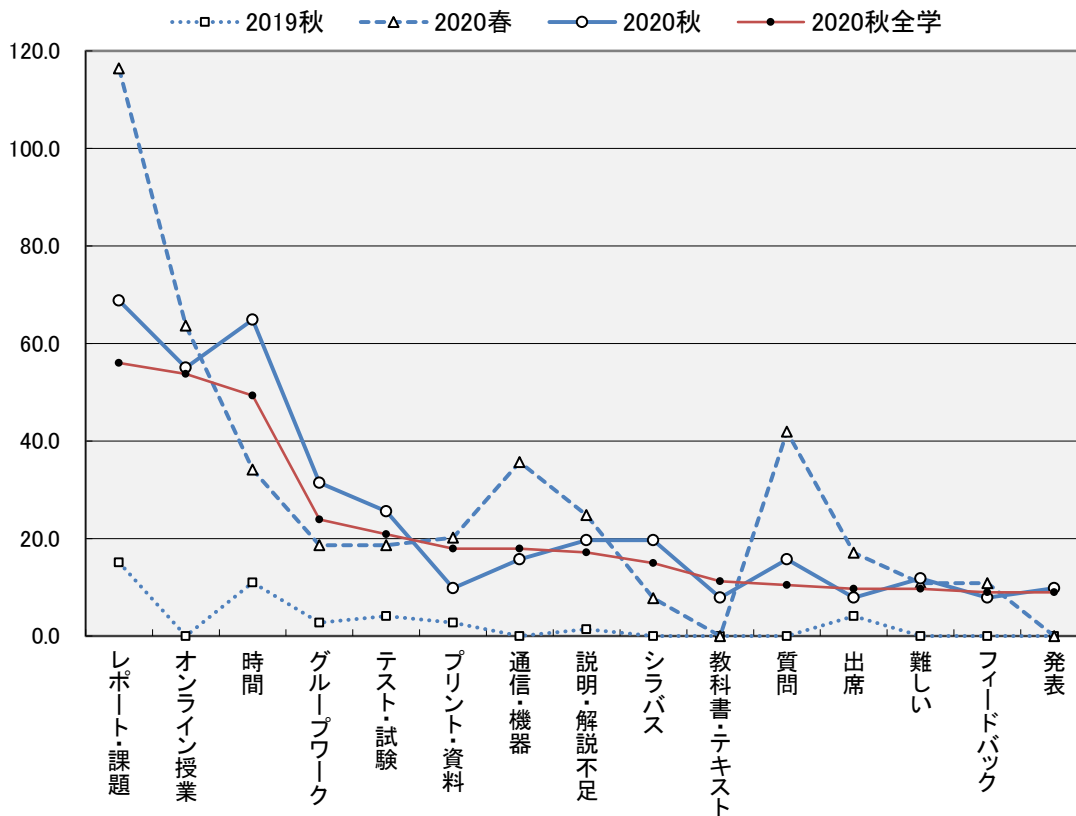


《4～9人》

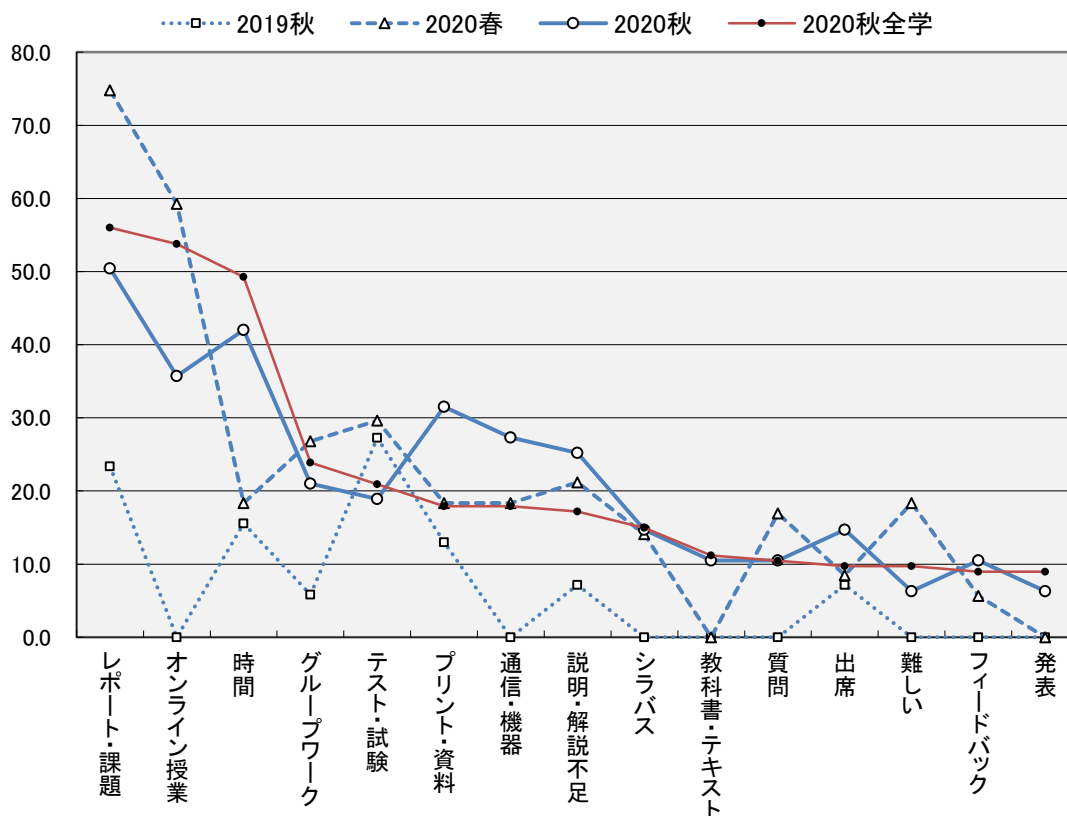


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

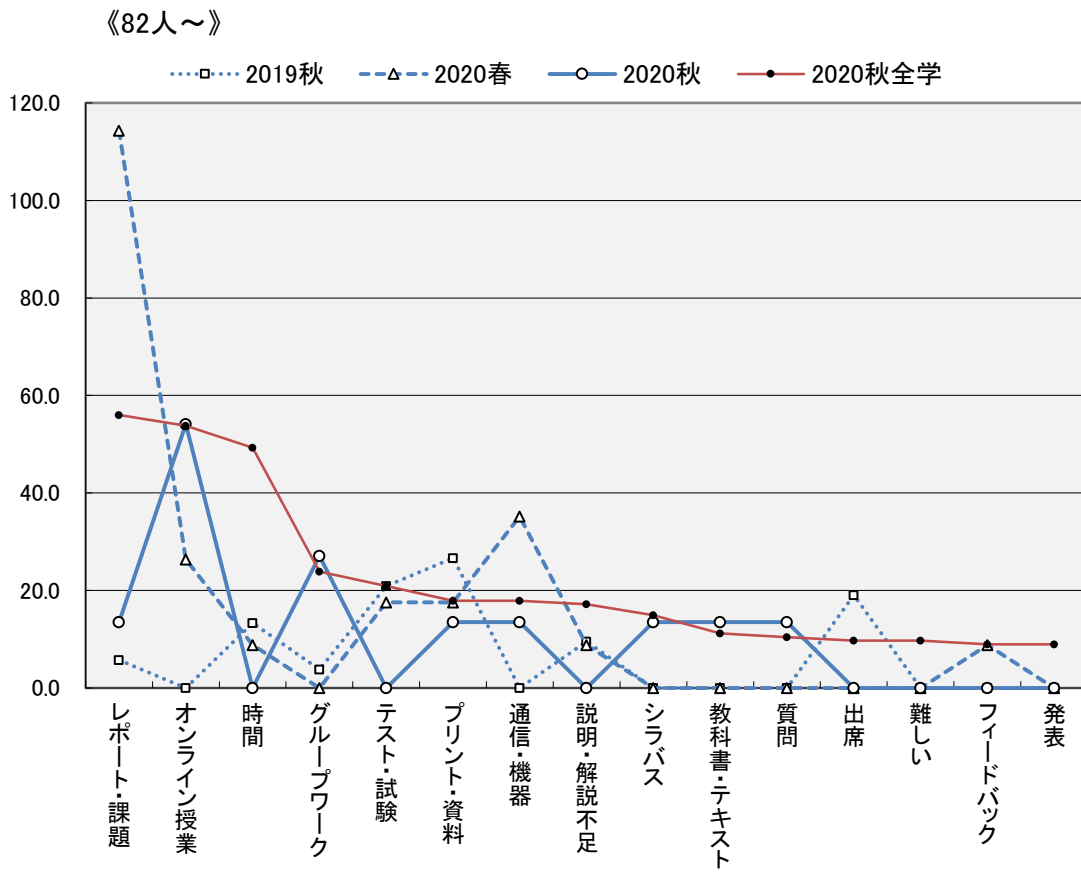
《10～27人》



《28～81人》

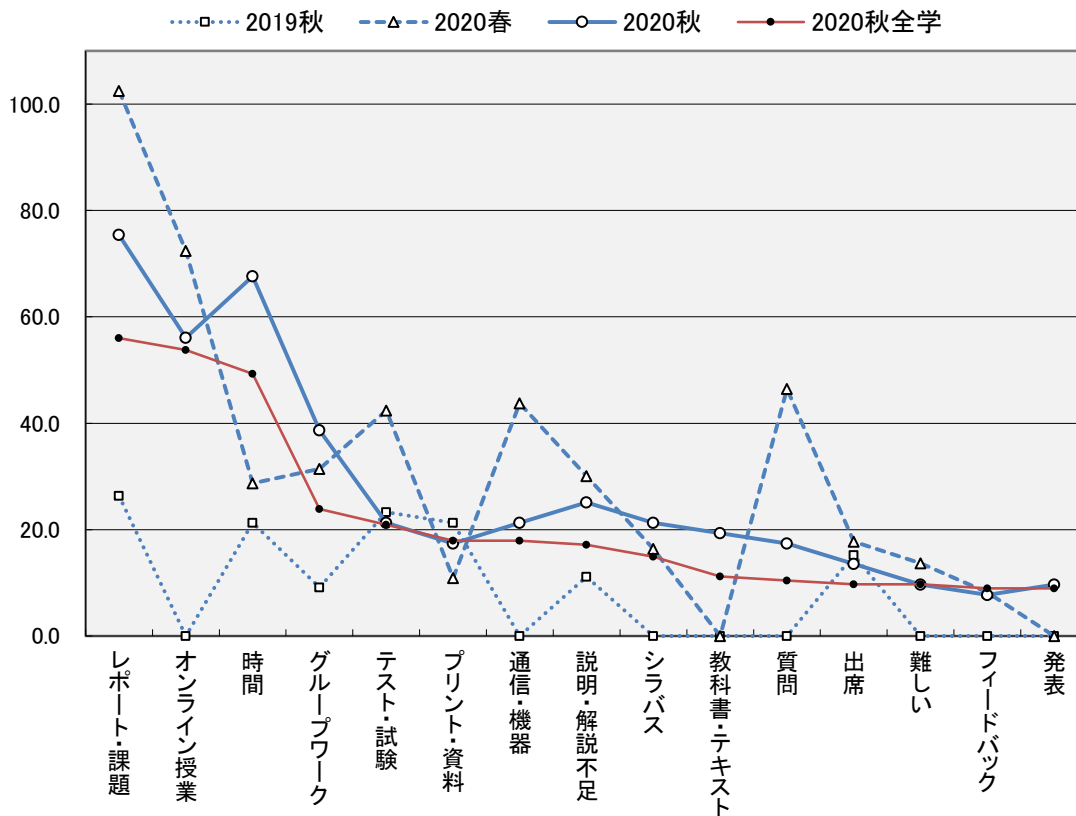


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

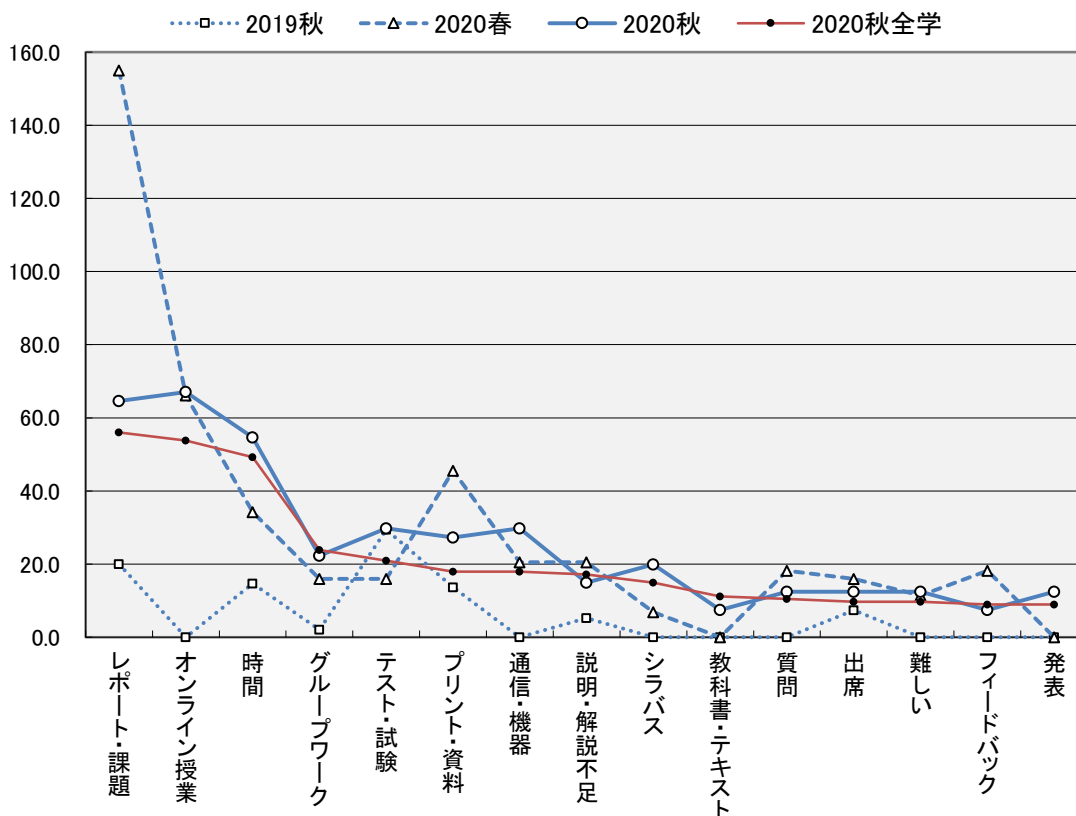


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】学年別

《1年》

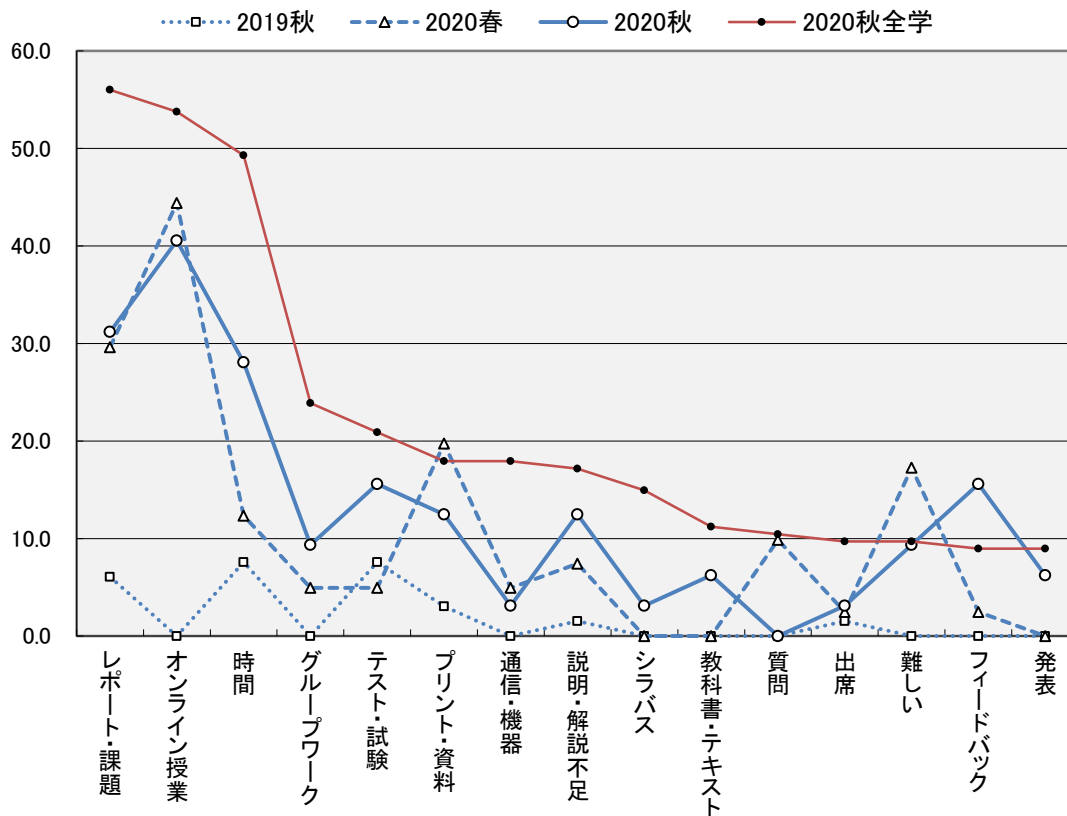


《2年》



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》

